
みんな仲良し

小仁沢 為絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みんな仲良し

【Zコード】

Z8817P

【作者名】

小仁沢 為絵

【あらすじ】

とある私立中学に通う男子7人の日常をそれぞれの視点から紹介します。

泣いて笑って怒って落ち込んで、何だかんだで今日も彼らは生きています。

俺がまだ幼稚園に通つてた頃だつたと思つ。ある年の夏休みに、親戚のおじさん一家総出で家に遊びにやつてきた。

おじさんの子供のハルちゃんは俺より四つ年上の女の子。いつも白いレースのついたふわふわのワンピースなんかを着てた気がする。一番印象に残つているのはハルちゃんの長い髪。背中まであつたハルちゃんの髪は黒くて艶やかで、きれいだつた。

そんなある日、ハルちゃんが突然、髪の毛をぱつたり切つてしまつたのだ。一人でお風呂に入つたときにやつたと言つから、もむろんまわりの人間はそんなこと知らされていなかつた。

背中まであつたハルちゃんの髪は耳の下までになつており、後ろから見るとまるで男の子みたいだつた。

おじさんはただただ呆気にとられていて、おばさんはハルちゃんの勝手な行動をひたすら嘆いていた。

そして更にまわりを驚かせたのが、ハルちゃんのこじんな言葉。

「あたし、今日から女の子やめて、男の子になる。もう髪だつて伸びさないし、ワンピースも着ない。これからは男の子として生きていく」

その時のハルちゃんの凜とした態度を今でも覚えている。あれから九年、ハルちゃんには一度も会つていない。今、ハルちゃんはどうしているんだろつ。

声を掛けられてはつと我に返る。紫音さんが心配そうに俺のことを見ていた。

「大丈夫ですか？疲れたなら先に帰つてもいいですよ」

「え？ああ、大丈夫です」

いかんいかん。単純作業だからつい寝てしまつた。

「三日月祭まであと少しですから頑張りましょうね」

紫音さんはにっこり笑つて、花作りを再開する。

ちなみに三日月祭というのは俺らの学校で毎年三月、卒業式の前々日に行われる、三送会のこと。

三送会と言つよつはミニ文化祭と言つたほうがわかりいいかも。

一年・二年の各クラスで出し物を用意して、卒業して行く三年生に感謝の気持ちを込めて、それを披露するんだ。

うちのクラスはもともと何か飲食店を出す予定だったんだけど、生徒会の審査に落ちて、今回は展示係になつた。

展示係。三日月祭から卒業式までの三日間、校内を紙で作った花や、ちぎり絵や在校生からのメッセージや三年生の思い出の写真やらで飾りつけをする係。校内と言つても主に三年生が使つていた教室前の廊下や体育館など限定された場所だし、大きなものを作るんではなければただひたすら紙を切つたりちぎつたり貼つたり折つたりするだけだから楽と言えば楽。地味と言えば地味。

「こう言つたらあれかもしけませんけど、俺、部活に入つてたわけでもないんで今の三年生に世話になつた覚えとかないんですね。正直、卒業するなら勝手にしてくれつて気分です」

「そう思つてる人いっぱいいますよ。だけどこうして放課後はちゃんと居残つて花を作るんだから、真田くんは真面目ですよね」

「真面目つていうか、サボる勇気がないだけなんです」

一番楽そうな花係を選んだのに、それでサボつたら他の係の奴らに後で何言われるかわかつたものじゃないし。

そう言おうと口を開きかけると突然、携帯が鳴りだした。

「すみません」

「どうぞ」

ディスプレイには新着メールの表記。差出人は母ちゃんだった。内容は『大至急帰つてきなさい』の一言だけ。いつたい何だつていふんだ。

「どうかしました?」

紫音さんに今着た母ちゃんからのメールを見せる。

「何があつたかわかりませんが、とにかくすぐに帰つた方がいいですよ」

「いや、家の母ちゃんのことだから、そんな大した用事ではないと思ひます」

「でも『大至急』につけるくらいですから、絶対何かあつたんだと思ひますよ。ここは私がやつておきますから、お母さんのためにも早くお家に帰つてあげてください」

紫音さんにそう言われ、俺もなんとなく不安になり、作業を切り上げて帰ることにした。

メールには大至急とあったから、学校から家まで早歩きで帰った。本当は走った方が早いんだけど、走るのはあまり得意じゃないから。それでも普通に歩いて帰るよりは早く着く。

いつもなら三十分かけて帰る道のりを今日は一十分で帰った。

「母ちゃん、ただいま」

声をかけても返事はなかつた。もう一度大きな声で「ただいま」を言つてもやっぱり返事はない。

大至急つて言つたから作業切り上げて帰つてきたのに、母ちゃんはいつたい何処にいるんだ。

「おばさんならちょっと前に買い物に出かけたよ」

突然聞きなれぬ声がして立ちすくむ。見れば階段の一一番上に、見知らぬ女が腰かけていた。

相手は俺がいることもおかまいなしに、ポケットからタバコを取り出した。

口に一本くわえ、慣れた手付きで火をつけて、めんべくそつこ煙を吐き出し、極めつけに大きな欠伸を一つ。

相手のあまりのマイペースぶりに思わず脱力した。何か緊張してる俺がアホみたいだ。

階段の下から相手をまじまじと見つめる。

さらさらのショートヘアにコレヨレパーカー、膝の部分が擦りきれたジーンズ。

壁に寄りかかり、足を投げ出して座る姿は氣だるげで、見た目だけだと俺よりも年下に見える。

あ、でも年下ってことはないか、普通にタバコ吸つてゐしな。

「ここは禁煙か？」

話しかけられてまたぎよつとした。一瞬、それが誰に向けられた言葉なのか解らず、後ろを振り返つてしまつた。

「お前に言つてんだよ」

階段の上で呆れたよう相手が言つ。

俺以外に誰もいないんだから当たり前だよな、なにやつてんだ俺は。

「別に禁煙ではないと思つた」

「そうか」

それじゃ遠慮なくといった感じに、また盛大に煙を吐き出した。

女が俺に田を向ける。

「そんなところ立つてないで、自分の家なんだから上がりつてくれれば?」

「うん」

俺の家なのになんて知らない女が勝手に入つてるんだ。階段をゆっくり上がり、女と田が会つて止まつた。

「何?」

「あの、どうやら様ですか?」

俺が言つと女はおもじろそうな顔をして俺を見た。

「まつ、やつぱり解らないか

やつぱり?やつぱり?どうこう意味?

「解らない、です」

「そう。最後にあつたの九年も前だからな。覚えてなくて当然か。

俺は小春。おまえのイトコ」

今、この人『俺』って。女の子なのに『俺』って……いやいや、そんなことはどうでもよくて、

「小春?」

ふつと俺が小さかつた頃の記憶が一部よみがえつた。白いワンピースを来た長い髪の女の子が静かに微笑む姿。「女の子をやめる」と宣言したときの、凛とした態度。

「もしかしてハルちゃん?」

「もしかしなくてもハルちゃん」

なぞの女の正体は俺のイトコのハルちゃんだった。

俺と目が合うとハルちゃんは、何だかおかしそうに笑つた。

「ハルちゃん?」「

「そうだよ」

「本当にハルちゃん?」「

「俺の偽者がいんのかよ?」「

「いや、だつて、」

俺の知ってるハルちゃんは、こんな感じじゃなかつた。

あの頃はスカートしか履かなかつたのに今はジーパンだし、口調だつて『俺』とか言つて、男みたいだし。

何より残念なのは、俺が大好きだつた黒くて長くて綺麗な髪がさっぱりしたショートヘアになつてゐること。あの頃のハルちゃんは、こう・・・ふわふわした感じで、いつだつて女の子らしく、可愛らしかつたのに。

「ハルちゃん、すごい変わつたね。全然わからなかつたよ」「

「そつかあ? てかそれ言つなら、おまえのが変わつただろ。でかくなつたなあ。身長いくつ?」

「え、いくつだろ? 春に測つた時はたしか184とかだつたと思つ」

「184! お前まだ中学生だろ? 何食つたらそんなでかくなんだか」「さあ?」

普通に食つて、寝て、氣付いたらこんな大きさになつてた。

「昔の海生は泣き虫、弱虫、クモだつて触れなくて、いつも俺の後ろついてまわつてたのに。そいつがこんな男前になるなんてな」

ハルちゃんはため息混じりにつぶやいた。

背が高くなつても泣き虫弱虫は昔と変わらない。クモだつて今だに触れない。格好わるいから言わないのでさ。

ハルちゃんの隣り、人ひとり分開けて、座り込む。

「えつと、ハルちゃん、一人で來たの?」「

「そうだよ」

「何で？」

「何で一人で来たの、てことか？」

「違う。9年も会つてなかつたのに、突然来るからどうしたのかと思つて」

昔はお盆やらクリスマスやらお正月やら、何かしらイベントがあるたびに家に来てたのに、あの夏以来まったく連絡ひとつなくなつちゃつて。

「そりやあ、お前との約束を守るためにわ」

「約束？」

約束つてなんだっけ？俺、何かハルちゃんと約束したっけ？

「何だよ。最後に会つた日に約束したじゃん。まあ覚え得なくて当然か、9年前の話だし、海生も小さかつたし」

「それにそれだけが理由つてわけでもないし」とぶつぶつ言いながらハルちゃんは煙草を足もとの「一ラの缶の中に押し込んだ。

「俺、来ない方が良かつたかな」

「そんなことないよ！」

俺がハルちゃんとした約束を忘れたせいでハルちゃんがショックを受けたのかと思って慌てて否定した。

「俺、一人っ子だし、友達少なかつたし、あの頃ハルちゃんが遊んでくれて本当に嬉しかつたんだよ。俺にとつてハルちゃんは優しいお姉さんであり、かけがえのない友達でもあつたんだ。それなのに会えなくなつてすごく寂しかつたんだよ」

もちろんついさつきまでハルちゃんのこと忘れてたけど、あの頃本当に寂しかつたのは嘘じやない。

「海生だけだよ。そう言つてくれるの」

ハルちゃんは微笑み「ありがとな」と言つた。

「俺と久しぶりに会えて、嬉しいか？」

「うん、嬉しいよ」

出来たらあの頃のまんまのハルちゃんに会いたかつたけど。

「じゃあ、俺がしばらくここにいるつて言つたら海生は嬉しい？」

「え？」

「俺、じざいへいじに置いてしまったから」

「何で？」

「家でてきたから」

「家出てきた？」

ハルちゃんは新しい煙草に火をつけて言った。

「家出してきたんだよ。勢いで飛び出してきたんだけどさあ、行くところないからまいつちゃって」

「ハハハ」と笑いながら話すハルちゃんは、たいしてまいつているように見えない。と、言つかれつて笑うような話じやない気がする。

「何で！？」

俺、バカの一つ覚えみたいに、せっせかから「何で」ばっか繰り返してる。だけど仕方ない、ハルちゃんの「つ」と突拍子のないことばっかりなんだから。

「何で家出なんかしたの？」

「そーゆーお年頃だから」

「ハルちゃんね、俺は真面目に聞いてんだから、」
その時玄関のドアが開き、大きな買い物袋を手に下げた母ちゃんが入ってきた。

「あら、海生。帰つてたの。そんなどこかに座り込んで何してるので？」

「想い出話に花を咲かせてたんですよ」

俺の後ろからハルちゃんが顔を出して言った。

「そう。9年ぶりだものね。ハルちゃんが家に来るの・・・海生、感動のあまりハルちゃんに抱きついたり小さい子みたいに泣きわめいたりしなかつた？」

「するわけないだろ！」

「何でもいいから降りてらっしゃい。ケーキ買つてきたから一緒に食べましょ」

母ちゃんが奥に引っ込むのを見届けてから、ハルちゃんに訪ねる。

「母ちゃんは、ハルちゃんが家に来てるの知ってるんだね」

「あたりまえだろ。おばさんがいなかつたら、誰が俺をこの家に入

れるんだよ」

そりやそうだ。

「母ちゃんは、ハルちゃんが家を出てきた理由知ってるの?」

「知ってるよ」

「何で?」

「俺が言ったから」

「そうじゃなくて、『何で俺には教えてくれないの?』の何で」

「海生にも言ったじやん」

ハルちゃんはニヤリと不敵そうに笑い、

「そーゆーお年頃だから」

と言った。

何だかなあ。

母ちゃんはハルちゃんから本当に「やーゆーお年頃だから家出した」としか聞いていなかった。

「それだけ聞いて、二つ返事でハルちゃんの申し出を受け入れたのかよ」

「あら、何か問題でもある?」

近所でまずいと評判の、ケーキ屋『絵留』のメロン小豆ケーキをおいしそうに食べながら母ちゃんは言った。母ちゃんは味覚だけではなく、頭までおかしくなってしまったのか。

「普通何か言わない?」

「何かつて何?」

「何かもっと、いろいろ詳しい事情聞いたりさ、お家の人が心配するから帰った方がいいとか」

「海生、俺がここにいたら邪魔か?」

ショートケーキ(これは割とおいしい)をついついていたハルちゃんが、少し哀しげな目で俺を見たもんだから慌てて否定する。

「そんなことないよ!ハルちゃんが家に来てくれて、俺は本当に嬉しいよ」

「俺も嬉しい」

優しい目をしたハルちゃんはじっと俺を見つめて、「海生のその素直で真っ直ぐなところは9年前とちっとも変わらないのな。何か嬉しい」

そんなことを言った。

「嬉しいなら問題ないじゃない。何がそんなに気にくわないのよ?」

「だから別に気にくわないとかじゃないんだって。ただちょっと、ハルちゃんの家出の理由が気になるだけで・・・」

ちらりと視線を投げ掛ける。

「母親と喧嘩したからだよ」

俺とは田を畠わざずにケーキにフォークを突き刺してハルちゃんは静かに言った。

「ハルちゃん、お父さんの部屋片付けたから荷物移動させでいいわよ。お父さんの部屋はわかるわよね？」

ハルちゃんは頷き、席を立つ。

ハルちゃんがいなくなるなり、俺はなぜか母ちゃんに頭をはたかれた。

「お馬鹿」

「なんだよ、いきなり」

「あんたはもう少し空氣を読みなさい。しつこく家出の理由なんて尋ねて」

「だつてハルちゃんが『そーゆーお年頃だから』なんてふざけたこと言って、はぐらかすから」

「あの真面目なハルちゃんがそんなことこいつくらいだもの、人には言えない深刻な理由があるにきまつてるじゃないの。あんたそんなこともわからないの？」

母ちゃんに言われてハツとした。

「そーゆーお年頃」だなんて話をばぐらかすハルちゃんの気持ちを俺は全然考えてなかつた。

「だからあんたはモテないのよ」

「ハルちゃんに謝つたほうがいいよな？」

「そう思うならハルちゃんを手伝つてきなさい」

使つた食器をまとめ、母ちゃんは台所に消えていった。

父ちゃんの部屋を覗き込むと、ハルちゃんは畳に座つていた。

座つていたというより、うなだれていたといつまづが正しいのかかもしれない。

胡坐をかいて、肩を落として、下を向くハルちゃんはだかすごく疲れているように見えた。

「ハルちゃん？」

声をかけるとハルちゃんはぱつと顔をあげた。

「おう、海生か。どうした？」

「いや、何か手伝うことあるかなって思つて」

「そうか。ありがとな。でも大丈夫。荷物つて言つてもこれだけだから」

そう言つてハルちゃんはそばに置いてあつた大きなドラム缶型のバッグを叩いて見せた。

「ならないんだけど。あのや、」

「うん」

「さつさば」めんね。俺、余計なこと聞いちゃつたみたいで「おばさんになんか言われたのか」

「うん。空氣読めつて」

「いいよ。別に気にしてないから」

ハルちゃんが笑つて許してくれたからよかつた。

と同時に俺の中で「何でお母さんと喧嘩したの?」という疑問が浮かんだ。

もちろんせつとき母ちゃんに怒られたばかりだから口にする気なんてさらさらなかつたんだけど、ハルちゃんにはわかつたらしい。

「性転換手術をしたいって言つたんだよ」

今のは聞き間違いだろうか?

「何だつて?」

「性転換手術をしたいって言つたんだよ。したら家のババアがキレてさ。両手に皿持つて投げつけてくんだよ。親父と姉貴たちが止めてくれなかつたら、たぶん顔中傷だらけだつたよな。で、逃げ出してきたつてわけ」

「それって何処までが本当の話?」

俺がそう聞くと、ハルちゃんは平然と、

「全部本当の話だけど」と言つた。

「あ、そつ」

いきなりそんな話されて「そつなんだー」と納得できるほど俺の頭は柔らかくない。

聞き慣れない言葉もいくつかあった。

性転換、ババア、両手に皿・・・ババア？

「ハルちゃん、自分のお母さんのことばババアなんて言ひるのはよくないよ」

「そこを突つ込むのか」

「いや、他にも聞きたいこと、言わなきゃいけないことがたくさんあるつてのは解つてるんだけど、今、何かそこがすごい気になつた」

「だって普通自分の母親のことばババアなんて呼ばないだろ。」

「ていうか、それより何で性転換？そんなこと言われたらおばさんもびっくりするし、怒るのも当たり前だよ。氣まずくなる前に謝つた方がいいよ」

「何で俺が謝らなきゃいけないんだよ？」

少し、ハルちゃんの声に怒氣が混じつたのを感じた。

「だつて喧嘩の原因はハルちゃんにあるじゃないか。性転換手術したいだなんて、きっと大変なことだと思つ。そんな軽々しく冗談みたいに言つていいことじやない。それに、ハルちゃんは女の子じゃない。せつかく女の子に生まれたのに、何でわざわざ手術してまで男になる必要があるのさ。そんなこと言つたらおばさんも悲しむよ」

「お前にはわかんねーよ」

ハルちゃんが真つすぐ俺を見る。俺のことを見下すような、冷たい目をしていた。

「お前みたいに恵まれた奴には、俺の気持ちなんて解らないんだよ」

「ハルちゃんはそっぽを向いて、それきり何も言わなかつた。」

何だかんだで昨日はハルちゃんとそれきり口を利かなかつた。風呂から出てハルちゃんの部屋を覗いたときにはもう灯りは消えていた。時間はまだ九時半くらいだったと思つ。まさかこんな早く寝るなんて思つてなかつたから何か拍子抜けして、俺も早々に床についた。

朝、まだ寝呆けてふらふらな状態で下におりていくと、ハルちゃんがいつも俺が座る席の隣の席に座つて新聞を読んでいた。俺が少し控えめに、「おはよ」と言つと、ハルちゃんは新聞から目を離し、笑顔で「おひ」と返事をした。

昨日はなんか怒つてゐるのかと思つてたけど、俺の気のせいだつたのか。

いつものよつに始業十五分前に学校に行くと、先に来ていた紫音さんが笑顔で俺を迎えてくれた。

「真田くん、おはようございます」

「おはよつござこます。昨日は先に帰つちやつてすみませんでした」「いいえ。気にしないでください。至急の用事とやらは大丈夫だつたんですか?」

「至急つて言つても別にたいした用事じやなかつたんすよ。イト口が遊びに来てて相手をさせたかったみたいで」

それから俺はハルちゃんのことを紫音さんに話して聞かせた。話をしていく思い出した。そついえば家に帰る前、教室でちょっと居眠りしたとき、ハルちゃんの夢を見たつて。あれはいわゆる虫の知らせ的なものだつたんだろうか。

「ハルさんのこと気になりますね。性転換や家出もやつですか？」
真田くんと交わした約束でいうのも

「俺は全然覚えてないんですけどね」

「ハルさんに最後にあった日、真田くんの家でいつたい何があったんですか？」

「覚えてませんよ。まだ五歳だったんですから」

ただあの日、何か怖いこと、嫌なこと、悲しいことがあったって言うのは覚えている。

その何かが原因でハルちゃんが突然「男の子になる」と言いだしたものなんと覚えている。

ただそれが何だったのか。

「嫌なことはすぐに忘れる質なんです、俺は。だからハルちゃんに会えなくなることがわかつたあの日のことを忘れちゃったんだと思います」

紫音さんは感心したように、「とてもいい性格ですね。羨ましいです」と言つたが、本当は俺がただの切り替えが早い単純バカなだけなんだけど。

チャイムが鳴り、先生が入ってきたので紫音さんとの話はそこで打ち切つた。

突然だが、俺は園芸部に所属している・・・と言つてもまだ正式な部としては認められてないんだけど。

部員は一人。俺と、一年時のクラスメイトで、俺が園芸部に入るきっかけを作った部長の桜井亮揮。

当然だが、たつた一人しかいない園芸部はたいした活動はできない。部室なんてものもないし、正式な部として認められていないため生徒会からの補助金だって出ない。

ついでに言つと、俺ら園芸部はある理由から生徒指導部の先生方にあまりよく思われていない。特に部長の関口先生は俺らを目の敵にしていて、授業で会つたり、廊下ですれ違つたりするだけでも必ず一言一言嫌味を言つてくる。時にはあからさまに園芸部の活動を邪魔したり、潰しにかかりたり。

この前だつて桜井と一人、生徒指導室に呼び出されて約一時間俺たちがやろうとしていることがどれだけ無駄なことか説教も交えて説明された挙げ句、「それでも園芸部を続けたいならもつと部員を集めめて正式な部として認めてもらうように努力しろ。例えば進んで奉仕活動をするとか。そういうえば、体育館裏の草がかなり伸びていたな。きっと通りかかった生徒や先生方から興味を持つてもらえるぞ」

体育館裏なんて滅多に人が通らないのに、そんなところで草むしりをして誰が園芸部に興味を持つんだよ。そう言い返してやりたかったが、逆らつたら待つてるのは廃部の一文字。結局、関口先生の言う通り体育館裏の草むしりをした。もちろんその日、俺らが草むしりをしてる最中に体育館を通つた奴はいなかつたし、その後、園芸部に入りたいと言つてきた奴もいない。これこそ関口先生の言うところの無駄つてヤツだと思う。

でも桜井は、「無駄なんてことはねーよ。体育館裏はすつきりし

たんだし。用務員のおっさんは喜んでくれたんじゃねえの?」だつて。桜井のこーゆーとこ見習わなきやなと思う。

昼休み終了間際、いつものように裏庭に行つた。いつからか俺たち一人は交替で裏庭の見回りをしている。天気のいい昼休みにはお弁当やら購買で買ったパンやらを持った生徒達が裏庭に集まつてくれる。飯を食つたらゴミが出るのは当然だが、出たゴミを自分で片付けるのは今の世の中当然でわけではないらしい。だから昼休み終了間際に俺たちがゴミを片付けるため裏庭を見回つている。裏庭は俺たち園芸部のグラウンドみたいなものだから。

今日は珍しくゴミが落ちてない。雨が振り出しそうな天気だったし、みんな裏庭に来なかつたのかも。

そう思つてたら、突然頭に軽い衝撃が来た。
かぽんと間抜けな音をたてて空のペットボトルが地面に落ちる。何なんだ。

「おや、あたっちゃんたかい」
ぎょっとして振り返るとペットボトルを投げた格好のまま微笑む一人の少年。同じクラスの倉本礼央だつた。

「やあ真田。今日も裏庭の見回りだ」苦労をまだね「倉本は爽やかな笑みを浮かべこっしぐ歩いてくる。

「うん。まあ」

落ちているペットボトルを拾い上げ倉本に渡す。

「ペットボトルは投げるものじゃない。ゴミはちゃんとゴミ箱に捨てようね」

「ここはゴミ箱みたいなものだろ。毎日清掃係がゴミを集めに来るんだから」

倉本はそう言つてペットボトルを受け取るのを拒否した。清掃係てのは俺と桜井のことだろつ。

「しかし物好きだね。こんなとこ毎日見回つて掃除したつて誰かに感謝されるわけでもないのにさ」

「別に感謝されたくてやつてるわけじゃないよ。ここは園芸部のグラウンドみたいなものだから」

「ああ、裏庭に花壇を作ろうとしてる奇人変人部。馬鹿なことしてるよね」

一部の女子から絶大な支持を得ている愛くるしい笑顔（人呼んでエンゼルスマイル）を浮かべ倉本はさらりとひどいことを言つた。

「花壇のために人を集めて正式な部にして生徒会の予算を勝ち取ろうとしてるんだっけ？馬鹿じゃないの？君たちはよっぽど暇なんだね。そんなことしても時間の無駄。それよりも他にもっとやることあると思うよ？」

畳み掛けるような言い方。言葉につまつてしまつ。いつものこと

だけど、可愛い顔して倉本は本当に言つことがキツい。

「真田。君たち奇人変人部が周りの人間からなんて言われてるか知つてる？」

黙つて首を横に振る。知らないけど、想像はつく。

「あいつらは頭がおかしい。生徒指導部を敵に回してまで花壇を造りたいなんて訳わかんないってさ。僕も同感。君たちは気違ひじみてるよ」

頭がおかしいとか気違いたか、何でたかだか学校の裏庭に花壇造りうとしただけでそんな言われなきやいけないんだろう。花壇を造るのってそんなにいけないことなんだろうか。

「ねえ、真田。君はもつと自分の立ち位置を考えたほうがいいよ。周りの人間が君たちをどう見ているか考えたほうがいい。背が高い以外になんの取り柄もない平凡を絵に描いたような君が、学校一の悪党とつるんで裏庭に花壇を造ろうだなんて。いい顔する人なんていないにきまってるじゃないか」

また何か失礼なこと言われた気がしたけど、倉本のこの程度の嫌味なら慣れてるから怒る気にならない。

「桜井が気の弱い真田を脅して無理矢理園芸部に入部させたんだって。桜井が真田を入部させたのはもちろんパシリにするため、財布代わりするため、色々な悪事を手伝わせるため、ストレスが溜まつたときのサンドバックの代わりみたいな話もあった。こんな程度ならまだいいよ。君が桜井とつるんで注目されたり、畏怖の目で見られていることが気に食わない奴らの中には、真田は普段おとなしそうに見えるけど、実は桜井以上の不良で、桜井と一人でヤバいものを造るために園芸部なんて発足したんだって言つ輩もいるんだよ」

「ドラマの見すぎなんじゃないの？普通の中学生がそんな学校の花壇でヤバいものを造るわけないじゃないか」

口ではそう言つてみたものの内心ショックだった。全然気付かなかつたけどそんなふうに見られていたなんて。

怒つたり落ち込んだりはしない。そんな権利俺はない。でも心のなかの動搖は倉本にわかつてしまつたらしい。目が合つた瞬間、倉本は口元を歪め、満足そうに頷いた。

「だから言つてるんだよ。君みたいな地味でなんの取り柄もない、ウドの大木の代名詞みたいなへたれが妙なことをするんじゃないいつ

て。頭の悪い真田にはわからないかもしないけどね、この世界には順位が存在するんだよ。いついかなるときも常に自分の順位を把握し、自分より格上の者には逆らわず、格上の者よりも目立たず、日陰に隠れて地味におとなしく生きていかなければならんんだ。自分の順位を守ることはつまり秩序を守ることでもある。今の君は秩序を乱している。秩序を乱したものはこの社会から追放される運命なんだ。追放ってどういうことか、頭の悪い君にも想像はつくだろう？悪いことは言わない、追放されたくなかったら、桜井とはすっぱり縁を切つて地味に生きるんだな」

「わかったかい？」と聞かれたけど、すぐには返事が出来なかつた。わかつたようなわからなかつたような、曖昧な感じだつた。

「倉本は俺に『田障り』だつてことを言いたいのか?」

「言いたいんじゃなくてさつきからそう言つてるんだよ
どつちにしろひどいこと言つてるには変わりない。」

「倉本つて意地悪だよな」

「それは心外だな。僕ほど心優しい人間なんてこの世界に一人と存在しないと思うけど」

「倉本は俺のことが嫌いだからそうゆう」と言つのか?「

倉本はわざとらしく肩をすくめ、困つたように笑いながら、
「何がいいのかよくわからんんだけど?」

「倉本は俺のことが嫌いだから言わなくていいような意地悪を言
うんだるうつて。倉本の言うとおり、俺は頭悪いし、地味だし、へ
たれだけど、はつきり言われればそれなりに傷つくんだよ。人を傷
つけるようなことわざと言つて、倉本はまるで俺が傷つくの見て楽
しんでるみたいだ」

「そのとおりだよ」

目を細め、口元を歪め倉本は愉快そうに笑つ。

「僕は人の傷ついた顔見るのが好きなんだよ。僕が君に言葉を投げ
付ける。君は僕の言葉に傷つぐ。僕が君を傷つける。僕は言葉で君
を支配したんだよ。君が傷つくことにより、君は僕に敗北を認め、
僕の前にひれ伏したも同然だ。言葉というのはいいね、いつでもど
こでも簡単に相手を屈服させることが出来る。素晴らしい、とても
危険な武器さ」

なんだかすげく楽しそうに怖いことを語る倉本は、その見た目の
麗しさもあり、「愛くるしい天使」というより「妖艶な悪魔」とい
つた感じだった。

「だけど、勘違いしてもらっちゃ困るんだよね」

妖しげな笑顔をしまい、また愛くるしいエンゼルスマイルを浮か

べた倉本は、

今までのこと何でもなかつたかのよう?、「ちよつとやうじしゃが
んでくれる?」と言つた。

「は? 何で?」

「いいから。しゃがんで」

いつたい何をするつもりなのかわからなかつたけど、とりあえず
言われた通りしゃがみこむ。

倉本は俺の前に立ち、俺の手からペットボトルを取り上げると、
腕を高く振り上げてペットボトルを頭に叩きつけた。

空の500のペットボトルだったから、叩かれてもそこまで痛く
はなかつたけど、とにかくびっくりして茫然と倉本を見つめてしま
つた。

倉本はエンゼルスマイルを浮かべながら、「今、何時だと想つ?」
と尋ねてきた。

「え?」

「時間。今何時?」

「ええっと・・・一時半だな」

「僕が真田の姿を見つけてここに来たのが1時20分くらい。つま
り僕がここに来てから約10分経つたわけだよ。さて、これが意味
することは何かな?」

「何つて?」

何もないだろ、倉本と俺が約10分ここで立ち話をしたってだけ
の話。

「お前、本当に頭が悪いね

倉本の口調が変わつた。嫌な予感がして、立ち上がるうとした瞬
間、倉本に右の耳をこれでもかとこうくらうに引っ張られた。

「痛つ! 倉本、耳!」

「このほうがよく聞こえるだろ? いいかい、真田。僕が今からお前
にとつても大事な話をしてやるからちやーんと聞くんだよ? それか
ら、僕が話し終わるまでは口を開いたらいいけないよ? 万が一僕の話

をさえぎるような真似したらこれで口を塞ぐからね？』

500円のペットボトルをちらつかせながら、倉本は爽やかな笑顔でとんでもなく恐ろしいことを語つ。俺は自らの口を手でしつかり、無言で首を縦に振る。

『いいか？昼休みに購買までパンを買いに行つた僕が、偶然お前の姿を見付けた。無視するのも可愛そだからと、ついでに言ひながら声をかけるだけじゃ面白みがないからと、ペットボトルを投げるという、ユーモア溢れるイタズラを提供してやつた。そのうえ、何の得もないのに10分もの間話相手になつてやつたんだよ、馬鹿で阿呆でのろまで団体でかいわりに蟻んこみたいに気が小さい、愚かなお前の相手をしてやつたんだよ、この僕がつ。その僕に対して何て言つた？『倉本は意地悪だよな』。は？お前どれだけ頭が悪いんだろうねえ？菩薩のように慈悲深い僕がお前のことを心配して忠告してやつたのに、言ひにことかいて『嫌いだから意地悪言つんだら』とは。まさに失礼千万、無礼極まりない所業だよ』

倉本はそこで一度言葉を切り、俺の耳元に口を寄せると、おぞましいくらこに低くじすの利いた声で、

『この大馬鹿者が。身の程をわきまえろ』

そう言つてようやく倉本は手を離した。

耳は解放された後もじんじん痛いし、笑顔で俺を見下ろす倉本が怖くて思いがけず涙が出てきた。

『さて真田、ここまで言つたんだから頭の悪いお前にもわかるだろう？僕に何か言ひことあるよね？もちろん『意地悪』以外の言葉でね』

『え？』

爽やかな笑顔を浮かべる倉本につられて、俺も引きつった笑みを浮かべた。

何か言わなくちゃいけないらしい。だけどその何かがなんなのかわからない。

『はい、時間切れ』

まだ5秒くらいしかたつてないのに、やつと解放されたと思つたのに、今度は嫌というほど両頬の肉を真横にひっぱられた。

「何でかな、何でわからないかな。命短い花の『』とし、十代の輝ける時間は一分一秒も無駄に出来ないんだよ。さつき言つたよね？頭の悪い君の話に慈悲深い僕は10分も付き合つてやつたんだよ？その僕に『わたくしのような愚図のためにレオ様の貴重なお時間を割いて頂き、感謝の言葉もございません』ぐらい言えないのは何でなの？ひょつとしてアレ？真田は僕に頬の肉をひっぱられるのが好きなのかな？きっとそうなんだね。真田が望むならいつまでもこうしてやつてもいいよ。なんだか僕もすつ『』い楽しくなつてきたからね」

いつの間にか妖しい悪魔のよつな微笑みを浮かべていた倉本はなんとも言えず、楽しそうに俺の頬を引っ張る。痛いのに、涙出るくらい痛いのにやめようとしてくれない。

「ね、真田。痛い？それとも嬉しい？」

痛いに決まってるだろ、馬鹿野郎！なんて心の中で叫んでみても倉本に伝わるわけがない。喋りたくても倉本に頬の肉をひっぱられてるから喋れない。痛いんだよ、本当に。やめてくれよ。誰か倉本にこの想いを届けてくれ！

「何してるの？」

そんな声とともに、突然パッと手が放され、一回目の尻餅をついた。三回目を恐れ、慌てて立ち上がり倉本から離れる。

「そんなに嫌がらなくてもいいのに」

慌てて逃げた俺を見て、倉本は冷ややかに笑う。さつきまでの危険な雰囲気は消えていた。

「何してるの？」

声がしたほうを見ると同じクラスの花菱聖が田を真ん丸くして、じーっとこっちを見ていた。

「やあ、花菱。昼休みも生徒会の打ち合せかい？ 大変だねえ」

「そうでもないよ」

花菱はとことこ歩いて、立ちはだかるように俺と倉本の間に入り込む。爽やかな笑顔を浮かべた倉本の眉が一瞬だけピクッと動いた。「まさかとは思うけど、レオ、海生のこと苛めてるんじゃないよね？」

「何でそう思うんだい？」

「だって、さつき海生の頬を引っ張つていたじゃないか」

「あれはスキンシップだよ。友好の証さ」

「でも、すごく痛そうだったよ」

「真田は痛いのが好きなんだよ。ねー、真田？」

俺に変な趣味があるみたいな言い方するなて言い返したいけど、倉本の楽しそうな笑顔には妙な圧力があった。

「そうなの、海生？」

眼鏡の奥の無垢な目で花菱は俺を見上げた。答えるわけにもいかないから、適当に笑つてごまかす。

「海生、涙ぐんでるよ」

「悦びの涙だよ。真田は痛いのが涙が出るくらい嬉しくて大好きな

のや」

「そうか、 なんだ。 痛いのが好きで嬉しいだなんて、 すいね。
僕は痛いの大嫌いだから羨ましいな」

無邪気な花菱は心底感心したようだ。「すいなあ」と繰り返す。
別にすげくないし、 それじやあただの変態だよ。 何でそんな簡単に
倉本の言つこと信じちゃうんだよ、 花菱。 何か変だなとか思わない
のか。

「でもよかつた。 つつきつレオが弱い者いじめしてるとと思つて
心配しちゃつたよ」

弱い者いじめ。 すか俺は弱い者いじめを受けていたのか。 いや、
わかつてたけど。

「失礼な奴だな。 僕はこいつを通りかかったら真田がいたから声をか
けただけだよ」

「そうだよね。 レオがそんな酷いことするわけないよね。 「めんね。
海生も邪魔しちゃつたみたいで悪かつたね」

「あ、 いや」

俺としてはむしろ助けてもらつて感謝したいくらいだよ。 倉本の
前じやそんなこと口が裂けても言えないけどさ。

「ところで、 海生はこんなところで何してるの?」

「真田は裏庭の見回りに来たんだつて」

倉本の言葉に花菱は目を丸くする。

「裏庭の見回り? 何で?」

「真田が園芸部に所属してるからだよ」

「園芸部? 海生が?」

「そうだよ。 花菱、 知らなかつたの?」

自分で言つのはあれだけ、 けつこつ有名な話だと思つてたのに。

「学園一の不良・桜井くんがなにやら良からぬ企みをしていて、 そ
のために園芸部を設立しようとしてるつてのは知つてるよ。 そ
いえば最近桜井くんが舍弟を手に入れて、 園芸部設立に向けて手伝わ
せてるつて話を聞いたけど、 海生が園芸部にいたつてのは初耳だな
」

首を傾げたまま一秒、花菱は田を見開き、

「そりゃ！ 桜井くんの舍弟て海生のことだつたんだね！」

「舍弟つて、」

そんな無邪気に言わないでくれ。倉本は花菱の言葉に満足そうに笑っている。

「すごいな、海生。まさか桜井くんの舍弟が海生だつたなんて。みんなの注目独り占めだね！ うちの顧問の関口先生も園芸部には一日置いてて、『あいつらいつになつたら園芸部を諦めるんだ。しぶといやつらめ』てぶつぶつ言つてるよ」

そういうのつて一日置いてて言つんだらうか。

「でも何で桜井くんの舍弟になつたの？ 何がきっかけで桜井くんと知り合つたの？ あ、そうか。海生と桜井くんは一年の時同じクラスだつたんだよね。それで、園芸部でどんな活動してるの？ 正式な部として認められてないからたいした活動出来てないつて聞いたけど、その辺は大丈夫なの？」

田をきらきらさせながら花菱は迫つてくる。まるで新しいオモチヤをもらつた子どもみたいだ。

「真田、花菱。楽しそうに話をしているとい悪いんだけどさ、もうすぐ予鈴が鳴るよ」

校舎からチャイムの音が聞こえる。

「僕は先に行くよ。英語準備室に今田の授業で使うプリント取りに行かなくちゃならないんだ。真田と花菱も早く教室に行つたほうがいいよ」

前に向き直るその瞬間、倉本が俺を見てクスッと笑つた。すごい意地の悪い笑い方だつた。

「レオはすごいいい子なんだよ

「は？」

何の脈絡もなく、花菱は突然そう言つた。

花菱は俺と田が合つと、一〇一〇と人懐っこい笑顔を浮かべてもう一度、

「レオはこい子なんだよ」

「そう、か」

去りゆく倉本の後ろ姿に視線を投げ掛ける。倉本がなんの反応も示さないってことは、たぶんこの距離じゃもつ聞こえていなってことだわ。」

「え、それで、それがどうかしたのか？」

「別に。ただ海生に言つときたかつただけだよ」

「ああ、そう」

花菱が何を言いたかったのか、どういう意味なのか、よくわからなかつたけど、もう倉本の話はしたくなかったから聞かなかつた。

「そういえば、海生。今日は部活あるの？」

また急に話が飛んだな。

「あるよ

「遊びに行つてもいい？」

「は？」

「ダメ？」

「ダメじゃないけど、」

「じゃあ、決まり。部活行くときに僕も連れていいってね。楽しみだ

なあ」

「じどもみたいにはしゃこだ声を出し、花菱は嬉しそうに微笑む。

今日も今日とて例のごとく関口先生から嫌がらせみたいな雑用押しつけられたから、園芸部らしいことは何もないのに、そんなに楽しみにして後でがっかりしなきゃいいけど。

放課後、花菱をつれて裏庭へ行つた。いつも必ず授業が終わった後、ここに集合することになっている。一度裏庭に集合して、出来ることがあつたら活動、出来ることが何もなかつたらその日は解散。

今日は関口先生から体育館の脇にある、使用禁止のトイレの掃除をするように言われている。何で使用禁止のトイレを掃除する必要があるんだよという文句は飲み込み、いつものとこに集合など約束したのは一限終了後の休み時間だつた。

眞面目で几帳面なあいつが約束を忘れるわけがないのに、裏庭に来てから30分、桜井はまだ現れない。

「どうしたんだろうね、桜井くん

「わからない」

「忘れちゃつたのかな」

「桜井に限つてそんなことはない」

「じゃあ、トイレ掃除が嫌で逃げ出したとか」

「もつとないな。あいつはそんな無責任なヤツじやない」

「ふーん。そうなのか」

視線を感じて、顔を横に向ける。花菱が二口二口笑いながら俺を見ていた。

「なに？」

「海生は桜井くんのことすくべ信頼してるんだね

「へ？」

信頼。まあ確かに同じ部活の仲間だし、桜井は良い奴だし、信頼はしてるナビも、そんなのわざわざ口に出して確認するものでもないだろ？。

「花菱は恥ずかしくならないのか？」

「ん？ 何が？」

「『信頼してるんだね』って。昼間だってレオのこと『いこ子』とか言つてたし、なんかその表現が気になつて。聞いてると時々恥ずかしくなるというか」

「そりかね? じゃあ、言い換えよつか」「空を見上げ、うーんと唸りながら花菱は代わりの言葉を考えだした。

「桜井くんと海生は『仲良し』なんだね。これでどう?」「いや、その、」

仲良して、中一男子が口にする言葉じやないだろ。

「ダメか。じゃあ、次はね」「

「花菱、もういいから」

「そう? まあとにかく海生は桜井くんと仲良しで、信頼しあつて、いい友達でなんだか羨ましいなって話さ」

もういいって言つたのに。最後にまとめるなよ。

「桜井くんが来るまでまだ時間がかかりそただからさ、一人で先に掃除しちやつたほうがいいんじゃないかな」

「え? いいよ。花菱は帰りな。きっともう少しすれば桜井来ると思うし、とりあえず俺一人で掃除するから」

園芸部でもない、ましてや関口先生が顧問を務める生徒会の会長さまでトイレ掃除なんてさせられない。

「気にしないでいいんだよ。僕が好きで言つてるんだから。ただひとつと桜井くん待つてるだけじゃ時間がもつたいたいですょ」「

「いや、でもや」

「じゃあ、じつじよつ。今日僕は仮入部にきたつてことで、園芸部の仕事の一巻として、トイレ掃除もする。ほりこれなら問題ないよ」「そりかね?」

「そりだよ。話してる時間がもつたいたい。早く体育館に行こう」「声をかける間もなく花菱は体育館に向かつて走つて走つてしまつた。

あんな勢い良く走つていて、あいつ途中で転ばなきゃこいいけど。

用務員のおじさんから掃除に必要な道具、バケツやらモップやら雑巾やら、ついでにマスクとゴム手袋を借りて、俺たち一人はトイレ掃除を開始した。

使用禁止のいわく有りげなトイレなんていうから、汚くて臭くて目もあてられないひどい有様を想像してびくびくしていたのに、実際に入つてみると以外と綺麗でなんだか拍子抜けしてしまった。ここ一年ばかり使われていないとか言ってたつて。使う人がいないとトイレが汚れることもないか。

「ねーねー、何でこのトイレ使用禁止になつたか知つてる?」

「花菱は知つてるのか?」

「そりやもちろん」と花菱は得意げに笑つた。

「あのね、夏の暑い日にこのトイレの前を通るとね、とてもおぞましい声が聞こえるんだよ。誰かが苦しそうに呻いてる声が」
たぶんこれは怖い話なんだろうけど、二口二口顔の花菱がお伽話でも聞かせるみたいに話すから、ちつとも怖くない。しかし、怖い話が苦手な俺にとっては逆にありがたい。

「本当の話か?」

「本当だよ。何人の人が聞いたつて話だし、僕だってこの耳でばつちり聞いたもの」

「うえーまじかよ。どんな声がしたんだ?」

「なんかね、二日酔いのおじさんがトイレで便器にしがみつきながら胃のなかのものを必死に吐き出してる時の、あの苦しそうな声だつたよ」

「なんじやそりや」

「あんまり苦しそうだつたから心配になつて、中を覗き込んで『大丈夫ですかー?』て声をかけたんだ。少しだけ荒い息遣いが聞こえ

たんだけど、すぐにぴたつとやんじゃって、待てど暮らせど誰も出てこなかつたから、おかしいなと思つて先生に報告したんだ。そしたら僕の他にもあのトイレはおかしいって言つてる人たちがいたらしくて、先生たちがすぐにトイレを調べに行つたんだけど、トイレには誰もいなくて、残つていたのは胃液特有のあの酸っぱい香りだけだつたんだつて

「やーめーる。怖いうえに汚い話は嫌いなんだ」

「そんなことがあつて以来ここは使用禁止になつたんだよ」全然知らなかつた。というか知りたくなかつた。そんな話聞いちやつたら落ち着いてトイレ掃除なんかできないじゃん。

「あの声の主は人間だつたのかな。それとも人ならざぬ何かだつたのかな」

「花菱、やめろつての」

「「めん」「めん」と謝りながらも花菱の顔は微笑んでいる。絶対悪いとか思つてない。とにかく早く掃除を終わらせてとつとつこの場を離れなくては。

「どうして海生は園芸部に入つたの？」

「トイレのおつさんから、またすつごい話が飛んだなー。

「植物とか好きだつたつけ？」

「いや、そんなに興味はない」

「不思議なんだよね。僕も噂で聞いた程度だけど、園芸部つて関口先生に睨まれてしょっちゅうこんな嫌がらせみたいな雑用させられてるんでしょ？毎回部活動が掃除とか雑用とか嫌にならないの？」
「そりやあ嫌だけどさ、仕方ないんだ。園芸部を認めてもらつためには頑張らなくちゃ。それに俺なんか桜井に比べたら睨まれてるうちになんか入らないし。部長の桜井が頑張るつて決めたんだから、部員の俺は黙つても桜井についてくだけや」

「そなんだ」

花菱はまた嬉しそうにニコニコ笑つて、

「海生は本当に桜井くんのこと、」

「あ、それ以上言わなくていいから」「何で？」

「恥ずかしいから」

花菱は田を丸くして不思議そうな顔した。「何が恥ずかしいんだわ？」とでも言いたげな顔だつた。

「でも本当に仲良いんだね。海生と桜井くんで一年生の時から仲良しなの？」

だから、仲良して言うなよ。

「一年生の時は全然」

「仲悪かったんだ？」

「悪いとこいつか、交流がなかつたんだよ。半年前まではとんビロをきいたこともなかつた」

「それはそれは。なら余計に不思議だね。何で海生は園芸部に入つたの？何がきっかけで桜井くんと友達になつたの？」

花菱の田が好奇心からかキラキラと輝いている。

「花菱はさあ、桜井のことどう思つてゐる？」

「どうして？」

「こんなこと聞いていいのかどうかわからぬけど、

「桜井のこと怖いと思つたことはない？」

「何でそう思うの？」

「何でつて、そつや桜井が不良だからだよ」

今更こんなこと説明したつてしまふがないと思つただけど、桜井は学園一の不良として恐れられている。

短く切つた髪はマスターードみたいな黄色。まだ中学生なのに両耳につけずつピアスをつけて、獣のような鋭い田つきで周りを威嚇（？）し、何故かTシャツの上に『神明学園 篠球部』と書かれたジヤージを羽織つて校内をうろつき、しおつちゅう他校の生徒に呼び出されでは喧嘩をし、勝つてんだか負けてんだかはよくわからないけれど、土と血と埃にまみれボロボロになつてゐる。

うちの学校は自由な校風が売りだから服装や髪形の規定など、たぶん他の中学に比べたらそんなに厳しくないと思つ。だけど桜井の何處にいてもわかる派手な格好（黄色の髪とかピアスとかジャージとか）は「自由」を通り越して「無秩序」だと、先生方はあまりい顔をしない。ましてや他校生との喧嘩などもつての外だと、桜井は少なくとも週に三回は生徒指導室に呼び出されている。と言つてもそれをするのは桜井に入学当初から目を付けている生徒指導部部長の関口先生だけで、他の先生はなるべく桜井と関わりを持たないよう避けているようだ。幸い桜井が他校生と喧嘩をしているという決定的な証拠がないため、これまでのとこ退学だの停学だの大きな事にはなつていない。

俺ら園芸同好会が生徒指導部の先生方によく思われていないのも、そうゆうわけだ。

「なるほどね。僕ね、桜井くんと小学校一緒だつたから少しだけ知つてゐるんだ。彼は小学生の頃からあんな感じだつたよ。見た目が派手で、いつも誰かに殴られたみたいな怪我してて。僕は桜井くんと同じクラスになつたことがないからよく知らないけど、クラスに友達もいなくてずっと一人だつたつて。みんな桜井くんのこと怖がつてたよ」

「で、花菱は？」

「何でだかよくわからないけど、花菱には『怖い』て言つてほしくなかつた。あの倉本のことですら『いい子』と言つた花菱なら、きっと桜井のことも『いいヤツ』だつて言つてくれるだろつ。そういうであって欲しい。

「そうだね。怖いと思つたことはないよ。僕は桜井くんに何かされたわけじゃないから。確かに桜井くん目つきは悪いし、ちょっと近づきがたい雰囲気あるし、あまりいい噂も聞かないけど、悪い人ではないんだろうなつて思つてゐる。だつて、桜井くんは海生の友達なんでしょう？」

花菱は優しい微笑みを俺に向けて囁つ。

「海生は優しくて真面目でとても真つすぐない子だから。そんな海生の友達だもの、桜井くんが悪い人なわけないよね」

「そうじやない？」と尋ねられても、俺はすぐに返事が出来なかつた。

なんだか花菱がすぐかいつこよく見えて。と同時になんだかすごく恥ずかしくて身体中がものすこい熱くなつてきた。

「あれ？ どうしたの海生？ 顔が真つ赤だよ？」

「なんていうか、花菱で、すごいな。なんかもう色んな意味ですごいよ。おまえ最強だよ」

もし、桜井本人が聞いたらどう思うだらう。あいつも顔真つ赤にしてすごい慌てるかな。それとも嬉しそうに、照れたように笑うかな。案外何事もなかつたようにスルーしたりして。

「海生は桜井くんのこと怖いと思つてたの？」

「え？」

「怖いと思つてたから、一年生の時は交流がなかつたのかな？」

花菱の綺麗なまん丸の目にとらわれて、一瞬言葉につまる。でも、嘘ついたつて仕方ない。

「そうだよ」

「でも今は怖くないんでしょう？ 仲良しだもんね」

「・・・花菱、頼むから仲良していうのやめて」

なんか力が抜ける。

「二人は何がきっかけで今みたいな関係になつたの？」

「たいしたことじやないんだよ」

「でも聞きたいな」

「別におもしろい話じやないぞ」

「それでも。海生が嫌じやなかつたら。桜井くんが来るまででもいいから、聞きたいなあ」

ならば掃除を手伝つてくれたお礼も兼ねて、眼鏡の奥をきらきらさせる花菱の好奇心を満たしてやるか。

「少し長くなるけど」と前置きをしてから、俺が園芸部に入った
いきさつを話して聞かせた。

あれは忘れもしない入学式のことだった。

校長先生の長い話を聞き流しながら、これから始まる中学生活に期待と不安を感じてドキドキしていた。

同じ小学校から来たやつなんてことをするべく心配していたつけ。だからその時、俺の隣に座つていたやつ（もう名前も思い出せない）に肩をどんどん叩かれたときは驚いた反面、ちょっと嬉しかった。

「なに？」

「後ろ見てみろよ」

言われた通り、後ろを振り返つてぎょっとした。

体育館の出入口に顔の腫れ上がった田付きの悪い金髪の男がいて、先生らしき人と何やら深刻そうに話していた。

青い校章てことは俺らと同じ新入生なんだろうけど。

「あいつ知ってる？ 桜井ていう不良なんだぜ」

「不良？」

「そう。小学校の頃から金髪だし、ピアス空けてるし。あいつしおつちゅう上級生や地元の中学生と喧嘩してたんだぜ。見ろよあの顔。今日も入学式来る前に誰かと喧嘩してんだぜ」

確かに桜井の顔は不自然に腫れ上がつていた。なんだって入学式の前に喧嘩なんてしてくるんだろう。

「あいつ、桜井て言うの？」

「そう。桜井亮揮。あいつには気を付けた方がいいぞ。俺の通つてた学校でも桜井に泣かされた奴いっぱいいたんだ」

「へえ」

なんとなく嫌な予感がしてちらりと空いている隣の席に目をやる。せつかくの入学式なのに欠席なんて気の毒だなんて思つていた

けど、まさか・・・。

先生が腰を屈めっこそこそと俺らのクラスのところにやつてきた。もちろんあの不良・桜井を連れて。

「桜井くん、君の席はここだよ。真田くんの隣だ。入学式が終わつたら必ず保健室に行くんだよ」

嫌な予感的中。先生は桜井を残し去つて行き、桜井は無言で俺の隣に腰かけた。

隣のやつは桜井を恐れてか、もう話しかけてこなかつた。

俺は俺で恐怖のあまり体を震わせながら、絶対に左に向かないようひたすら前を向いて面白くもない校長先生の話に集中した。

「なあ」

左隣から声がした時は本当に心臓が止まりそうになつた。

向きたくない返事したくない、だけど無視したらきつとこれから始まる中学ライフが暗黒に染められてしまつ。

油の切れたブリキの人形よろしくゆつくりと左を向いた。

「なに」

努めて明るい声を出したつもりだったが、たぶん、裏返つてたと思う。

桜井は真つ直ぐに俺を睨み付けて、自身の鼻から流れる血を指さし、

「ティッシュ持つてない?」

氣心知れた今だつたらきっと「なにやつてんだよ、桜井」とか笑い飛ばせたろうけど、今よりもっと氣が弱い頃、ましてや初対面で相手は不良、まごつきながら必死でポケットに入れておいた真新しいティッシュを差し出した。

「あげる」

「ありがと」

それきり左を向かなかつた。もう一度と声をかけられませんようにと何かの神様に祈り、ひたすらに入学式が早く終わることを願つた。

それが桜井との出会い。同じクラスだつたけど、桜井とはそれきりほとんど口を利かなかつた。

はじめの一週間くらいは桜井、真田で番号順に席が決まってから「おはよう」「じゃあな」の挨拶くらいはしたよ。て言つてもいつもそれを言つのは桜井で俺はおどおど返事をするだけだったから、席替えしてからは本当に全然口をきかなかつた。

桜井はけつこう真面目に授業を受けていた。

時々遅刻して来ることはあつた。桜井が遅刻するときはたいてい他校生と喧嘩をして生徒指導室に呼び出されたときらしい。だけど一年生の時に授業をサボつたり、学校を休んだりなんてことはしたことないとと思う。

入学式の登場シーン見たときから、みんな桜井を恐れていた。あいつはヤバい、関わらない方がいいって思つてたから、クラスの連中は桜井を遠巻きにしていた。もちろん俺も。

だから桜井はいつも一人でいた。一人で教室の一番後ろの席について、何が気に入らないのかいつもしかめつ面で窓の外を眺めていた。

桜井と次に口をきいたのは確か去年の11月。

2年になつて桜井とはクラスが別れて、顔を会わせる機会もなくなつたから、掃除の時間に裏庭であつたときは思わず身構えた。だつて絵に描いたような不良、桜井が人気のない裏庭にいるんだよ？怖いじゃん。すごい怖いじゃん。

しかも桜井は地面にうんこ座りつての？コンビニとか路地裏とかでヤンキーがよく座り込んでるあのポーズ。今は和式のトイレが少なくなつてきてるからあんま言わないのか。まあそんなことはどうでもいいか。

しかもその桜井の足下にはうつ伏せになつて倒れてる人がいて、全然動かないんだ。ますます怖いじゃん。

状況を見て、これは絶対に桜井が倒れてるヤツを殴つて、気絶してる間に財布でもパクろうとしてるんだって、そう思つた。身体はすくんだけど、逃げなくちゃ俺がヤバい。

桜井に気付かれないようにそつと後退りした、次の瞬間パツと桜井が振り向いて、ぱっちり目があつた。

終わつた、て思つたら、桜井が言つたんだ。

「真田、助けてくれ」

逃げようとしたのにびっくりして思いがけず足が止まつた。

助けてくれて言われたのにもびっくりしたんだけど、それよりも桜井が俺の名前を覚えてたつてことの方にびっくりだつた。

「具合が悪くて倒れたんだ。保健室まで運ぶの手伝ってくれ」

「え？」

「俺一人で困つてたんだ。真田が来てくれてよかつた

「え？」

何がなんやらよくわからなかつたけど、とりあえず桜井を手伝つて、倒れてるヤツを保健室まで運んだ。

倒れていたのは桜井のクラスメイトで、園芸部の手伝いをしにきたら具合を悪くしたらしい。

正直その話をきいたときは桜井に部活動を手伝ってくれるような友達がいたなんて信じられなくて、かつあげしてる現場を俺に目撃されたから適当に嘘ついてるんじゃないかつて思った。

桜井のクラスメイトを保健室に運んだあと、俺は一刻も早くその場を去りたくてそわそわしてた。なのに桜井は先生が「大丈夫だから」とつて言うのに、ベッドの脇の丸椅子に腰掛け、じつと気絶したクラスメイトの側についていた。

帰るに帰れなくて、俺も少し離れたところに座つて横目で桜井を観察した。

「こいつもともと身体が弱くてしおり倒れてるんだ。今日もあんまり顔色よくなかったから気にしてはいたんだけど、無理させちまつたかな」

困ったように眉を八の字に下げて、すぐ申し訳なさそうな顔をする桜井は噂にきく血も涙もない学園一の不良とは程遠い姿だった。その時ようやく桜井の話は本当なんだって思った。

桜井でも友達が倒れたらこんな情けない顔するんだつてまじまじ見てたら、桜井が急に俺の方に顔を向けた。

「なんか、真田と話するの久しぶりだな」

桜井はなんでもないみたいに言つてたけど、俺は内心ドキドキだつた。久しぶりも何も一年生の同じクラスだった時からほとんど会話らしい会話なんてなかつたのに、桜井はどうゆうつもりで言つてるんだろう。ひょつとして入学式以来、俺が桜井のこと怖がつて避けてたのがばれたのか。

「一年時同じクラスだつたよな。入学式のときに鼻血出してる俺に新品のポケットティッシュくれてさ。初対面なのに良い奴とか思つてたんだよ」

でもそれは桜井が「ティッシュある?」つて訊ねてきたからで、あの時話し掛けられなかつたら俺はみずから進んでティッシュを差

し出やうとはしなかつただやう。

「真田、あの頃からかなりでかい奴だつたよな」

思わず「態度が！？」て聞き返しそうになつた。どう考えたつて身長のことだらうに、緊張のあまり思考回路がおかしくなつてたんだよ。

「俺も中一にしてはけつこう背高いとは思つてたんだけど、真田見たときには負けたあつて思つた」

「そう、なんだ」

おまえ無駄に団体でかくてうぜえんだよ、て言われてるのかと思つて変な汗が出てきた。

「いくつあんただ？」

「え？」

「身長だよ」

「春の記録で180とかだつた気がする」

「おー、すげえな。成長期だからまだまだ伸びんじゃねーの？ 2メートルも夢じやないな」

桜井はニッコリ笑つて俺のことを褒めてくれた。

俺はしどろもどろになりながら「そんなにはいらないよ」て言つのが精一杯、気のきいた返事も出来なかつた。

ごくあたりまえのことなんだけど、桜井も誰かを褒めたり冗談言つたり、人前で笑つたりするんだなつてしまいじみ思つたことを覚えてる。

それから先生に保健室を追い出されて、何でか一人で体育館裏に戻ってきた。

もうその時には不思議とさつきまでの逃げ出したいような気持ちはなくて、なんとなくまだ一緒にいてもいいかなあて気分になつてた。

「悪かつたな真田。掃除しに来たんだろ？俺がやつとくから帰つていいで」

「や、でも、」

「俺のせいで時間とらせちまつたんだからいいって。ビーセ俺も裏庭の草むしりしなくちゃいけなかつたし」

草むしりて普通、用務員のおじさんがやつてるもんじゃないか？

「何で桜井・・・くんが草むしりなんか」

「桜井でいいよ。君付けされると背中が痒くなる。俺、園芸部なんだよ。て言つても正式には認められてなくて、園芸部を認めてもらいたければ学校のために奉仕しろつて、よく生徒指導部の先生からこうやって雑用任されんだ。やっぱり学校側からあんまい顔されなくてさ。まあビーセ園芸部を認める気はないんだろうけど」「なにそれ。何で園芸部作るのにそんなことしなきゃいけないんだよ。横暴じやん」

「そりや園芸部作りたいって言つたのが真田みたいな真面目なヤツならけつこう簡単に認めてくれただろうけど、俺みたいのが『園芸部作りたいんです』なんていつて、『はい、そうですか』とはいかないだろ。実際、何を企んでるて聞いたされたし」

俺みたいなのていう、自嘲的な言い方がちょっと気になつた。

「どうしてそんなこと言われてまで園芸部作りたいんだ」

「んー。正確にいうと園芸部が作りたいんじやなくて花壇が作りたいんだ。一年ときから思つてたんだよ。花壇を作つたらいいんじや

ないかなって。裏庭で人がより付かないイメージあるけど、実はけつこう人の出入りがあつてさ、ここで昼飯食つてるヤツもいるんだ。そのぶん裏庭に置き去りにされるゴミなんか多いけど、花壇があればゴミを捨ててくれヤツも減るだろ?」

「そうかもしれないけど。裏庭事情に詳しいな」

「一年時の教室で窓が裏庭に面してたから」

「ああ、だからか」

一年の時、桜井が窓の外を眺めていたのはそつゆう理由だったのか。

「花壇作るには色々と材料が必要だから、早く正式な部として認めてもらつて学校から補助金出してもらえるようにしたいんだ」
そう語る桜井の目はすく真剣で、それでいてどこか楽しそうだつた。

「桜井てすごいな」

「どこが。何もすごいことなんかしてねーよ」

桜井は否定したけど、その時、俺は本気ですごいって思った。
裏庭がゴミまみれだなんてそれまで知らなかつたし、知つてたとしても、だから何?って感じでなんとも思わなかつただろう。

だけど桜井は何かしよつて考えて、自分一人で頑張つてる。
桜井が園芸部を作りたがつてるのはいわば学校のためなのに、学校側は知らないで、桜井に雑用ばつかりやらせて、それでも桜井は文句一つ言わずに頑張つて、それつてそんな簡単に出来ることじやないよなって思つて。

「やっぱ桜井すごいよ」

「そうか?」

「そうだよ」

「そつか。ありがとな」

桜井はそこで照れたみたいに笑つた。

学園一の不良なんて微塵も感じさせない、俺と同じ、14歳の普通の中学生の顔をしてた。

すごく単純なんだけど、保健室行って帰つてくるその短い時間で

桜井の印象がすごく変わったんだ。

桜井で見た田は怖いけど、本当はずいといいやツなんじゃないか
つて、そう思つて。

「桜井、草むしり一人でやるのか？」

「俺意外に園芸部員いないしな」

「俺も手伝つていい？」

「は？」

「いや、迷惑ならやめるけど。一人より一人のが早く終わるかなあ
と」

「や、迷惑ではないけど」

「ならないよな」

桜井はまだ何か言いたそうだったけど、無視して勝手に草むしり
を始めた。

桜井はじーっと俺を見下ろして、少ししてから言った。

「真田は俺のこと怖くないの？」

「え？」

桜井は俺の前にしゃがみこんで射るような目で真っ直ぐ俺を見ていた。桜井の目を真正面から見たことなんかなかったから、鋭い目付きに背中がゾクッとした。恐怖を感じて目を逸らしたくなつたけど、それをやつたら桜井に軽蔑されるだらうつて思つたから、頑張つて笑顔を作つて、なんとか答えた。

「怖くないよ？」

桜井は視線を外して、「気を悪くしないでほしいんだけど、」と前置きして、

「俺、真田に嫌われてると思つてた」

思わず言葉につまつた。

「俺つてこんなんだから、人に嫌われたり避けられたりするの慣れてるからいいんだけどさ。入学式で席が隣同士になつた時から、真田、俺のこと見て泣きそうな顔してたよな。たまに廊下とかですれ違つと思いつきり身体に力入れて緊張してるのわかつたし。ああ、俺、嫌われてんだ。まあ仕方ねーよなつてずつと思つてたんだよ」

桜井の言葉に何も言えなかつた。全部本当のことだつたから。気付かれてないだろうとか思つてたけど、桜井は全部知つてて、何も言わないのでいただけだつたんだ。

あの頃の桜井てどんな気持ちだつたんだろう。今考えると嫌なヤツだなつて自分で思つ。

「さつきだつて、ここに真田が来てくれたとき、声をかけたら絶対走つて逃げるだろうと思つた」

「実際逃げようとしてたから、否定はしなかつた。

「だけど真田は逃げないで俺のこと手伝つてくれたよな。保健室でも先に帰つてもよかつたのにあいつのこと心配して一緒に待つて

てくれたし、俺が話しかけても嫌な顔しなかった

それは違う！そう言いたかつたけど、言えなかつた。ここで否定

したら桜井はどんな顔するかな？そう思つたら言えなかつた。

「俺、真田のこと誤解してた。真田はただ単に人に見知りなだけだつたんだな」

それも違うんだけど、いや人見知りはするけど桜井に対する態度は人見知りからじゃなくて、でもそう言つたらもう口きいてもらえないかもしねないと思つたらやつぱり何にも言えなかつた。

「だから今、ちょっと。というより、かなり嬉しいんだ」

桜井は馬鹿みたいに真面目な顔で、

「俺、嫌われてなかつたんだーて、なんか安心した」

それから「なに言つてんだかな」て桜井は笑つてたけど、俺は笑えなかつた。

桜井は優しい奴だから、もしかしたらあの時俺が「怖くない」つて言つたの嘘だつて気付いてたのに、わざと気付いてない振りをしてくれたのかもしれない。

たつたそれだけの短い時間だつたけど、桜井といて俺がどんなに小さくて、ずるくて卑怯な人間か思いしらされた。同時に桜井つていう人間にすゞく興味を持つたんだ。花菱的なストレートな言い方をするならたぶん、桜井を好きになつたんだと思う。もちろん変な意味じやなくてな。

だから、今まであいつに対してもぐく失礼な態度とつてきたその罪滅ぼしも兼ねて園芸部に入つた。

ちょっと前の俺みたいに桜井のことを知らないヤツは俺が桜井に脅されて園芸部に入つたんだと思つてる。

奴等は桜井を悪く言つけど、俺は責めたり咎めたりすることは出来ないんだ。

ちょっと前は俺だつて同じようなもんだったんだから。

いつかあいつらにも桜井が本当はどんなヤツなのかわかつてもらえたらしいんだけどさ。

「とまあ、」こんな話。別に面白くもなんともないだろ? 「

てっきり花菱は「そんなことないよ~素敵な話だね~」なんて笑つてくれると思ったのに、何故か花菱は肩を落としつつもいていた。

「花菱? どうした?」

なんか俺、まずいこと言つたかな。

「羨ましいな」

下を向いたまま、ため息混じりに花菱は呟く。

「羨ましいって何が?」

「海生と桜井くんはお互いのことをよく理解してて、認めあってて、きつと一人でいるとすごく楽しいんだろうね。親友って言つんだろうね。僕にはそーゆーのない」

「別に俺と桜井は親友でいうほど仲いいわけじゃないぞ」

親友。確かにいい響きだけど、桜井とつるむようになつてからまだ半年しかたつてないし、知らないことだつてきつとたくさんある。「時間なんか関係ないよ。お互いにどれだけ相手のことを思い合つてるかが問題なんだから。海生は桜井くんとたつた数十分、時間を供にしただけで、はつきり桜井くんを好きだと言えるくらいに魅力を感じた。それはきっと桜井くんも同じはずだよ。じゃなかつたらあの桜井くんが海生を園芸部に置いとくわけないもん。同じ気持ちだから一緒にいられる。僕はそれが羨ましい」

「いいなー、海生は」と花菱は下を向いたままぼそぼそ喋る。さつきまでの底無しに明るい笑顔は何処へ行つてしまつたのか。

「そんな落ち込むなよ。花菱にだつてちゃんといるだらう?」

うつむいていた花菱はパッと顔をあげ「何のこと?」と間抜けな返事をする。

「花菱にもちゃんと親友がいるじゃないかって」

「親友? 親友がどうしたの?」

「だから、花菱は俺と桜井が親友みたいにお互いに信頼しあつて仲が良いのが羨ましいんだろ？自分にはそこまで親しい友達がいなからつて落ち込んでたんじゃないのか？」

花菱は不思議そうに真ん丸の目を一瞬きわせてから、「ああ！」と声を上げた。

「そうだ。そうだよね。僕には親友がいないんだよ。ごめんね、海生」

「何を謝つてるんだよ」

「僕、自分でも何言つてんだかわからなくなつちやつて、混乱させちやつてごめんね」

「混乱て何が？」

「何でもない。何でもないから気にしないで。で、僕の親友って誰のことかな？」

花菱は二口二口笑つて話を促したが、何か様子が変だつた。何か笑つて誤魔化したみたいだ。

「花菱さ、」

「うん？」

無邪気な顔して俺を見上げる花菱はいつもとなんら変わらない。何か変だと思ったのは俺の勘違いだつたのか、それとも何でもないような振りをしているのか。判断がつかない。追及するのはやめたほうがいいか。

「花菱には倉本がいるじゃないか」

「レオ？」

「花菱は倉本と仲良いだろ？」

「うん、レオとは仲良しだけど、僕よりも海生のほうがレオと仲良しに見えるよ」

「はあ！？」

また花菱は無邪気な顔してとんでもないことを囁く。

「仲良していいか、むしろ俺、あいつ苦手なんだけど」「ええ？ そうなの？ そんなふうには見えなかつた。だつて今日の休みだつて一人で楽しそうに遊んでたから」「昼休み？ ・・あれか」

あれがどうしたら楽しそうに遊んでるよう見えるんだ。耳をひつぱられ、頬をつねられ、騒いだら口にペットボトルぶちこむぞと脅迫され、なにもそこまで言わなくともこいつにてくらで罵倒されたんだぞ。

「花菱は普段何を見て生きてるんだ？ その眼鏡、ちやんと度あってるのか？」

俺の言葉になぜだか花菱は楽しそうに笑つて、

「それ、よく言われるんだよねー」

「倉本にか？」

「うん、レオもそれに近い」と言つ

レオもつてことま他にもいろいろな奴らから言われてるつてことだろつ。

「やつぱり俺なんかより花菱のが倉本と仲良こと思つよ。花菱ことつての親友で、倉本なんじゃないのか？」「え？」

「え？」

首をかしげ固まる花菱。その間、約三秒。

「え、僕とレオって親友だつたの？」

「いや、実際どうなのかは知らないけど。俺はそう思つてた」

だつて桜井とは違つた意味で倉本つて近づきがたいから。クラスで倉本が花菱以外の男子と一緒にいるところて見たことないしな。「何で？ レオは全然近づきがたくなんてないよ？ こんなこと言つたら失礼だけど、桜井くんは見た目が怖そだから仕方ないとしても、レオはす」「一く綺麗な顔立ちしてるじゃない？ 中性的で、女子の中

にはレオのことを『天使みたい』なんて話してる子もいるんだって「そりや倉本の見た目がいいのは認めるけど、顔がいいぶん中身が最悪じゃないか」

「え? どこが?」

花菱、本気で言つてるんだろうか。

「全体的に」

「そんなことないよ。海生がレオのことをよく知らないだけで、レオは本当にすごくいい子なんだよ?」

そこまで言つて、ハツと花菱が口をつぐむ。

「そうか、これが。他の人にはわからないその人の魅力を自分だけが知つていて。これが親友て奴なのか。海生にはわからないレオの魅力を僕は知つていて。つまり僕とレオは親友てことか」

「うわあ」と感嘆の声を上げ、目をきらきらさせた花菱は喜びいさんで万歳をする。

「僕とレオは親友だつたんだ! 僕にもちゃんと親友がいたんだ!」

「よかつたなー、花菱」

何か違う気がしたけど、花菱があんまりにも嬉しそうな顔をしてるから余計なことは言わなきことにした。

「明日、レオに会つたら教えてあげよう」

「それはやめた方がいい気がする」

倉本のことだから無邪気な花菱が「僕たち親友だよねー」なんて言つたら、馬鹿にしたみたいに鼻で笑うかもしれない。いやそれならまだしも、さげすんだ眼で睨み付けるかもしれない。いやいや、もしかしたらキレて「身のほど知らずの虫けら野郎が。僕を親友呼ばわりするなんて百億光年早いんだよ」て罵倒するかも。そんなんなつたら花菱が可哀想すぎる。

「やつだなー、海生てば」

おばさんが話をするときみたいに手をひらひら振りながら、花菱は大口を開けて笑う。

「レオがそんな酷い」と言つわけないじゃないか

「いや、あいつなら笑顔で酷いこと言つと思つや」

「もし言つたとしても、それは本心じゃないから僕は全然平氣だよ」

「本心じゃなかつたらなんなんだ」

「照れ隠しに決まつてゐるぢやないか」

「照れ隠し、ね」

あいつが照れることなんかあるんだろうか。

「そりやあるよ。レオだつて人間だもの。僕、レオとは一年生の時から同じクラスでね、二年のクラス替えでも同じクラスになれたのが嬉しくつて『今年もレオと一緒にだなんて嬉しいな。この調子で来年も同じクラスになれたらいね』て言つたんだ」

また、よくそんな聞き方によつては恥ずかしかつたり気持ち悪かつたり気まずかつたりする台詞をやうつと言ふたもんだな。

「そしたら倉本はなんだつて？」

「引きつた笑みを浮かべて『僕はごめんこうむりたいね』だつて。ほらね、レオだつて照れるときは照れるんだよ」

はたして、それは照れてるつていうのか。

そこでふと昼間のことを思い出した。花菱が表れたとき、倉本は眉をぴくつと神経質そうに動かした。あの時、倉本が何を思つたか、今ならなんとなくわかる気がする。

「花菱つて実は天然だつたんだな」

「それも、よく言われるんだよね。僕自身はそんなことないと思つんだけど。何でなんだろうね？」

そう言つて、花菱は不思議そつに首をかしげていた。

花菱が帰る時間になつても桜井は現れなかつた。

「ごめんな、花菱」

「何が？」

「トイレ掃除手伝わせるだけ手伝わせて、園芸部らじこと」何も紹介できなくて」

「なんだそんなことか。気にしないで。園芸部、すごい楽しかつたから」

楽しかつたつて、トイレ掃除がだらうか。

「僕こそごめんね。塾がなかつたら桜井くんが来るまで待つてられたんだけど。まあでも、明日も遊びに行くから」

「え？」

「え、ダメ？ 迷惑？」

「ええ、ダメじゃないし、迷惑でもないよ。全然オッケー」

「よかつたー。明日は桜井くんに会えるかな？ 楽しみだなあ」

ほつと息をつき、安心したように笑う花菱は俺と同い年のはずなのに、なんだかずつと子どもっぽく見えた。

花菱を校門まで見送り裏庭に戻ると、タイミングが悪いことに見覚えのある後ろ姿があつた。

「桜井！」

振り向いて、目があつた瞬間、桜井はなんだかすごく心細そうで、今すぐにでも泣き出してしまふんじやないか、そんな情けない顔をした。

「どうしたんだよ、桜井？ 何をそんな悲しそうな顔してるんだ？」

桜井はうつむき、ぼそぼそと「すまねえ」とつぶやいた。

「何が？」

「便所掃除。一人で大変だつただろ？ 僕が今日は便所掃除だつて言ったのに。約束を守らない男。最低だな俺つて」

「気にすんなよ。桜井が遅れてくるってことは何か理由があるんだろ? また呼び出されてたのか?」

「関口に。ちょっと廊下を走ったくらいで呼び止められて一時間説教だよ。解放されたあとダッシュで体育館まで行つたんだけど……て、これじゃただの言い訳だな。本当にすまない」

桜井は肩を落として暗い声で俺に謝る。俺にトイレ掃除をさせるはめになつたのが申し訳ないのはわかるけど、たかだかトイレ掃除くらいでそこまで暗くなることないだろ? お先真っ暗、人生終わりつてわけじゃないんだから。

「そんな時もあるつて。それに俺、一人でトイレ掃除してたわけじゃないしさ」

「は?」

桜井が顔を上げて訝しげな顔をする。獣のよつた鋭い目付きに深く刻まれた眉間の皺。

桜井のこーゆー顔つて普通の人なら眼もあわせられないくらいに怖いんだろうな。桜井とつるむようになつて半年たつけど、俺だつてたまにびくつくときがある。

「一人じゃないって、誰か来てたのか?」

「うん。同じクラスの、知つてるかな? 花菱 聖つて言つんだけど

「花菱?」

桜井の眉が釣り上がり、瞳孔開き気味の眼がさうにくわつと見開かれ、思わず身構える。

「・・・『めん、俺、何か悪いこと、言つた?』

「ああ、『めんな。怖がらせよつと思つたわけじゃないんだ。ちょっとびっくりしただけで』

「俺こそごめん。怖がつて」

桜井は少しだけ微笑んでまたすぐ真顔に戻つた。

「花菱つて、生徒会長のあの花菱だよな?」

「その花菱だよ」

「あー、そう」

桜井は地面を睨み付け吐き捨てるように、

「関口の息がかかつた奴がいつたい何しに気やがつたんだ」

「何つて、園芸部の仮入部？」

てことにしてトイレ掃除を手伝ってくれたんだよな。結局花菱は何が目的で園芸部に来たんだろう。

「明日も来るって」

「はあ！？」

すごく嫌そうな声、表情にたじろぐ。俺、もしかして余計なことしたかな？

「あ、や、別にいいんだけども」

「花菱、トイレ掃除しただけなのに『乐しかった』って言つてた。けつこう園芸部に興味持つてくれたみたいだつたよ」

「そうか。そいつはよかつた」

よかつた、て言つならもう少し嬉しそうな顔をしたらしいのに。明らかに桜井は迷惑そうな顔をしている。

「花菱は桜井のこと良い奴みたいに言つてたよ」

珍しく桜井がきょとんと気の抜けた顔をした。「突然何を言いだすんだ」って顔だった。花菱と一緒にいたから唐突に話をする癖がうつったのかも。

「それがどうかしたのか？」

「いや、別に」

花菱は桜井にも園芸部にも興味を持つてくれた。桜井のことは素敵な人だとも言つていた。花菱はすごくいい奴なのに、よく知りもしないで、生徒会の人間だからって嫌な顔することないじやないか。て、思つても口にすることは出来ない。ちょっと前の俺だって桜井のこと嫌だなつて思つてたから。でもな。なんかな。そんなあからさまに嫌な顔することないのにな。

「ごめん」

桜井がまたなんだかすごく心許ないよつな、申し訳なさそうな顔で俺を見ていた。

「花菱は海生の友達なんだよな。それなのに嫌な顔して」めん

「桜井、嫌な顔してるつて自覚はあつたのか。

「俺、別に何も言つてないんよ?」

「顔に出てた」

「そりか・・・何か」めん

「いや、俺のほひて本当にじめん」

「いやいや・・・て、收拾つかなくなりそだだからやめよつ
なんとなく気まずい空氣になつて、お互い黙り込む。何か喋らな
くちゃとは思つても、いつゆう時に自分から話をするの苦手なんだ
よな。ああ、ここに花菱がいてくれたら、底無しに明るい笑顔で場
を和ませてくれるのに。

あ、今は花菱のことで気まずくなつたんだつたな。

「今日はもう帰ろつ

桜井は自然な笑みを浮かべて言つた。

「待たせちまつたお詫びになんか奢つてやるよ

「おおー・やつた」

桜井とつむみ始めて半年。まだまだ知らないことはたくさんある。
花菱は俺と桜井のことを「親友」なんて言つてたけど、こんな微妙
な関係を見てもあいつは俺らを親友だなんて言つんだらうか。

先に歩き始めた桜井の後ろを少しだけ離れて歩きながら、思った。

「やだあ、もう帰ってきたの？」

玄関のドアを開ける音が聞こえたのか、階段の上から母ちゃんが顔を出して言つた。

「ただいま。もうつて7時すぎてるんだべ。俺の部屋で何してんの？」「ちょっと探し物をね」

「探し物？」

一階に上がると、昨日までのソレドキレイだった部屋が今は空き巣にでも入られたかのよつてびりやくなっていた。

「何これ」

「ハルちゃんに昔のアルバム見せてあげよつかと思つて探してたのよ」

「アルバム探すのにタンスの中まで見るか？」

しかも中身は全部出されている。探し方が尋常じやない。

「ついでにいかがわしい本でも見つけたら捨てようかと思つてたのよ」

「・・・見た？」

「まだ探し中。ビリに隠してあるの？」

「聞かれて素直に隠すわけないだろ？」「

「そうよねえ」

母ちゃんがふーっと長いため息を吐く。

「ハルちゃんも女の子だからねえ。色々まずいでしょ？もし何かの間違いで、そーゆーものが見つかっちゃつたらて考えると怖くなあい？だから安全な場所に移動させなきやなーと思つたんだけじ」

母ちゃんの言つことにも一理あるけど、なんか芝居臭い。

「ちなみに安全な場所つてどこへ？」

「お母さんの部屋にある金庫の中とか。お母さんとお父さん以外番号知らないわよ？」

それって安全で言えるのか。むしろ危険な感じがするけど。

「まあ、気が向いたら持ってきてなさい。隠しといてあげるかい」

母ちゃんはニッコリ笑って、部屋を出ていった。

「……て、片付けどうするんだよ！？」

母ちゃんは下に降りていき、振り返ろうともしなかった。

「なんだかなあ

散らかすのは得意でも、片付けるのが苦手な主婦でどうなんだろう。とりあえず本が見つからなかつただけよしとしよう。適当に部屋を片付けて、そういう家に帰つてからハルちゃんに会つてないことに気付いた。

別に用事はなかつたけれど、ハルちゃんにただいまを言おうとしたおりでいった。

ハルちゃんが今使つているのは単身赴任中の父ちゃんの部屋だ。六畳一間の和室で、開閉式のドアなんてのはついていない。だけどハルちゃんはお客様だし、一応女の子だから、部屋に入る前に外から声をかけた。

「ハルちゃん、入つてもいい？」

部屋のなかからは物音一つしない。靴は玄関にあつたからいなわけないのに。

「ハルちゃん？ 入るよ」

襖をひいて中に入る。手探りで電気の紐を引き、足元に転がるハルちゃんを見つけ、飛びずれる。

危うくハルちゃんを踏ん付けるところだった。何も部屋のど真ん中で寝ることはないのに。

ハルちゃんは両手両足を皿一杯伸ばして、気持ち良さげに寝息をたてていた。

近くに座り、まじまじとハルちゃんの寝顔を見つめる。

そういえば子どもの頃はいつもこいつやってハルちゃんが寝てるのを眺めてたな。

ハルちゃんは俺より昼寝の時間が長くて、いつも俺のほうが先に

起きてた。

待てを言い渡された犬みたいにハルちゃんのそばに座り込んで、じーっと顔を見つめて、心の中で早く起きるーって感じながらハルちゃんが起きるのを待ってたつて。

ちょっと懐かしくなつて、昔みたいにハルちゃんの顔に自分の顔を近付け、心の中で起きるーと感じてみた。

俺の想いが通じたのか、おもむろにハルちゃんが目を開けた。寝起き特有のぼーっとした目で天井を見つめ、近くに座る俺を見る。2、3度瞬きをしたあと、ゆっくり身を起こして、言つた。

「近くね？」

「「めん、驚かせちゃつた？ハルちゃんにただいま言つてなかつたなーつて思つて来たんだ。ただいま」

「おかえり。遅かつたな」

「部活やつてきたから」

部活という畠田の便所掃除だけビ。

「部活？」

寝起きの一服しようつと思つたのが、口にタバコを挟み、ハルちゃんは言つ。

「なに、お前部活入つてんの？」

「うん。園芸部に」

ハルちゃんはタバコを一度口からはずし、「は？」と言つた。

「園芸部？」

「何でまた園芸部？」

「え、ダメかな、園芸部？」

「ダメつことはないけど、園芸部。植物好きだったつて？」

「いや、そんなん興味はない」

そういえば夕方、花菱ともこんな会話をしたな。

「じゃあ何で園芸部？」

「説明すると少し長くなるけど？」

ハルちゃんが頷いたので、俺は花菱に話したことをハルちゃんにも話して聞かせた。

話し終わったとき、肩を落としがつくりうなだれていた花菱に対し、ハルちゃんはタバコに火を点けるのも忘れてぽかんと俺の顔を見ていた。

「ハルちゃん? どうしたの? 話、長すぎた?」

ハルちゃんは俺の質問には答えず、代わりに手を伸ばしてきた。ハルちゃんの手は白くて指がほつそりしていて、とても綺麗で、女の子の手だった。そう思った瞬間、ハルちゃんの両手が俺の頬に触れて、心臓が大きく高鳴った。

「ハルちゃん?」

「海生?」

「なんでしょう?」

「お前、海生だよな?」

「そうだよ」

「本当に海生か?」

「俺の偽物とかいるの?」

あ、昨日もこんな話したな。いや、そんなことよりこの手はなんなのや。

「いや。お前つて本当に、」

ハルちゃんがニイッと口元を歪めた。と思つたら、これでもかとおもいつきり俺の頬を真横に引っ張つた。本日2回目。蘇る毎回の恐怖。

「なんだよもおー! 9年も会わないうちに本当に男前になりやがつて。嬉しいとおりこして何かムカつくなあー! 昔はいつも俺の後くつついて歩いてたあの海生が、近所の悪ガキに意地悪されるといつも泣きながら『ハルちゃん助けてえー』とか言つてたあの海生が、まさかこんなカツコよく成長するとはな。時の流れとはおつそろしいな。なんか悔しいな」

ハルちゃんは女の子のらしかぬ豪快な笑い声を上げ、俺の頬を引つ張った。そして一度手を離して、もう一度優しく俺の頬に手を添えた。

「その桜井くんとやらもカツコいいけど、お前もすげえカツコいいよ。漢だな」

優しい顔したハルちゃんに真っ直ぐ見つめられて、よくわからないけど、なんだか恥ずかしくって目を逸らしたくなつた。

「俺は、桜井に比べたら全然かっこよくなんてないよ」

「そんなことねえつて。友達のために全てを捨てて一緒に戦う、な
かなかできることじやないぞ。美しい友情じやねーか」

「ハルちゃん大げさだよ。俺は何も捨ててないし、戦つてもない。
美しい友情とか言われても、桜井ともちやんと話すようになつてま
だ半年だし」

「大げさなもんか。実際桜井くんとつるみ始めて、お前の生活変わ
つたんじやねーの? どつちかといつと悪いほつに?」

ハルちゃんの田の中に情けない顔した俺が映る。我慢できずに田
を動かしたらハルちゃんが静かに笑つた。

昔からこうだ。ハルちゃんの田は何でも見透かしてしまつ。何も
言つてないのに、全部わかつてしまつ。俺が隠してること言いたく
ないこと、すべて言い当てるしまう。

「ちょっとだけ、変わつたよ。今まで普通に接してくれた友達がよ
そよそしくなつたり。逆に先生からほよく声をかけられるようにな
つた」

今ではクラスの奴とは必要最低限のことしか喋らない。今までと
変わらず友達感覚で話してくれるのは花菱と紫音さんくらいだ。

「海生は嫌じやないのか? 桜井くんと一緒にいたら周りの奴らから
白眼視されるんだぞ?」

「いい気分はしない」

「だけど責めることは出来ない。何度も言つたけど、少し前の俺も
そうだつたから。」

「桜井くんから離れようとは思わないのか」

「それ昼間も言われたな」

「誰に?」

「クラスメイトに」

そこでまたふと思いつく。桜井とつるみ始めて半年。クラスの友達は桜井を恐れてか俺に話し掛けでこなくなつたのに、逆に半年前まではあんまり話したことがなかつた倉本がやけに俺に絡んでくるようになつたな。理由はわからないけど。

「俺は桜井のこと友達だと思つてるし、これからもいい友達でいたいと思つてるから、離れようとは思わないよ」

というか変な話、今の俺には花菱と紫音さん、それから桜井以外友達らしい友達がない。それなのに桜井から離れたら俺はまた一人友達をなくすことになる。

「それを聞いて安心した」

頬から手を離し、ハルちゃんは優しく俺の頭を撫でながら微笑んだ。

「やうやう気持ちがあるなら、大丈夫だな。周りが何を言おうと、お前たち一人をどうゆう目で見ようど、そのうち気にならなくなる。その頃には海生も桜井くんと心を通わせた、本当の友達になれるよ」

「やうだね」

ただ、それはお互いに友達だと思つてればの話で、正直、桜井は俺のことをどう思つてゐるのかよくわからない。

桜井は部活の時以外、例えばたまたま廊下でそれ違つても、偶然学食や購買で会うことがあつても、反応を示すことがほとんどない。俺から声をかけても、いつもと変わらない獣みたいな鋭い目で一瞥し、ちょっと手を挙げて、何も言わずに去つていく。

始めのうちはあまりの反応の薄さに、もしかして俺つて嫌われるのかなって心配になつたりもした。

だけど部活のことで用があれば、申し訳なさそうな顔しながらも自分から話しつけてくるし、むしろ部活中だと桜井のほうから話をふつてくることが多いから嫌いとか嫌だとか思つてるわけではないんだろう、たぶん。

「でもやつぱり不安になるんだ。俺が園芸部に入りたいって言った時、桜井はすぐ動搖して、渋つてたから」「

どうしてもつて言つう俺に桜井は困つたみたいに笑つて、仕方ないなつて感じで「いいよ」って言つた。

あの時もしかしたら、桜井は内心では俺のこと嫌がつてたんじやないか。

半年間毎日顔を突き合わせた結果、慣れてしまつたけど、本当はあの時、内心では迷惑だつて思つてたんじやないか。

桜井は優しい奴だから、口にしなかつただなんじやないか。

でもまさか桜井にそんなこと面と向かつて聞けるわけもなく、桜井が何を考えているのかわからぬからますます不安になる。

俺、園芸部にいいのかな。桜井と一緒にいて本当にいいのかなつて。

「なんか、お前ら付き合い始めて1ヶ月のカップルみたいだな」

「カップル？」

けたけた笑いながらハルちゃんは俺を指差す。

「相手の気持ちがわらなくて不安になっちゃってる彼女がお前。私は毎日好きって言つてるのに彼は何も言つてくれないとか、本当は一線こえたいのに、奥手な彼氏にじれつたくなっちゃつたり。しまいにや、ねえ私のことどう思つてるの?本当に好きでいてくれてるの?とか逆ギレするんだよな。女々しいお前にはぴつたりじゃん」「女々しいって、」

これはもしかしてバカにされてるんだろうか?

あんまりにも楽しそうに笑うハルちゃんを見ていたら倉本の意地悪な笑みとだぶつて見えて、氣分が悪くなつた。

「ハルちゃん。俺、マジメに話してるんだけど」

「だつてお前見ると面白くてさ。異性間での恋愛ならまだしも、野郎同士の友情話で『不安になる』なんて言葉を聞くとは思わなかつた」

「悪かつたね、女々しくて。俺なんかよりハルちゃんのがずーっと雄々しいよね」

そういうえばハルちゃんは昔からこんな感じで人をからかうのが好きだつたな。

見た目はおとなしくて可愛らしい女の子なのに、人をからかつたりいたずらするのが大好きで、ガキの頃はし�ょっちゅうハルちゃんにからかわれた。ハルちゃんにからかわれると、悔しいつていうよハルちゃんに馬鹿にされたつてショックが大きくて俺はいつもぴーぴー泣いてたつけ。

そんなこともあつてか、好奇心旺盛で気が強くて元気いっぱいなハルちゃんと、臆病で気が弱くて体力もなかつた俺は、いつも周りに「ハルちゃんが男の子で、海生くんが女の子ならよかつたのにね」と笑われて。でもそう言われるのが、ハルちゃんも俺も実はすつごい嫌だつたんだよな。

「大丈夫だよ。海生のことが本当に嫌だつたら園芸部に入りたいつて言つた時点で迷惑だつて断つてるだろ。それを言わなかつたつて

」とは、桜井くんはお前のこと嫌っちゃいなによ

小さい頃の記憶に馳せていた俺はハルちゃんの言葉を理解するまで、少し時間が掛かった。

「でも、それは桜井が優しいから本当は迷惑なのに口にしなかっただけかもしれない」

「そうか？」

「そうかもしないじゃない？」

「それはない」

「何でそう言い切れるの？」

「お前は桜井くんを信用してないのか？」

「質問を質問で返すのは反則だよ」

「誰がそう決めたんだ？」

「ハルちゃん、だから俺は眞面目に話してるんだってば

「俺だつて超眞面目に話してるぞ？」

ダメだ。やつぱりハルちゃん俺のことをからかって遊んでる。俺は本気で悩んでるのに、ハルちゃんだからと思って誰にも言つたことはない気持ちを話したのに、ハルちゃんは俺が悩んでるのが面白くて仕方ないんだ。からかうネタが欲しかつただけなんだ。

「もういいよ、ハルちゃんなんか」

「拗ねるなよ」

「ハルちゃんは俺のことからかいたいだけなんだ」

「そんなことないって」

ハルちゃんは否定する、が、そう言つ顔がすでににやけてる。

「そうやっていつまでも馬鹿にして笑つてればいいだろ」

ハルちゃんなんか大嫌いだ・・・とはさすがに恥ずかしいから言わなかつた。

それを言つていいのは小学生までだろ？。

「待てつて」

顔をがっちり手で押さえこまれ、またハルちゃんと正面から見つめあう形になる。だけど今度は恥ずかしくて目を逸らしたいなんて

気分にはならなかつた。

からかわれた怒りからハルちゃんを真正面から睨み付ける。ハルちゃんの顔はもう笑つていなかつた。

「桜井くんはお前が『怖くないよ』って嘘ついたときなんて言った？『嫌われてたんじやなくて安心した』って言つたんじやないのか？」

「え？」

「そうだ、確かに桜井はそう言つた。『嬉しい』って、大真面目な顔して『安心したつて』。

「普通に考えて、自分が嫌いな人間にそんなこと言つと思うか？ いくら桜井くんが優しい性格で、お前に対して気をつかつていたとしてもそんな誤解を招くよつた発言しないと思ひや」

「誤解つて？」

「『嫌われてたんじやなくて安心した』って、海生には嫌われたくなかつたつてことだろ？ 言い方を変えれば海生には自分のこと好きでいて欲しかつたつてことじやん？ もつといつなら桜井くんは海生と友達になりたかつたつてことだ」

「それは意訳しすぎだと思つうけど」

でも本当に桜井がそう思つていたとしたなら、嬉しいよつな、気恥ずかしこよつな、申し訳ないよつな、やつぱり嬉しいよつな。

「それなら何で桜井は部活以外で会うとあんなにそつけないんだろまるで俺と一緒にいるのを見られるのが嫌みたいに。

「さあ？ 気になるなら聞いてみれば？」

あつけらかんと言つ放つハルちゃんに思わずため息が出る。

「他人事だと思つて簡単に言つてくれるよね。それが出来たらこんなに悩まないよ」

桜井は何で部活以外で会うとあんなにそつけないんだ？ なんてずばつと聞けるほど仲が良いわけじゃないし、そもそもつい半年前まであいつのこと怖がつて避けていた俺があいつにそんなこと言つ権利はない。もしそんなことをきいたら今度こそ桜井に軽蔑される。

それにそんなこと聞いたら、俺が桜井のことを信用してないみたいで失礼だ。

「仮に、」

手を離し、ハルちゃんは畳のうえに放りっぱなしだったタバコを拾い上げた。

「もし本当に桜井くんが優しい振りして実はお前のことを嫌がつていたとしたら、お前はどうするんだ？」

「え？」

きつと俺みたいなのを現金なヤツって言つんだろ？ ハルちゃんがそう言つた次の瞬間にはもう、

「ハルちゃんてば、何言つちやつてんの？」

「は？」

「桜井はねえ、すごい良い奴なんだよ。真面目だし、気配り上手だし、男気溢れて俺とは比べものにならないくらいにかつこいいんだ。その桜井が優しい振りしてだなんて。桜井は本当の本当に優しい奴なんだ。桜井がそんな簡単に人のこと嫌つたり避けたりするはずがないじゃないか」

「は？ いや、だつてお前が」

ハルちゃんは何か言いたげに口を開いたが、それ以上は言葉にならず、代わりに盛大なため息を吐いた。

「要はあれだな、海生は桜井くんのことが大好きで、すごく信頼していて、自分で文句つけるのはいいけど、人にはけなされるのはすごく嫌なんだな」

「やめようよ、やつゆうストレートな表現。それに俺は桜井のことけなしてゐわけじゃないよ。ちょっと不安になるつて言つただけで。それに桜井のことよく知らないハルちゃんに、あいつのこと悪く言われたくなかったから」

「ダメな彼氏のムカつくとこを散々愚痴つて、話を聞いてた友達が賛同して何か言つと、『でも優しいとこもあるんだよ？』とか言つて、結局惚氣話にすり替えちゃうウザップルの彼女みたいなもんだ

な

「カツプルに例えるのもやめよつよ」

「眞面目に話を聞いてやつた俺が馬鹿だつた

「あれのどこが眞面目だつたのさ？」

「でも、それだけ彼を信頼してゐるなら大丈夫だな」

「だから、桜井と俺はカツプルじゃないつてば！」

「今言つた『彼』はそつちの意味じやねーよ

ハルちゃんは一瞬本氣で嫌そうな顔してから、俺の頭をぐりぐり搔き混ぜるよう撫でて笑つた。

「お前の話聞いただけだと、本当に桜井くんがお前に對してそつけない態度をとつてゐるのかどうかはつきりわからん。もし仮にそつだとしても、きっと桜井くんには桜井くんなりの事情があるんだよ。お前が彼のことを大事な友達だと思つてゐるなら、この先どんなことがあつても彼を信じてやれ。お前が桜井くんのこと想つてゐると同じくらいいに、桜井くんもお前のこと大事な友達だと思つてゐるはずだからさ」

不思議だ。花菱に同じようなこと言われたときにはいつもぱずかしくて居たたまれない気持ちになつたのに、ハルちゃんに言われると素直に「そうなのか」と納得してしまつ。

「友達は大事にしろよ」

「うん」

「もう悩むのもやめろよ」

「うん。大丈夫」

俺が頷くのを見て、ハルちゃんも満足したみたいに頷いた。

「しかし、よかつたなあ。昔の海生はチビで弱虫だったから近所のガキどもにいじめられてばつかで、俺以外に遊ぶ相手なんていなかつたから。桜井くんみたいな強くてカッコいい友達が出来て、本当によかつた」

ハルちゃんはようやつとタバコに火をつけ、口にくわえると、すぐくに静かに煙を吐き出した。

「な、写真とかないのか？」

「桜井の？あるよ。そういうえばハルちゃんたち子どもの頃のアルバムも探してたんでしょ？せつかくだからそつちも見よ？」

一度自分の部屋に戻り、枕の下に入れておいたポケットアルバムを取り出す。

学校の「写真は母ちゃんに見つからないようにいつも隠している。」というのも以前、紫音さんと一人でとった写真が母ちゃんに見つかって、何で二人だけで写真をとったんだ、この子はお前の彼女なのか、片思いしてる相手なのか、なんて名前なんだ、どこに住んでるんだなど質問攻めにあい散々な思いをしたことがあるから。

だから母ちゃんには園芸部に入つたことは言つてない。ミーハーな母ちゃんに園芸部に入つたなんて言つたらまたしつこく色々聞かれるだろうし、桜井のことが知れたら絶対家に連れてこいなんて言い出すに違いない。そんなことになつたら面倒だ。

ポケットアルバムを上着の内側に隠し、いそいそと階段を降りる。

「ハルちゃんおまたせ」

「おー。あれ？ アルバムは？」

「桜井のは持つてきた。子ビもの頃のやつはこの部屋の押し入れにあるんだよ」

押し入れの上段、ボール箱のなかに田舎でのアルバムはあった。

「おばさんは絶対海生の部屋にあるからって言つてたのに」

「去年の年末の大掃除の時に場所を変えたのを忘れてたみたいだね」
「いや、あれは実は体のいい口実で、本当は俺の部屋の散策
がしたかつただけだつたりして。母ちゃんならありえるな。
「まあいいや。とにかくアルバム見よ」

それから一人で部屋の真ん中に座り、アルバムを広げた。

一番最初に載っていたのは夏に海に行つたときの写真だった。

ヒトデを捕まえたハルちゃんが、ヒトデを振り回しながら、逃げ
惑う俺を追い掛けている。

「この頃いくつだっけ？」

「俺が五歳くらいの時だと思うよ」

花火をしたとき、西瓜割りをしたとき、七五三や、冬場、雪が降
つたときに雪合戦をしたときの写真。

ハツキリとは覚えていないけど、かすかに記憶の隅に残る楽しか
つた思い出が、一冊のアルバムに写真という形でたくさん詰まつて
いた。

「懐かしいね」

「こんな時があつたんだな」

ページをめくると、今まで二人一緒に写つてきていた写真が、突
然、ハルちゃん一人しか写つてないものに変わつた。て言つても、
ハルちゃんが一人で写つてるのはその一枚だけで、アルバムの一番
最後のページに貼り付けてあつた。

写真の中のハルちゃんはなんだかすこくつまらなさそうな顔でピ
アノを弾いていた。

「何でハルちゃんしか写つてないんだろう? それにハルちゃんピア
ノなんかやつてたっけ?」

「ガキの頃、ホントにちょっととの間だけな。これはうちの親父がと
つたやつだよ。俺がピアノを始めたのと親父が新しいカメラを買つ
たのが同じ頃だつたから、記念にな」

「なんだかハルちゃん不機嫌そうな顔してるね」

「ピアノが嫌で嫌でしちうがなかつたんだよ。ババアに無理矢理ピ

アノ教室に入れられたからな」

「そうだったんだ。俺、ハルちゃんがピアノやつてたの始めて知つたよ」

「忘れてるだけだよ。海生の前でピアノ弾いたことないから忘れて当然だよな。あの日も結局ピアノの発表会に行かなかつたし」

あの日。たぶん俺とハルちゃんが最後にあつた日のことだろ。」「ハルちゃん、俺さ、あの日のこと、本当に全然何も覚えてないんだけどさ、何があつたの？」

ハルちゃんの顔から笑顔が消える。

うわ、また何か聞いたやいけないこと聞いたやつたのか。何で俺つてこう空氣読めない奴なんだろう。

一瞬反省をして、すぐに思い直す。聞いたものは仕方ないし、それに初めから聞かれたくないことなら、思わせ振りにあの日の話なんかしなければいいんだよ。そう思つて自分勝手な考えにまた反省した。俺つてやっぱりデリカシーない、嫌な奴かも。

「あの日、何があつたか知りたい?」

「ハルちゃんはいたずらっ子みたいな笑みを浮かべ、俺の日を見た。

「聞いてもいいの?」

「いいも何もお前だつて知つてる話だよ。忘れてるだけで

「あ、そうか。そうだよな」

でも少しだけ覚えてる。何があつたのかは覚えてないけど、あの日、何かとても嫌なことがあつたつて。その嫌なことがあつたから、ハルちゃんは女の子をやめて男になると宣言をして、ハルちゃんといは離ればなれになつて、悲しい気持ちになつた俺は、結局あの日のことを記憶の片隅に追いやつてしまつたといつわけだ。

「あの日のことを聞いたら、ハルちゃんがどうして男になる決意をしたかわかるんだよね?」

ハルちゃんは少し考えてから、「まあそうだな」と言つた。

「俺があの日のことを聞いたからつて、誰かが嫌な思いをする」とはないんだよね?」

「何の話だよ?」

「だつて母ちゃんは教えてくれなかつたんだよ」

ハルちゃんはどうして女の子をやめちゃうの?ハルちゃんはどうしてお家に帰つちやつたの?ハルちゃんとは今度いつ会えるの?、何度も何度もしつこく尋ねても母ちゃんは「ハルちゃんはそのうちまた遊びに来るから」としか言わなかつた。

頭の悪い俺でも、母ちゃんが何か隠してるつてことはすぐわかるつた。何で隠す必要があるのか、さすがにそこまでは思いつかなかつたけど、あの頃の俺はただ単純に母ちゃんが俺に意地悪してるんだと思って、母ちゃんのことをバカだの意地悪だの散々罵つて泣き喚いて困らせたつて・・・今更だけど、母ちゃん、本当にごめん。

「母ちゃんはあの日なにがあつたか知つてるんだよね?」

「そのはずだよ」

「じゃあやつぱり隠してたんだね」

今ならなんとなくわかる気がする。母ちゃんはハルちゃんに対しても、ハルちゃんの家族に対してなのか、はたまた俺に対してなのかはわからないけど、誰かに対して気を遣つて本当のことをして俺に言わないといたんだ。

「母ちゃんが隠してたこと俺が聞いても、いいのかな。俺が聞いたことで何かまずいことが起つたり、ハルちゃんやハルちゃんの家族やうちの母ちゃんが何か嫌な思いをしたりとか、そういうことはないのかな」

「そうだな」

ハルちゃんは俺の目をじっと見て、ふつと軽く笑つた。

「あの日の約束も忘れてた割りには、予想を遙かに上回る男前に成長したな」

約束。そうだ最後に会つたあの日に俺とハルちゃん、何か約束をしたんだっけ。内容はおろか約束を交わしたことすら俺は覚えてないけれど。

「もうやめるか、この話」

あ、まずい。話が終わっちゃう。

「待つて。一個だけ聞きたい」

学校でやるみたいに、勢い良く手を擧げて言つたらハルちゃんは笑つて、

「はい、真田くん。一個だけ質問をどうぞ」

「はい、えー、最後に会つたあの日に俺とハルちゃんがした約束つて何でしたっけ?」

「さあ何でしよう?」

「・・・ハルちゃんねえ」

真面目に聞いてるんだから、ふざけるのやめてくんないかな。

「うつやつてね、」

ハルちゃんはおもむろに立ち上がり、正面から俺のことを眺めま

と抱き締めた。と言つても俺のが背も高いし身体も大きいから、首に腕を巻き付けて抱きついてきたつて言つまつが正しい。

一瞬なにが起きたのかわからなくてポカーンとしていたら、耳元でハルちゃんが俺の名前を呼ぶのが聞こえて、そしたら急に心臓がバクバク突つ走り始めた。

「ね、海生。約束しよ。いつかね、海生が今よりもっと大きく、ハルちゃんよりもずっと大きくなつて、ハルちゃんを守れるくらい強い男の子になつたら、あたし必ず海生に会いに来る。だから海生も、あたしのために強くたくましい男の子になつて」

さわやくようなハルちゃんの優しい声。ハルちゃんの体温。女子特有のふわりと甘い香りに、柔らかい身体。意識するなと言われても、ついつい考えてしまう、ハルちゃんは女の子なんだ。俺、女の子に抱きつかれてるんだ。

マラソンしたときみたいに胸が息が苦しくて、身体が熱くて、まるで身体中の毛穴が一気に開いたみたいに変な汗がだらだら出てきて、くらくらとめまいがする。

てか、どうしよう!?俺、どうすればいいんだろう!?

「海生、どうした?」「ハルちゃんがやつと身体を離して、不思議そつに首を傾げた。「ハルちゃんに」そどうしちやつたのかー?」突然抱きついてきて、何事かと思つたよ。

「どうもしないよ。海生があの日した約束つて何だつたつけて言うから、教えてやつたんじやないか。あの日と同じシチュエーションなら海生も思い出すかと思つて。場所は違うけど」

「だからつて!そんな、何の前触れもなく、抱きつくなんて、「自分で言つて、恥ずかしくなつてまた身体が熱くなつてきた。」

「顔真つ赤だぞ。何を焦つてんだよ、これくらいで」

ハルちゃんはいたずらつ子の笑みをうかべながら、俺の頭をくしやくしや撫でる。汗かいてるし、今は触らないでいてほしいんだけどな。

「ハルちゃんに」とつては「これくらいでも、俺にとつては焦つたりやうよつなことなの」

女の子に抱きつかれたなんて初めてだし、あんなに女の子と接近するのも初めてだから、すゞいドキドキした。

「女の子に初めて触つた感想はいいから、」「そうゆう言い方やめてよ」

「約束、思い出したか?」「へ?ああ、」

そうだそうだ、ハルちゃんに抱きつかれた衝撃が大きくて、そんな話してたのすつかり忘れてた。

「ごめん、思い出せなかつた」「どううな」

「俺、そんな約束したんだ?」「したんだよ。この約束をした時、しばらくの家に来れなくなる

つてわかつてたから、長く会えなくなる口実を何か考えなきやつて思つて」

「咄嗟に思い浮かんだのがこれだつたんだ？」

「咄嗟に、ていうのとは違うかな？言つべきタイミングだから言つたつて感じ。『あたし、海生としばらく会えなくなるんだ』て言つた途端に『やだやだやだー！』て泣き出したから、たまりかねてなハルちゃんがにやりと笑つて俺を見上げてきたが、俺は「あははー」と乾いた笑いで誤魔化した。情けなさすぎだよ、俺！五歳だから仕方ないかもしれないけどさ。

「まさかあの小さくて気が弱かつた海生がこんな男前になるなんて思わなかつたから、昨日お前を見た時には驚いたよ

ハルちゃんはそう言つてくれたけど、実際はどうなんだろう。ハルちゃんよりずっと大きく、ハルちゃんを守れるくらいに強く逞しい男の子か。クリアできたのは「ハルちゃんよりずっと大きくくらいじゃないか？」

「そんなことねーよ。海生はちゃんと成長してる。あの頃のチビの海生とは比べものにならなくくらい、強くて逞しくてカッコいい男になつた」

「本当にそう思ひ？」

「思ひつて。電車乗り継いで海生に会つに来てよかつたつて、本当に思つてる」

会つに来てよかつた、そう言わると嬉しい反面、また少し恥ずかしくなつてしまつ。ハルちゃんに悟られないよう、「ああ、そう」なんて気のない返事をしておいた。

「そういえば、俺、他にも海生と約束してることあつたんだよな」ハルちゃんがニヤニヤ笑いながら言つ。何だか嫌な予感がする。

「どんな約束？」

「僕たちが大きくなつたら結婚しようね～って」

ああ、やっぱり。ハルちゃんの顔が笑つてたから、たぶんそつち系じやないかなと思つてたけど……。

「俺つてばそんな恥ずかしこと言つたんだ」

「言つたんだよ。海生、あの頃は俺のこと大好きだったからなあ。ど行くにもついてきて、俺の姿が見えなくなると、不安がつて俺の名前を呼びながら泣いてさあ」

「全然覚えてない」

「人間、都合の悪いことは忘れちまつもんなんだよ」

「なるほど」

俺の場合は都合の悪いこと以外にも、何でもかんでも忘れすぎな氣もするけどな。

「そういうや、俺の初恋の相手って海生だったんだよな」

「ぬあつ！？」

また何かハルちゃんがとち狂つたことを言つ出したら、と思つたら、思いがけず変な声が出てしまつた。

「別にそんな驚くよくなことじやねーだろ？ 海生はあの頃一番俺の近くにいた男の子だつたし、俺によく懐いてたしな。可愛くて可愛くて、ずっと側においときたかった。それを恋だと思つてたんだよ。小さい頃なんてそんなもんだろ？」

「そうだね、そんなもんだね」

そんなもんかもしれないけど、ハルちゃんけつこつしつこつことをさらりと言つたな。また心臓が変なふうにドキドキしてきた。

「俺もハルちゃんが初恋の相手だつた・・・かも」

「『かも』じゃなくて、そうだったんだよ。プロポーズまでしてきたんだから」

「あ、そうか」

「てか、俺ら両想いじゃん。どつする？」

「どつするつて何が？」

や、なんとなく聞かなくてもわかつたんだけど、勝手に変な想像して違つてたら恥ずかしいよなあつて思つて、一応きことこうかなあつて。

「本当に結婚しちゃう？」

「ええ！？そつちなの！？」

「何がそつちなの？」

「ハルちゃんのことだから、てっきり『付き合ひへ』とか言つてまた俺のことからかう氣なんだと思つてたから」

まさか『結婚しちゃひ』なんて聞かれるなんて思わなかつたから、『付き合ひ』って言われても照れたり恥ずかしがつたりしないように心の準備してたのに、意味なかつた。

「そりや期待に添えられず悪かつたな」

「いや、全然悪くないけど。でもあんまりやつひと軽々しく口にしないほうがいいよ」

「何で？」

「例えば誰かと結婚したいって本氣で思つて告白しても、[冗談だと思われちゃうから」

大事なことは本当に大事な場面で言つべきだつて、何かで読んだ気がする。

「だから俺なんかにそういうこと言つちゃダメだよ」

ハルちゃんはきょとんと目を丸くして聞いたけど、俺が真面目に話してるのがわかつたのか、柔らかく笑つて、「以後気を付けます」と静かに返事をした。

夕飯の後、改めてアルバムを持ってハルちゃんの部屋を訪れた。ハルちゃんに桜井の写真を見せてあげようと思つて。だけど俺が行つたとき、ハルちゃんは部屋におらず、電気は消され、部屋の中は真っ暗になつていた。

台所で洗い物をする母ちゃんに後ろから声をかける。

「母ちゃん、ハルちゃんがいないんだけれど」

「ハルちゃんなら出かけたわよ」

「何処に? 何しに?」

「駅前のファーストフードだか何処だか。お友達に呼ばれたんだつて。九時頃までには帰るからつて」

「ふーん」

せっかくハルちゃんと一人でアルバム見よつと思つたのに。それに、出かけるなら俺にも一声かけてくれればよかつたのこ。

「暇なら手伝つて」

「暇じやないよ。宿題やるんだから」

本当は宿題なんか出てないんだけどさ。

母ちゃんに何か言われる前に部屋に戻つた。机の上の時計は八時をさしているから、あと一時間くらいで帰つてくるつてことか。

ベッドに横になりぼーっと天井を眺める。

ハルちゃんの友達つてどんな人なんだろ?~?

いつの間にか眠つてしまつていたようだ。誰かに激しく身体を揺さぶられてるなあと思ったら、母ちゃんが電話の子機を片手に俺の顔を覗き込んでいた。

「ハルちゃんから電話」

「俺に？」

「だから起」しに来たんでしょ」

母ちゃんから受話器を受け取り、耳に押し当てる。

「もしもし？」

自分でもひぐりなかずれた声が出た

寝てた

『アーニー』。アーニーは、アーニーのアーニー。アーニーはアーニーのアーニー。

『だけど、部屋見てきてくれないか?』

「ちょっと待つてー

ふふふしながら川せりの部屋に向かふ

「机上书」

『ついでに見てもらつていゝか? 皆川つてやつからメールとか電話

かうになしか

テイスフレイには「新着メールあり」の文字。メールの画面を起動すると、確かに皆川と言つ名前の人から河通かメールが来ていた。

えーとあ、『ごめん、ちょっと遅くなる』7時45分。『今、バ

雷車万葉抄

『やつぱりな、8時に待ち合わせなのにおかしこと黙ったん

— それからつい5分前に、
— 何で返事くれないの？もしかして怒

卷之三

おばさんに遅くなるって伝えといってくれる。

一 何処にいるの？携帯届けに行こうか？

駄前のジーナツ屋。だけどいい。また何かあつたら電話するから『ハルちゃんとの電話を終わらせ、真つ暗闇で光を放つ携帯を見つ

める。

適当に返信しといてくれって言われても、俺が使ってる機種と違

うからいまいち操作が不安なんだけどなあ。

とりあえず暗い中で携帯いじると田が悪くなるから、部屋の電気をつけて、気合いを入れるため腕まくりして、携帯を持ちなおす。それからたつぶり15分かけて、メールを打つた。内容は「『めん!メール着てるの気付かなかつた。怒つてないから安心して。ちやんと待つてるから気を付けて来てね』的なことを書いた。

ただこれだけの文章なんだけど、使い慣れてない携帯だというこど、そしてハルちゃんが普段どんなふうにメールを打つのか、ハルちゃんの性格からして絵文字は使わなさそうだけど、以外と記号は使うんじゃないかな、とか考えながら打つてたら思いがけず時間が掛かってしまった。

自分で打つたメールをもう一度読み直し、誤字・脱字はないか確認をしてから送信を押す。

ディスプレイに「送信しました」の文字が表示され、ようやく一息ついたところで携帯が震え始めた。

「うわっ!」

一息ついたところで突然携帯が震え始めたからびっくりして手から携帯を落としてしまった。

今、メール送ったばかりなのにもつ返信してきたのか??と思いまきや、ディスプレイには0から始まる1-1桁の数字と「皆川」の二文字。

メールじゃない、電話だ!と思つたら、考えるよりも先に電話に出てしまった。

「はい!真田です」

あ、違う、これ家電じゃなくてハルちゃんの携帯なんだつた。真田ですと言つちやつたよ。

電話の向こうの皆川さんは電話を掛け間違えたのかと思つたのか、それとも何かおかしいと思つたのか何も言わなかつた。

「あ、あの、えと、」

しどろもどろになりながら、これはハルちゃんの携帯で、掛け間

違えとかではないです、俺はハルちゃんのイトロで、ハルちゃんが家に携帯を忘れてそれで俺が咄嗟に電話に掛けやつたんですけど、なんとか説明しようとした。

『・・・そちらは長谷部 小春さんの携帯ではありませんか?』

何かを図るような緊張した静かな声が向こうから聞こえてきた。あれ? つてちょっと気になつたけど今は説明をするのが先だ。

「そうです、そうなんです! ハルちゃん、や、長谷部 小春の携帯であります。ハルちゃん家に携帯忘れちゃつて、メール返信していくくれつて言われて、送つたら電話なつて、出ないわけにいかないからつて、それで咄嗟に」

めちゃくちゃで自分で何話してんだかわからなかつたけど、電話の向こうの皆川さんには一応伝わつたらしい。

「やうなんだ。じゃあハルは今、家にいないんだ?」

「はい、そうなんです。・・・あ、あの俺はハルちゃんのイトロで真田 海生で言います」

今このタイミングで言つてどうじやないかもしれないけど、一応言つておいたほうがいいかなつて。

『イトロの海生くん。ハルから聞いてるよ。俺は皆川 修司つています』

あ、やつぱり。て思わず声が出そつになつてこらえた。

母ちゃんから「ハルちゃんは友達に会いに行つた」と聞いたときから、勝手に女人だと思つてたから、電話の声を聞いたときはちょっと驚いた。

ハルちゃんのお友達の皆川さんて男だつたんだ。ハルちゃんには男友達もいるんだ。

『海生くん、』

『はい!』

いかん、ほーつとしてしまつた。

『実はね8時にハルと君の地元の駅で待ち合わせて会う約束をしていたんだけど、電車が事故で止まつて復旧の目処がたつてないよ

うなんだ。遅くなりそうだし、このまま待たせるのもハルに申し訳ないから、今日はやめて別の日にまた会おうって伝えてほしいんだけど。お願いしてもいいかな?』

「あ、はい。大丈夫かと思います。ハルちゃんがいる場所は知ってるんで」

『悪いね。じゃあ頼んだよ、海生くん』

「はい。わかりました」

気のせいか、なんとなく最後の「海生くん」のどこかこう、含んだように笑いながら言つてた気がするんだけどな。

ハルちゃんの携帯を握りしめ部屋を出る。

一度自分の部屋から上着を取つてきて、靴を履きながら奥に向かつて叫んだ。

「母ちゃん、ハルちゃん迎えに行つてくる!」

聞こえているのか聞こえてないのか返事はなかつたけれど、かまわず外に出る。

自転車にまたがつてペダルをこぎだすと、春の匂いのする風が鼻を掠めていった。

ハルちゃんは通りに面した窓際の席について、ぼーっと外を眺めていた。

外から手を振つても気付かないから、店の中に入つて、背中の方から「わっ！」と声をかけた。

ハルちゃんは前のめりになりながら身体をびくつかせ、勢い良くこっちを向いた。

「海生！ 何でお前がここにいんだよ？」

「迎えに来たよ」

「迎え？」

「今日は中止にじよづつて」

ハルちゃんとの電話を切つた後のこと、じつして俺がここに来たのかを説明した。

「ごめんな、勝手に電話に出ちつて」

「かまわないよ」

ハルちゃんは立ち上がりテーブルの上の紙袋を見せた。

「お土産買つたから、早く帰つておばさんと一緒に食おうぜ」

ハルちゃんは歩いて駅まで来たから、帰りは自転車2人乗りをした。

「つーかお前が前で大丈夫か？」

「大丈夫だよ」

「でも昔はいつも俺が後ろに乗せてやつてたのに」

「・・・ハルちゃん、気持ちわからなくもないけどさ、昔は昔、今は今でしょ。俺もあの頃よりは一応成長してるんだよ？」

「だよな」

ハルちゃんを乗せた自転車のペダルは思つた以上に軽かつた。

「ハルちゃん、ご飯ちゃんと食べてるの？」

「食つてるよ」

「ならいいけどさ。女の子ってこんなに軽いんだね」「体重に男女って関係なくね？今は女より軽い男だつていんだろ」「ハルちゃんの冷めた言い方に身体が強ばる。俺また余計なこと言つちゃったかな。

「海生の背中はでっかいなあ」

と思つたらのんきな声が聞こえていらぬ心配だつたかとほつとし
た、と同時に手で背中を撫でる感触がして、またもや心臓が不整脈
を起こしだした。

3月の夜空の下、自転車一人乗りの帰り道なんて、まるで少女漫
画の世界だ。そんな雰囲気で「背中大きいね」なんていかにも女の
子みたいな発言されたら、たまつたもんじやないよ。

「皆川、何か言つてた？」

「えー？」

「皆川が、電話で、何か言つてたかって」

聞き返したら、わざわざ立ち上がって耳元で喋つてくれた。
だから、そつぬつドキドキハラハラするようなことしないでよ。

「何も

「なーんか話があるつて呼び出されたんだよ。電話じゃダメなのか
つて聞いたら直接会つて話がしたいってさ。なんだつたんだろ？」「
さあね」

電話じゃダメで、直接会つて話がしたい。皆川さんの何か含んだ
ような「海生くん」て声がまた耳元で聞こえた気がした。

「告白だつたりして」

「何の？」

「愛の」

一瞬間があつて、ハルちゃんはやたら陽気な酔っぱらいみたいに
大きな声で笑いだした。

「ハルちゃん、近所迷惑だからそろそろやめて」

「バー力。皆川は男だぞ？俺に愛の告白なんとするわけねーだろ」「
ハルちゃんには申し訳ないけど、その理屈、そつぱり意味がわか

らない。

「だつてさ、男の人が女人、しかも仲のいい女人に『直接会つて話がしたい』って。そーゆーことじゃないの？」

「だーかーら、皆川は男で、俺の中学の時からの親友で、俺が男になりたがってるのを知つてて、ずっと応援してくれてたんだよ。そんな奴が今さら俺に愛の告白なんてすると思うか？」

ハルちゃんは軽く笑つて言つたけど、俺は笑つたら皆川さんに失礼なんじゃないかなつて思つた。皆川さんがハルちゃんに恋をしようと決まつたわけじゃないけど。

「今回の性転換の話も皆川だけ、俺の味方してくれたしな。皆川が健全な男子ならもうすぐ男になる女に好意なんてもたねーよ

「だつて反対したらハルちゃん怒るでしょ？」

「あ? なに?」

わざと聞こえないように小さな声で言つた。

例えばもし、皆川さんがハルちゃんのこと中学生の頃から好きで、ハルちゃんと近づきたくて、ハルちゃんに好意を持つてもらいたくて、自分の気持ちに嘘ついてハルちゃんの味方をしていたとしたら? 「皆川さんはハルちゃんが男になりたい理由とか、あの日のこととか知つてるんだよね」

「そりゃ あな」

「だよねー」

俺は知らないのに、皆川さんは知つてる。ただそれだけのことなのに、なんか気分が落ち込んだ気がする。

「じゃあ、俺が知りたいって言つたら教えてくれるの?」

「知りたいなら教えるけど、おまえ自分でいいって言つたんじやないかよ」

「そうだね」

知りたいけど、でもやっぱり自分からは聞きたくない気がした。

だってハルちゃんは自分から皆川さんに話したんだろうから。

「どうした?」

「なにが？」

「なんか元気ないか？」

「大丈夫、何でもないよ」

いや、何でもないわけじゃないんだけど、実のところが何なんだ
か自分でもよくわからないんだよ。

「さあ、早く帰る。母ちゃんが待ってるから」

きつと明日になれば元気になるよ。根拠はないけど、自分にそう
言い聞かせて、ペダルを強く踏み込んだ。

次の日。昇降口につくなり突然腕を引かれ、上履き突つ掛けた状態で、一番近くのトイレ、よりもよつて職員用トイレに連れ込まれた。

まあこの時間は職員会議中だから、先生方に見咎められる心配はないとは思うが、

「でもやつぱり見つかるとまずいと思つや」

俺をここに連れ込んだ張本人・桜井は俺の言葉に苦笑いして、

「恐喝してゐつて勘違いされるかもな」

「そうじやなくて。生徒の職員用トイレの使用は禁止されてるだろ」

「そつゆう意味か」

桜井はふつと柔らかく微笑んだ。

「で、何の話だ？」

わざわざこんなとこに連れてきたんだから、他の人には聞かれたくない話があるってことだろ。

「たいした話じやないんだけどさ、今日の部活のことなんだけど」

「あ、もしかして花菱のことか？」

昨日のあからさまに嫌な顔をしていた桜井のことを思い出した。

「桜井がそんなに嫌なら、花菱には遠慮してもらうよ？」

「そうじやない。今日は部活なしつて伝えたかつただけ。けど、それは生徒会長が来るからわざと部活やらないとかじやないからな」

「わかつてゐよ。今日はやることないんだろ？」

「やることないなら集まつたつて仕方ないもんな。

「三日月祭の準備もあるしさ。たまには休みもいいかなつて

「そうだな。じゃあ花菱には俺から伝えとく

「悪い」

俺は別に気にしないのに桜井は一人一緒にまづいから、時間差つけて出ようと、外の様子を見ながらおそるおそる先に出ていった。

一分待つて、俺もそつとトイレから顔を出し、誰もいないのを確認してから外に出た。

桜井と一緒にいて恐喝されてるって誤解されるのも嫌だけど、たかだか職員用トイレに入っただけで注意を受けるのも嫌だもんな。

「真田海生」

背後からフルネーム呼びされて身体が固まる。振り向こうとしたらぎゅっと腕をつかまれた。

「そのまま聞きなさい。君は今、職員用トイレから出てきたが、あそこは生徒の使用禁止なのは知っているよね？」

ああ、やっぱり見られていた。でも不幸中の幸いといつべきか、関口先生の声ではなかった。まだ若そうだし、生物の山田先生とかかな？

「少し前にB組の桜井もあのトイレから出てきたよ。彼にも話を聞こうとしたが声をかけたら逃げられてしまつてね。君たちは何をしていたんだ？」

「別に何もしてません」

ただ話をしていただけ、やましいことなんか何もない。

「何もないなら何で桜井は逃げたんだ」

「そりや先生に怒られると思ったからじゃないですか？」

すごいくだらない規則だけど、生徒は職員用トイレ使用禁止で決まりだから。実際は中に入つて話をしただけで、トイレは使ってないんだけど。

「おまえたち何か隠してるんじゃないかな」

「別に何も隠してません。てか先生、この体勢なんか変じゃないですか」

普通、お互に向き合つて話をするもんだろ？ 何で先生はそのまま聞きなさいなんて言つたんだろ。

「ひつしたほうが圧迫感あるだろ」

「はい？」

捕まれた右腕、空いてた左腕もひかれ、後ろで強く捻られる。

「いっ！」

「黙つてきなさい。真田、おまえ、本当のトライで桜井とよからぬ計画をたてていたんじゃないのか」

「してないです！手離してください！」

「じゃあ桜井に恐喝でもされたのか？」

「されてませんから」

「口止めされたのか？」

「だからされてませんで」

「嘘をついたつておまえのためにならないぞ」

「誰だか知らないけど、この先生、頭おかしいんじゃないのか？」

背後を見ようとちよつと首を動かしたら、せりて強く腕を捻られた。

「痛いっ」

「じゃあ何をしていた？何か話くらいはしだだ？」

「話しあしましたけど、たいしたことじやないですよ。今日の部活はなしになつたからっていう連絡です」

「連絡？それだけのためにわざわざ職員トイレに隠れたのか？」

「そうです、桜井はそーゆーヤツなんです。嘘なんか吐いてませんから、手え離してくださいよっ」

どんつと背中を思い切りびつかれて、勢い余つて転びそうになる。なんとか手を突いて、体勢を立て直すと、聞き覚えのある嫌味な声がした。

「誰が先生だよ。こんな先生いるわけないじやん」

もしやと思い、背後を確認。田畠がして、よろよろと壁に身体を押しつけてしゃがみこむ。

「倉本だつたのかよ・・・」

「おはよう、真田」

倉本は何にもなかつたみたいに爽やかな朝にふさわしい清々しい笑顔で挨拶をした。

「全然わからなかつた」

「途中で気付くと思つたんだけどなあ。声聞いてわかんない?」「だつておまえ、声変えてただろ」

普段聞いてる倉本の声とはまったく違つた。

「僕ね、演劇部に入つてるんだ。まあそれだけが理由つてわけじゃないけど、演技や声色を変えるの得意なんだよね」

「それから人を騙したりからかつたりするのもね」とつけたして、

倉本は三日月型に口元を歪める。

「どういうつもりだ」

「べつにー。君ら一人がこそこの職員トイレに入つていいくのが見えたから待ち伏せしてただけだよ。何してるんだか気になつてね」

「だつたら普通に声かければいいじゃないかよ」

「かけたさ。言つたら?君の相方の時代遅れのヤンキーに逃げられたんだよ。『ねえ』の一言でギロつて睨まれて、『そこで何してたの?』の言葉でパッと走り去つていつたよ。この僕が声をかけてやつたつていうのにねえ。まったく無礼極まりない」

「まさかと思うけど、その腹いせに俺にあんことしたとかじゃないよな?」

「いいや。腹いせなんかじゃないよ。ただ単に真田をからかつてやりたくなつただけさ」

「あーそー。それは朝つぱらから『苦勞をまです

うぎいんだよ暇人が!つて思つたけど、そんなこと言つたら何をされるかわかつたもんじやないから口にはしなかつた。

「時に真田、」

「はい?」

「少し、面白い話をしてもいい?」

「話?」

「教室に行くまでの間で終わる。それと立てて」

倉本はこいつ満面の笑みを浮かべながら、有無を訊かぬ口調

で言った。

慌てて立ち上がり、先に歩きだした倉本についていく。

「昔々のお話。この学校にも園芸部があつたんだよ。当然ながら超弱小だったけどね。うちの学校は生徒の自主性を尊重する教育方針うんぬんかんぬんで、昔からやたら部活動がたくさんあって、部活動の予算だけでかなりのお金がかかっていたそつなんだ。だから当時の生徒会や生徒指導部は学校にとつて有益になる部活には予算を多く出して、あつてもなくとも変わらないような弱小部には圧力をかけて廃部に追い込んでいたらいいんだよ」

「当時の園芸部も生徒会から圧力かけられてたわけか

「そうゆうこと

「汚いことあるな、生徒会」

いや、でも今の生徒会は違つ。少なくとも花菱は俺ら園芸部のことを応援してくれている。

「その頃の園芸部は学内での活動はほとんど無くな等しかつたからね、仕方ないといえば仕方ない」

「学内での活動は皆無つて、じゃあ園芸部は何をしてたんだ?」

「学校の裏に新藤さんていつおじこさん(新藤さん)が住んでいたんだ」

「おじいさん?」

「そのおじいさんの家の畑を借りて野菜を作っていたそだよ」

「ああ、なるほど。そういうのもありなんだな」

「ありじやないよ。ありじやないから学校から圧力をかけられたんだ。学内での活動実績がないなら生徒会からは予算を出さないって。確かにおじいさんの畑で作っていた野菜の苗は生徒会の予算で買ったものだつたし、出来た野菜はおじいさんを始め、近隣の住民やもちろん学内の教職員や生徒にも配られた。ただし無料でね」
生徒会で予算を出しても、出来た野菜を無料で外部の人間に配ってしまうと、学校にとつての有益な活動にならないってことか。
「で、どうしたんだ？」

「当時の園芸部の部長が、裏庭に花壇を作ろうつて提案をしたんだよ」
花壇と聞いてちょっとドキッとした。当時の園芸部の部長も桜井と同じことを考えていたなんて。

「学内で園芸部の活動をしようにも学校に花壇一つないんだからね。学校からしてみれば学内で活動が出来ないという理由で園芸部を強制的に廃部にしようと想えていたから、この抵抗には驚いたみたいだね。まあでもたつた一人きりの園芸部が花壇を作れつて学校に申し立てるも聞いてくれるわけがない。結局、卒業を待たずして園芸部は廃部においやられた。ちなみに裏の新藤さんはすでにお亡くなりになつている。全部僕らが生まれる前の話だ」

「そりなんだ」

園芸部にそんな過去があつたなんて全然知らなかつた。当時の部長も部存続のために、頑張つただろうに。

倉本は今の俺たちを見て、当時の園芸部の先輩みたいに頑張つたつてどうせ無理なんだから諦めろつて言つたくて、この話をしたんだろうか・・・そもそも何で倉本がこんなことを知つてゐんだろう。

「ただ」の話には続きがあつてね。園芸部が廃部になつたあとも、元園芸部部長はおじこさんの畑を借りて野菜の栽培を続けたりしないんだ

「やつなのか？」

「もちろん、野菜の苗はおじこさんに買つてきてもらつかもしくは自腹で用意してね。それからおじこさんは亡くなる直前に自分の土地を学校へ譲渡する約束をしたらしく」

「譲渡？」

「身寄りのないおじこさんだから、自分の土地を誰の手にも渡らぬ放置するよりも、学校で管理してもらつたほうがいいからって。是非、園芸部のために使つてやってくださいって言つてたらしくよ」「でもおじこさんが亡くなる前に『はまもつ、園芸部は廃部になつてたんだよな』

「元園芸部の部長がやのじをおじこさんと言つてなかつたのか、おじいさんは園芸部が廃部になつたのを知つてて、あえて『園芸部のために』と自分の土地を渡したのか。今となつては確認しようがない」

「そつだな・・・で、この話を俺に聞かせてどうあるんだ？」

「別にどうもしないよ。ただ、気になつてね」

「何が？」

「おまえさんの相方の不良だよ」

「桜井がどうした？」

「あの不良は何で裏庭に花壇を作りたがつてゐんだろうねえ？」

「それは裏庭が『ミミまみれだから。花壇が出来れば『ミミを捨てる生徒が減るんじやないかって。ある意味では学校のためにやつてゐるんだよ』

「ふーん」と倉本は肩をすくめて冷めた口調で言つた。

「たったそれだけの理由で花壇なんか造らうとするかな。生徒指導部兼生徒会顧問の関口を敵にまわして、嫌がらせみたいな雑用任されても、負けじとあの不良が花壇を作りたがってる理由が、裏庭が『ミニだらけだからって、なんか納得いかないんだよね』

「倉本は何が言いたいんだよ」

園芸部の先輩の話だつて、結局なんのために話したのか意図がよくわからないし。

「僕は嘘をついたり隠し事をするのは大好きなんだけど、他人が嘘をついたり隠し事をしてるのを見るとどうにも気になつてね、いつたいなぜ嘘をついているのか、なにを隠してるのか暴きたくなるんだよねえ」

田を細め、口元を三田月型に歪める倉本は、すげく楽しそうに笑つてゐるよつにも見えたし、ものすごく怒つてゐるよつにも見えた。

「・・・なんかその言い方だと、桜井が嘘をついてて、しかも何かを隠してるみたいだな」

「ああ、どうだらうね」

教室の前まで来ると、倉本は真っ直ぐ俺を見上げて、「まあ僕の知つたこつちやないけど」と前置きをしてから、

「あの不良はおまえさんのことを利用しようとしてるよ」「は？」

「信じる信じないはおまえさんの自由。ただ僕は僕のやり方での不良の本性暴いて、制裁をくわえてやるつもりだ。巻き込まれたくなかつたらしばらくあの不良とは距離をおくんだな」

倉本はそれだけ言つと、さつさと教室に入つていつてしまつた。俺はまだ何も言つてないのに。

突然現れて人のこと脅かして腕捻りあげて突き飛ばしたかと思つたら、わけわからぬこと一方的にまくしたてて結局何が目的だつたのかも言わないし、桜井のこともまた悪く言つて、拳げ句の果てには巻き込まれたくなかったらしばらく距離をおけだなんて・・・なんなんだ、あいつ。本当にわけがわからない。

花菱はよくあんなのを良い奴だなんて言えるよな。

「なんか朝から気分悪い」

「ねえ、」

先に教室に入ったと思つてた倉本がドアから顔を出し、訝しげに俺のことを見上げていた。

「なにをばーっとつたつてんのさ。わざわと中に入りなよ。そんなところにいたら邪魔でしようがないだろ」

「あ、うん。ごめん」

何だよ、まだいたのかよ。今の聞かれたかな? つてドキドキしてたら、倉本は口元だけ笑みを作つて、

「せつからく朝から僕がおもしろい話を聞かせてやつたのに、気分が悪いとは残念だね、真田」

「え、いや。これは別に倉本の話が原因で気分が悪くなつたわけじゃない」

「あたりまえだろ。僕は気分の悪くなるような話なんて一つもしないんだから。しかし、慈悲深い僕がおまえのためを思つて忠告してやつたのに、お礼の言葉も出ないとは非常に残念だな。昨日あれだけ言つたのに」

妖しく微笑む倉本を見て背中に冷たい汗が流れる。ヤバい、また何か危うく空氣になつたかも。

「ごめん! や、すみませんでした!」

「何を焦つてんのさ? 別に僕はおまえに謝つてほしいなんて思つちやいないよ。それより、そこにいたら邪魔だから、わざわと教室に入るなり保健室に行くなりしたらどうだい」

「ああ、うん」

言ひ方はやつぱりキツいけど、倉本の怒りスイッチが入らなかつたことにほつと息を吐く。

「そりすることにする。ありがと、倉本」

そう言つなり、笑みを浮かべていた倉本の表情がとたんになんとも面白くなさそうな不機嫌そうなものに変わつた。

「それは何に対するありがとなわけ？」

「え？ 心配してくれてありがとうって意味で言つたんだけど。保健室に行けばって俺のこと心配して言つてくれたから」

そんなに深い意味はなかつたんだけどな。俺、何か変なこと言つたかな？」

「は？ 何？ おまえは僕が保健室に行けばって言つたのを僕がおまえの身体を心配して言つたと思つてんの？」

倉本は軽蔑したような目で俺を見る。

「違うのか？」

「馬鹿かおまえは。なんで僕がおまえなんぞの体の心配をしなくちやいけないんだ。嫌味で言つたに決まってるだろ。そんなこともわからぬのか」

「いや、その可能性も考えてはいたけど・・・」

てか何かまた倉本の怒りスイッチが入つちやつたよつな。昨日みたいに笑顔浮かべたまま突然実力行使されるよりはマシだけど、必ずいっと体をよせて真下からねめつけるように見上げられるのもあまりいい気分はしない。

「別に僕は怒つちやいないよ。だが心配なんかしてないのに心配してくれたなんて誤解されるのはとてつもなく不愉快だ」

「・・・すみませんでした」

この短い時間に一回も倉本に謝つてしまつた。俺、弱すぎ。

「謝つてほしいとも思つちやいないけどね。まあいい。以後気を付ける。自惚れるなよ、阿呆」

倉本は冷たい目で俺を一睨みし、とつとと教室に戻つていつた。

俺はまたもや言葉もなくその場に立ち尽くすしかなかつた。

お礼の言葉もないのかつて嫌味を言つたり、お礼を言つたり言つたで自惚れるなつて怒つたり、あいつ本当になんなの。

「」のまま普通に教室に入つてまた倉本に何か言われるのを恐れて、本当に具合が悪いわけじゃないのに保健室へ行つた。まだ授業が始まると同時に時間があつたし、保健室の先生とは顔馴染みだから、少しきらいならお邪魔していても文句は言われないだろう。

「あれ、海生」

保健室前まで来るとちょうどビデオが開いて中から花菱が出てきた。「おはよ。朝から保健室に来るなんてどうしたの？ 具合でも悪いの？」

「ちよつとな。そうゆう花菱はどうしたんだ？」

「鬼ごっこしてたら転んじゃつてね」

「ほりつ」と学ランの袖を捲り、花菱は腕に貼つた絆創膏を見せてくれた。

「走つたら暑くなるからつて上着脱いでやつたのが逆になくなかったみたいで」

「そうだな。でも何で朝から鬼ごっこ？」

「遊んでたわけじゃないんだよ。朝練してたんだ」

「朝練て？」

まさか生徒会の？

「やだなあ海生、部活の朝連に決まつてゐるじゃないか。生徒会が何で朝練に鬼ごっこなんてやるのさ。そもそも生徒会が朝練するのだから変でしょ。何の練習するのさ」

「そうだよな」

「海生つてば本当に面白くんだから」

俺からすれば花菱のがよっぽど面白く……とこつかおかしいけどな。

「花菱つて何か部活入つてたっけ？」

「うん、剣道部にね」

「剣道部？つてあの剣道部？」

「たぶんその剣道部」

俺が聞き返すと、花菱は頷き、照れたようて笑いながら、「僕ね、じつ見えても実は副将なんだよ」

と言つたものだから、俺は次の言葉が出てこなかつた。
だつて中学生活一年目ももうすぐ終わりつてこの時期に、この学校に剣道部があるなんて初めて知つたうえに、ドジで間の抜けてる花菱が副部長やつてるなんて聞かされたんだ、そりや言葉を失うのも当然だらう？

「剣道部、あつたんだな」

「あつたんだよ。部員は三人しかいなければね
「三人？」

「剣道部は超弱小運動部でね、一年生三人しかいないんだ。三人だけだから試合にも出られないし、試合に出られないとやる氣も出ないから、活動は週三日、体力作りていう名目で鬼ごっこやかくれんぼしてるんだ。そのせいで僕もし�ょっちゅう関口先生から嫌味言われてるんだ」

そりやまあそだらうな。眞面目に練習するならともかく、遊んでばつかりいるんじや関口じやなくとも嫌味を言いたくなる。

「よく廃部にならないな」

「剣道部員三人とも生徒会役員だからね。僕たちが抗議すればさすがの関口先生も余計なことは出来ないよ」

「・・・さようでござりますか」

恐るべし生徒会もとい剣道部。しかしそうゆうのつて職権乱用にならないのか。

「でも勘違いしないでね。剣道部の活動費用はすべて部費でまかなつてるし、予算は一銭ももらつてないんだから」

氣の抜けた顔の花菱が珍しく眞面目な顔で言つから、これは本当の話なんだらう。

「わかつてゐよ」

「ならいいんだ。生徒会がズルしてるとて思われたら嫌だしね」「大丈夫、そんなことは思っていないから」

そんなことは思っていないけど、倉本の話を聞いたあとだから、生徒会の印象がちょっと変わった。たぶん悪い方に。

「で、海生はどうしたの?」

「何が?」

「何がつて保健室に来た理由だよ。怪我でもしたの?」

「いや・・・別に意味はないんだ。始業まだ時間あつたから暇つぶしに」

「保健室は暇つぶしする場所じゃないよ」

「ココ笑顔の花菱にやんわりと咎められ、本当に暇つぶしに来たわけじゃないのに何だか悪いことをした気分になる。」

「ごめん・・・でも本当は違うんだよ」

「違う?じゃあやつぱり具合が悪いの?」

「そうじゃなくて、」

どうしよう。花菱に倉本のこと話していいものか。倉本にこんなひどいこと言われたんだって言つたら、花菱は嫌な気持ちにならなかな。

「もしかしてレオと何かあつた?」

「え?・・・ええ!?」

「あ、やつぱりそうなんだ」

「何でわかつた?」

「海生なんだかすこく疲れたつて顔してるから。昨日の昼休みも放課後もレオの話をしてるときはだいたい疲れたつて顔してたから、そうなのかなあって」

「すごいな、花菱」

鈍臭くて間が抜けてて天然でどつかずれてる空氣読めない奴かと思つてたのに、見てないようでちゃんといろいろ見てたんだ。剣道部副将の名も伊達じやないな。

「で、海生はどうしたの?」

「何が?」

「何がつて保健室に来た理由だよ。怪我でもしたの？」

「いや・・・別に意味はないんだ。始業まだ時間あつたから暇つぶしに」

「保健室は暇つぶしする場所じゃないよ」

「口笑顔の花菱にやんわりと咎められ、本当に暇つぶしに来たわけじゃないのに何だか悪いことをした気分になる。」

「「めん・・・でも本当は違うんだよ」

「違う? ジヤあやつぱり具合が悪いの?」

「そうじやなくて、」

どうしよう。花菱に倉本のこと話していくものか。倉本にこんなひどいこと言われたんだって言つたら、花菱は嫌な気持ちにならなかな。

「もしかしてレオと何かあつた?」

「え? ・・・ええ! ?」

「あ、やつぱりそうなんだ」

「何でわかつた?」

「海生なんだかすぐ疲れたつて顔してるから。昨日の昼休みも放課後もレオの話をしてるときはだいたい疲れたつて顔してたから、そうなのかなあって」

「すごいな、花菱」

鈍臭くて間が抜けてて天然でどつかずれてる空氣読めない奴かと思つてたのに、見てないようでちゃんといろいろ見てたんだ。剣道部副将の名も伊達じゃないな。

「レオに何を言われたの?」

「何つてわけでもないんだけど・・・簡単に言つなら、突然現れて脅されたかと思つたら一方的に不愉快な話をされてよくわからない忠告とやらを受けてお礼の言葉もないのかつて言つからお礼を言つたら怒られたんだ」

「ああ、そうだったんだ」

俺の話を楽しそうに聞いていた花菱は、うんうんと相槌を打ち、

そして口元に笑みを浮かべたまま、首を傾げた。

「ごめん、話がよくわかんない」

「だよな。きっとこんな曖昧で訳のわからない」とを簡単に言おうとしたのが間違いだつたんだよな

だけど、何から説明をすればいいのや。」

「えーっと、朝、昇降口で桜井に会って、職員用トイレでちょっと話をしたんだ。話の内容はたいしたことじやなかつたんだけど、倉本が偶然俺たちがトイレに入るのを見ていたい、何か人に言えないような秘密の話をてるんじやないかって勘違いして、トイレの前で待ち伏せして。桜井が出てきたところを声かけたのに無視されたからその腹いせ・・・かどうかは知らないけど、先生のフリをして俺の腕後ろから捻りあげてトイレで何をしていたか言えって斬されたというか、なんというか・・・

「それはきっと海生のことをからかいたかったんだよ」

「本人もそう言つてたよ」

「じゃなかつたら、職員用トイレに入ったことを注意したかったのか」

「だからつてもう少しやつ方があるだろ」

「もしくはレオは海生のことを心配してトイレの様子を伺つていたとか」

「それは絶対にない」

心配してゐる人間の態度じやないだろ、あれは。

「わからないよ。レオって実は心配性などこもあるからさ。レオはあんまり桜井くんのこと知らないし、怖くて悪い人だつて誤解してるかもしれないし。海生のことを気にしてトイレの様子を伺つていたのに、桜井くんも海生も何事もなかつたように出てきたから拍子抜けしちゃつたんじやないかな」

言われてみれば確かに桜井に何かされたんじやないかって、けつこうしつこく聞いてきてたな。俺のこと心配してたわけではないと思つけど、やけに桜井のことを気にしてた。

「倉本つて、桜井のこと嫌いなのかもな」

「レオがそう言つたの?」

「はつきり嫌いとは言わないけど、桜井に失礼なことばっかり言ってたよ。あいつは嘘を吐いて、何かを隠してるとか、俺のことを利用しようとしてるとか・・・」

あ、また余計なことを言つちやつたかな?と思つたが、花菱は別段気にした様子もなく、「それから?」と話の続きを促した。

「あとは、正体を暴くとか制裁を加えるとか。巻き込まれたくないから桜井とは距離を置けとか」

「それは怖いね」

怖いねといいながらも花菱の顔は笑つてゐる。

「俺が気分悪いなあて言つたら、せっかく忠告してやつたのにお礼の言葉もないのかつて嫌味言われて。気分悪いなら保健室にでも行けばつて言つから、今度はちゃんと心配してくれてありがとうつて言つたのに、自惚れるなつてまた怒られて・・・花菱には悪いけどそ、俺にはあいつのよさがわかんないよ」

まだ学校に来て30分もたたないのに、何だかもう1日授業を受けて、放課後の掃除まで終わらせたくらいに疲れた。

「レオは自分から礼の言葉はないのかつて催促するくせに、本当はお礼なんて言われても嬉しくないつて言つんだ。きっとあまのじやくで照れ屋だから、お礼を言わると恥ずかしくなつちやうんだろうね」

「じゃあ、俺が礼を言つて何か怒つてたのは照れてたつてことなんか?」

「たぶんね。海生にそのタイミングでお礼を言われるとは思つてなかつたから、面食らつたんだと思うよ」

そういうことなら納得できなくもない、かもしれないし、そんなことないかも知れない。

「桜井くんのことをあれこれ悪く言つて忠告したのは、やっぱり海生のことを心配してたからだと思つよ」

「そつか? あいつのことだからただたんに桜井が好きじゃないから悪口言つたただけじゃないの?」

「桜井くんのことがあれこれ悪く言つて忠告したのは、やつぱり海生のことを心配してたからだと思つよ」

「悪口言つたただけじゃないの?」

「好きじゃないからって理由で、意味もなく誰かの悪口を言いたがる人はいるよね」

花菱はにっこり笑つて、けどすゞく静かな口調で言つた。

「でも、レオはそんなことするような子じゃないよ」

「・・・ごめん」

笑顔だつたけど、花菱はたぶん俺の言葉に気分を害した。倉本のことを悪く言われて嫌な気持ちになつたんだろう。

「花菱が倉本のこと庇う気持ちはわからなくもないけど、俺だつて倉本に俺や桜井のことあーだこーだ言われるのは気分よくないぞ」「せうだね。でも、なんの根拠もなく桜井くんのことレオが悪く言ははずがないよ。桜井くんを見て、何かを感じて、それが海生に関わることだったから、忠告とやらをしたんじゃないかな?」

倉本の冷めた目が頭の中に蘇る。

『僕には知つたこつちやない』と前置きしたのも、『信じる信じないはおまえの自由だ』って突き放すように話したのも、本当は心配してゐるのに素直になれないあいつのひねくれた性格のせいだつてのか?

「花菱は何だつてあいつの味方するんだ」「ん？」

花菱が「何の話?」とでも言いたげに首を傾げる。

「誰が聞いたってあいつがやつてることって訳わかんないし、不愉快だし、ひどいと思うだ。それなのに花菱はいつも倉本は悪くないみたいに言うから」

「そりゃ僕はレオの友達だから」

恥ずかしげもなく笑顔で花菱はそう答えた。

「友達だからレオのことを信頼してるんだよ。ただそれだけ」

「友達のこと信じて味方するのはあたりまえのことでしょう?」「そうだよ、あたりまえのことだよ。じゃあ、俺はどうすればいいんだよ?」

花菱のこいつとおり、倉本が本気で俺のことを気に掛けてくれてたなら、倉本の話は全部本当のことってことだ。それってつまり、桜井は俺を何かに利用しようとしてるってことで、同時に俺に何か隠し事をして、嘘吐いてるってことで。

「花菱がそこまで信頼してる倉本の言葉をもう疑おうとは思わないよ。けど、俺は桜井のこと大事な友達だと思ってる。信頼してる。その桜井が俺のこと騙して何かに利用しようとしてるなんて聞かされたら、どうしていいのかわかんないよ」

何で?どうして?何のため?考えてもわからない。だって桜井は俺に何も話してくれないから。桜井が何を考えているのか、俺、本当は全然わからないんだ。だから倉本の言つてることは絶対に間違つてるつてキツパリ否定も出来ない。俺はいったい誰を信用すればいいんだ?

「桜井くんはそんな人間じゃないよ」

花菱はいつもと変わらぬ優しい目をして俺のことを見ていた。

「桜井くんが海生を利用しようとしてるだなんて、そんなことあるわけないじゃないか。仮に桜井くんが海生に何か隠し事をしてたり、嘘を吐いてたとしても、たいしたことじやないよ。誰にだって人に言いたくないことの一つや一つあるだろ？」、時と場合によつては嘘をつかざるをえないときだってあるでしょ。海生だってそうじやない？」

「言われてみれば・・・確かにそういう時もあるかもしれない。

「桜井くんだけ同じ人間だもの、そのくらい普通だよ。そう思わない？」

「そう、だな」

力なく頷き、思わず大きなため息を吐く。

「花菱はなんなんだ？倉本を信頼してるつて言つたり、桜井の弁護したり。おまえはどうちの味方なんだ？」

「僕は海生の味方だよ」

「・・・は？」

予想してなかつた言葉に反応が遅れる。

「レオも桜井くんも自分を守ることを知らない人なんだよ。だからレオも桜井くんも悪目立ちしちゃうんだろうね。だけど海生のことは大事だから、なるべく海生に嫌な思いさせないようにしてるんだ。だから桜井くんは海生に嘘を吐くし隠し事だつてする。レオはレオで桜井くんに気を付けるつて言いたくなつちやうんだろうね。それが結果的に海生を傷つけることになつても、自分の印象が悪くなつてもかまわないんだよ」

「・・・花菱の言つてること、よくわかんないんだけど」

「全部わかんなくていいんだよ。とりあえず、海生はみんなから愛されてるつてことだけわかつてれば」

そう言つて、花菱はいつもの無垢な子どもみたいなビッグスマイルを浮かべるから、つられて俺も引きつった笑みを浮かべた。

愛されてるつて、たぶんいいことなんだろうけど、何でか素直に

喜べなかつたり。

「不安になることはないよ。レオも桜井くんも、もちろん僕だつて海生の味方なんだから」

「ね？」と花菱に言われ、本当はあんまり納得してなかつたけど、頷いておいた。花菱が俺のことを想つていろいろ言つてくれたんだから、これ以上うじうじ言つのはやめよう。昨日ハルちゃんに女々しいつて言われたばっかりだし、それに、

「なんか花菱に『大丈夫』て言わると本当に大丈夫な気がする」

「そう？じゃあこれから海生が不安そうな顔してたらいつでも『大丈夫』って言つてあげるね。大丈夫じゃないことでも、大丈夫って言つておけば大丈夫になるつてことだもんね」

「いや、大丈夫じゃないことを大丈夫つて言われるのはちょっと」

なんか『大丈夫』って言い過ぎて『大丈夫』つてなんだっけ？ていうような変な気分になつてきた。

「大丈夫、大丈夫」

「花菱、大丈夫はもう大丈夫だから。それにしても花菱はすごいな

「何が？」

「倉本も桜井もそんなヤツじゃないつて、はつきり否定できるのが

れ」

花菱のほうがよっぽど桜井のことを信用してる。桜井だけじゃなくて、倉本のことも、信用して、ちゃんと理解して大事にしている。「花菱つて実は俺なんかよりずっと桜井のことわかつてるんじゃないか」

「そうかもしれないね」

花菱は嬉しそうに笑つて、

「でも、海生には海生にしかわからないことがあるんだから。自信持つて、これからも桜井くんやレオと仲良くしてやつてね

「うん」

花菱に悪いから言わなかつたけど、倉本とはあんまり仲良くしたくないんだけどな・・・てか、その仲良くつて言い方やめてくれな

いかな。

しかしまあ俺も花菱を見習いつて、もつと友達のことを信じてやれる器の大きな人間になろう。そう心に決めた。

五限の英語の授業は関口先生が出張のため自習だった。

課題のプリントは出ていたけれど、頭の悪い俺が自力でやつたつて散々な結果になることは目に見えていたので、成績はいつも学年5位以内の花菱と、英語の得意な紫音さんの答えを写させてもらつた。

おかげで課題は10分で片付いてしまい、残つた時間は『園芸部の今後』というテーマで花菱と会議を開いた。

「一番効果的なのはやつぱり人を集めることだよね。たつた一人だけの園芸部じゃ関口先生の圧力に対抗するには肉体的にも精神的にも厳しいと思うし、たつた一人で花壇を作りたい、園芸部設立をと訴えても学校側がOKを出すわけがないよ。同好会を作るにも最低三人は必要だし、何をするにも部員がいなきや始められないわけだ」

「なるほど。でも人はどうやって集めるんだ？俺ら園芸部は奇人変人部とか呼ばれてて、みんなから白い目で見られてるんだぞ？」

「はじめっから園芸部に理解のない人に協力を求めても無理だよ。まず仲のいい友達や園芸部設立に賛成してくれそうな人に声をかけて、部設立規定人数をクリアする。そこから口コミで徐々に協力者を募り、同時に学校側にどうして園芸部が必要なのか、園芸部を設立した際に学校にどんな影響を与えるのか、意見をまとめて文書で提出する。園芸部にとつて最強最大の難関は生徒指導部の関口先生だけど、逆に言えば、その関口先生さえ突破すればもう行く手に立ちふさがる敵はない。関口先生のOKさえ出れば、園芸部が設立できるんだよ」

「でもあの関口・・・先生を納得させるなんて並大抵のことじゃないぞ」

だつてあの人も園芸部設立を邪魔するのはただ単純に桜井が嫌い

だからだろうし。桜井がいる限り、あの人があなたを認めるることはないんじゃないかな。

「こちらが理にかなった方法で正々堂々と戦えば、関口先生だって折れざるをえないよ」

「うまくいくかな？」

「大丈夫。まずは三人で頑張ろっ」

「三人？」

怪訝な顔で尋ねると、花菱はニッコリ笑つて、

「僕も今日から園芸部の仲間入りをさせてもらひよ。園芸部は正式な部活じゃないから、入部届けも何もないけどいいよね」

「……大丈夫なのか？」

「何が？」

「剣道部とか生徒会とか。いろいろ忙しそうじやん」

「大丈夫だよ。園芸部に支障が出ない程度に頑張るから」

「いや、頑張るのは園芸部の活動のほうじゃなくて」

花菱はなんてことなさそうにしていたが、俺はちょっと不安だった。もちろん花菱が俺らの力になってくれるのは嬉しいけど、それが原因で、余計に関口先生の神経逆撫ですることにならないかとか、桜井が花菱のことを嫌がらないかとか。

「それにね、僕の友達で一三人、園芸部に協力してやつてもいいって言つてくれてる人がいるんだ」

「マジか」

そりや有難い。有難いが、なんというか……物好きだな。

「いつそんな話したんだよ？」

「昨日の夕方、海生と別れてから。何だか海生の話を聞いたらいでもたつてもいられなくなつてね。何人か希望ありそうな人にメールしてみたんだ」

「やることが早いな」

「実は今日の放課後に具体的な話がしたいから裏庭に集まつてほしいつてお願ひもあるんだけど」

「え、それは嬉しいけど、いくらなんでも気が早すぎないか？桜井に何も言つてないのに。あんまり先走った行動はまずいんじゃないかな」

「そつか。じゃあ、まず桜井くんに話を通さなくちゃね。今日は部活やるんだよね？」

「それが今日は、」

「やらないの？」

「やることがないし、三日月祭の準備もあるからひとつだ」「三日月祭？」

花菱は少し不思議そうな顔をしていたがすぐに笑顔に戻つて、「じゃあ、せめて話だけでもさせてもらえないかな？みんなにはまた別の日に集まるうつてメールしとくから。僕が一人で行つてもびっくりするかもしれないから、海生も一緒に三人で今後のこと話し合おう。ね？」

「それは、いいけど」

でも、なんだつて花菱はこんなに張り切つてるんだう。昨日俺が話したことがそんなに花菱に影響を与えたのか。

「頑張るうね。みんなで力をあわせて絶対に園芸部を復活させよう！」

自分で言つて、自分で「おー！」と右腕を天井に突き出して、花菱は本当にいつでも楽しそうだ。

「花菱もその話知ってるんだな」

「その話？どの話？」

「昔、園芸部があつたって話だよ」

俺がそう言つと、花菱は右腕を天に突き上げた格好のままかたまつてしまつた。

「花菱？」

「それ、どんな話？」

右腕をゆっくりとおろし、笑顔を俺に向けて言つた。

「どんなって、花菱が知つてると同じ話だよ」

「うん。でも聞きたいんだ」

花菱はじっと俺を見上げる。

「本当に、ただ昔この学校にも園芸部があつたってだけで」

「それだけ?」

「園芸部は弱小部だつたから当時の生徒会に圧力かけられて廃部に追い込まれて」

「それから?」

「当時の園芸部の部長がそれなら学内に花壇を作ろうって、学校に訴えたんだけどダメで、結局廃部になつちやつたって話」

「それで?」

「それでつて?」

花菱は田をパチパチさせて、

「ううん、それで話は終わりなんかあつて思つたんだ」

「ああ、そういうば、新藤さんておじいさんの家で野菜を栽培してたつて話もしてた」

「それから?」

「園芸部が廃部になつたあとも野菜の栽培を続けて……のちに新藤さんが自分の土地を学校に寄付したつて」

「それで?」

「それだけだよ、俺が知つてる話は」

「そう。海生は誰にこの話を聞いたの?」

「倉本」

「レオ?」

花菱は倉本の名前が出たのが意外そうに呟いた。

「レオが何でそんな話を知つてるの?何で海生に話したの?」

「さあ?」

「レオがねー……」

花菱は一番前の席で本を読む倉本に田をやる。いつも笑顔の花菱には珍しく無表情で何を考えているのかは、わからなかつた。

「ちなみに花菱はこの話、誰に聞いたんだ?」

「僕？僕はねえ・・・誰だつたかな？」

花菱はまた笑顔を浮かべ、困ったみたいに頬を搔く。

「いつか誰かに聞いた気がしたんだけど、誰だか忘れちやつたよ」

「そりゃ」

「うん、『ごめんね』」

「謝る程のことじやないけどさ」

なんとなくだけど、また花菱に笑つて誤魔化された気がした。誰に聞いたか忘れたつて、本当に忘れたのか。

「ところでさ、このこと、桜井くんにはもう話したの？」

「いや、まだ・・・花菱や倉本が知ってるなら桜井も知ってるかな」「もしかしたらね。どっちにしろ桜井くんには話さないほうがいいと思うよ」

「何で？」

「何でつて、」

花菱は言葉につまり、一瞬妙な間が出来た。

「あんまりいい話じやないでしょ？これから園芸部設立のために頑張ろうって言つてるのに」

「まあ、確かに」

「だから、ね」

「わかつた、桜井には言わない

「それがいいよ」

その時、誰かに見られている感じがして目をやると、つい今しがたまで本を読んでいた倉本が冷めた目つきでこっちを見ていた。

花菱は気付いていないようだったが、倉本は俺と視線が合つと目を細めてニヤリとすゞく嫌な感じに笑つた。

放課後、桜井のクラスに行つた。事前に「会わせたい人がいるから放課後時間くれ」とメールをしておいたが、「四時頃までなら」と返事をくれた桜井をSHRや掃除当番やらで三時五十分まで待たせてしまった。

「桜井、ごめん！」

誰もいない教室の一番後ろの席に座り、桜井は読んでいた本から顔を上げて、俺を見た。

「遅かつたな」

「ごめん、ホームルームが伸びた上に掃除が終わらなくて」

「まあいいけど、俺もそんな時間ないんだ。悪いけど、用事があるなら早く済ませてくれ」

「ああ、うん」

ちびりと後ろに視線をやると、一七〇センチ笑顔の花菱が俺を見上げている。

「何してんだよ？」

「あーうん、あの、桜井、怒らないで聞いてくれな」

「何だよ。何か俺が怒るようなことしたのか？」

「いやあ、そんなつもりはないんだけど……念のため確認。怒らないでな」

桜井は訝しげに頷き、「で？」と話を促す。

「実は俺のクラスメイトで園芸部に入りたいって言つてるヤツがいて」

俺がそう言つと、桜井は目を真ん丸くして、

「それはそれは……その何処が怒るような話なんだ？」

「それが、」

口で説明するより、実際に対面してもらつたほうがいい。後ろ手で合図をし、花菱を前に出す。

「こなんにちは、桜井くん」

俺の後ろからひょっこり現れた花菱はお得意のジッグスマイルを浮かべ、右手を差し出した。

「君とは小学校から一緒にだけまともに話したことではないから、あえてはじめましてと言わせてもらつね。2年じ組在籍、生徒会長兼剣道部副将の花菱聖です。縁あって園芸部のお手伝いをさせてもらつことになりました。これからどうぞよろしく」

桜井は差し出された右手をしばし茫然と見つめていたが、花菱の自己紹介が終わるなり、信じられないという顔を俺に向けて言った。

「どうゆうこと?」

「こーゆーこと」

はにかみ笑顔で答えると桜井は顔をひきつらせ、何か言いたげに、花菱を見下ろした。

「そーゆーこと」

花菱は桜井の手をとると「よんじくねー」と楽しそうに握手をした。

わかりきつていたことだつたが、桜井の答えは、「気持ちは嬉しいけど、生徒会の手は借りたくないかいだつた。

「違うよ桜井くん」

花菱はめげずにニヤニヤ笑う。

「手を貸すのは生徒会じゃなくて、僕、花菱聖つていう一個人だよ。僕が所属してゐる生徒会の意志とはまったく関係ない、個人の感情で言つてるんだ」

「どつちだつて一緒に。関口の息がかかつてゐるヤツなんかと楽しく部活動なんかできるかよ」

その言い方はひどいんじゃないか? そう思つても気の弱い俺は、さつきから不機嫌そうに顔をしかめ、椅子にふんぞり返り、会話はしても、花菱と田を合わせようとしない桜井が怖くて、なんだか申し訳なくて口に出来ないでいる。

桜井が本当に顔も見たくないくらいに花菱のことが嫌いだつたなんて思わなかつたから・・・桜井にも花菱にも悪いことしちやつたよな。

「あんたが園芸部に入つたらどーせまた関口の野郎に花菱を脅して無理矢理入部させたんだろとか、くだらないいぢりやもんつけられることに決まつてゐる。面倒なことはごめんだ」

「僕がどんな部活に入ろうと関口先生には関係ないと思つけどな」

「そう思つてるのはあんただけだよ」

「大丈夫だよ。僕は桜井くんに脅されたりしてません、自分の意志で園芸部に入りましたって言つから」

「誰が信じるんだよ、そんな話」

「誰も信じなくたつていいじゃない。嘘吐いてないし悪いことだつてしないんだから、堂々と胸を張つてればいいんだよ」

「そうゆう問題じゃない。俺はあんたに園芸部に関わってほしくないんだよ。あんたみたいな真面目でいい子ちゃんが俺みたいな出来損ないの不良に関わるとすぐに新しい悪い噂がたてられる。はっきり言って迷惑なんだよ」

今のは俺の胸にもぐさつときた。だつて俺もどっちかつていうと真面目・・・というか地味でおとなしいタイプで、実際俺が園芸部に入ったせいであることないこと噂流れまくってるし、そもそも園芸部に入ったのも桜井に無理言つて頼み込んだからだし・・・。

「そんなの桜井くんの見た目に問題があるんであって、僕は関係ないじゃない。だつて桜井くんは誰とつるんだつて結局は悪い噂たてられちゃうでしょ？ 海生がいい例だよ」

花菱は何の悪哉れもなくさうりと笑顔でとんでもないことを言いやがつた。

これには花菱のこと無視を決め込んでいた桜井もさすがに目を剥いた。

「桜井くんは一人でいたつてワルだ不良だつて言われるんだ。そう言わるのが嫌ならもつと地味で目立たない格好をすればいいんだよ。誰かに悪く言われるのが嫌で僕を園芸部に入れたくないっていうのは、入部を拒む理由にならない」

桜井は花菱を睨み付けて口を開いたが、それを遮るように花菱が言った。

「それに、本当の本当に他人のことをそつそつてるなら、寂しい話だよね」

口元に笑みを浮かべたまま、まるで何かを訴えるかのように花菱はじつと桜井を見つめた。

面白くなさそうな顔して桜井も花菱を見ていたが、ふいと顔を背けて、決まり悪そうな調子でつぶやいた。

「言い過ぎた。悪い」

「いいよ。気にしてない。僕こそ失礼なこと言つてごめんなさい」

「いや、あんたの言つことは正しいと思う。でも俺はあんたの入部

を許可する気にはなれない

「困ったねえ」

困ったというならもつと困ったような顔をすればいいのに、花菱は笑ってる。まったくたいしたやつだよ、こいつは。

一触即発の危険な状況を回避できた安心から思わずため息を吐く。花菱には悪いけど、連れてくるんじやなかつた。こんなに桜井と相性が悪いとは。相性が悪いというか、桜井が花菱を一方的に嫌がつてんだよな。まあ今日の花菱はやたら強気で好戦的でしつこくて、桜井でなくとも嫌がるかもしれないけど。本当にひやひやした、まさかあの桜井にあんなこと平氣で言つてのけちゃうんだもんな、天然というのは恐ろしいよ。

「海生もいいかな？」

「え？ なに？」

いかん、すっかり物思いに耽つてしまつた。

「僕、このあと体育科の松長先生に頼まれて、体育倉庫の片付けをしなくちゃいけないんだ」

「はあ」

「で、偶然、桜井くんも先生に頼まれて体育倉庫の片付けをすることになつてたらしくてね、もし海生が嫌じやなかつたらこの話の続きを倉庫の片付けをしながらしない？ ってことなんだけど」

つまり俺にも倉庫の片付けを手伝つてほしいと言つてるわけか。「かまわないけど。桜井の用事つて倉庫の片付けのことだったのか？」

桜井はばつが悪そうに首を縦に振つた。

「まさかとは思うけど、それつて関口先生から」

「違う。保健体育の時間に居眠りしてな。そのペナルティーだ

「たかだか居眠りで倉庫の片付けか？」

「松長先生厳しいからね。僕は今度の三日月祭でカラークーンを使いたいって話をしたら、倉庫に閉まつてあるから探すついでに片付けしてくれつて言われちゃつて」

「そんなの体育委員に頼めばいいのに」

「今の時期はみんな三日月祭の準備で忙しいから頼みづらいんだよ、
きっと」

花菱はそう言つたが、俺はまだ何かがひつかかっていた。

なんだろう、こつ・・・うまく言えないんだけども、なんとなく
疎外感。一人が体育倉庫の片付けを頼まれたのはただの偶然なのに、
なんとなく仲間外れになつたような気分。変だな。

「僕、松長先生のところに行つて鍵借りてくるね。さきに倉庫に行
つてて」

パツと走りだした花菱に桜井が後ろから怒鳴るような声を上げる。

「廊下を走るなつ！ 転ぶぞ！」

花菱はびっくりして脚を止め、きょとんと桜井を見る。

「歩いてけよ。倉庫は逃げやしないんだから」

「・・・そうだね。そうする」

「「忠告どーもー」とひらひら手を振りながら花菱は教室を出て
いった。

「まったく、騒がしくて落ち着きがなくてガキっぽくて、よくあん
なんで生徒会長が勤まるよな」

冷めた目で花菱を見送る桜井に、おぞるおぞる声をかける。

「だから花菱が嫌いなのかな？」

「なに？」

意味がわからなかつたらしく、桜井は俺の顔を見上げた。

「花菱が騒がしくて落ち着きがなくてガキっぽい生徒会長だから嫌
いのか」

「別にそうゆうわけじゃない」

「じゃあ桜井は花菱の何がそんなに嫌なんだよ。あいつは良い奴だ
よ。桜井のことにも園芸部のことにも理解がある。あいつは本氣で
俺たちの力になりたいって思つてくれてる」

明確な理由もないのに、突き放すのはひどいじゃないか・・・口
にはしないけどさ。

「あいつは駄目だ」

桜井は真っ直ぐ前を見て、何かを睨み付けるみたいな目で言った。
「誰かに手を借りたいなんて思つてない。海生ひとりで十分だ」
それはどういう意味なんだろう？疑問に思つても口に出す勇気はない。「そうか」とだけ言つて話を終わらせた。

「付き合わせて悪いな。さっさと終わらせよう」

「うん」

先に歩きだした桜井の後ろを、いつものように少しだけ離れて歩いていた。

体育倉庫の片付けをしてる間は話合ひにひらひなかつた。

というのも体育の松長先生からは四時に集合と言わっていたのに、俺らが行つたのは四時半過ぎ。たかだか三十分と思うが、時間に厳しい松長先生は一分の遅刻も許してくれない。

「時間を守れない人間は最低だ」と説教されたあと、先生も含め四人で片付けをした。しかし先生はただ片付けをしていたわけではなく、私語厳禁を言い渡し、俺たちがちゃんと働いてるかをしつかり監視していた。そんな状況じや園芸部の今後なんて話しあえるわけがなく俺たちは黙々と倉庫の片付けをするしかなかつた、というわけだ。

「まあこんなもんだる。おまえらもう帰つていいぞ」

先生からそう言われたとき時計の針は六時を回つていた。

「悪かったな三人とも。三日月祭の準備で忙しいのに。助かつた」松長先生は俺たちを差別せず三人とも同じ態度で接してくれることにしてちゃんと生徒を労つてくれるから好きだ。

「頑張つたご褒美」ということで個包装のクッキー一枚と缶のお茶をもらひ、俺らは校門にむかつて歩いていった。

「で、さつきの話しなんだけどさ、」

花菱が嬉々として口を開きかけたのと同時に、前を歩く生徒を見て「あれ?」つという顔をした。

「レオだ!」

嬉しそうな声を出して、花菱は走りだした。

「だから走ると転ぶつての」

桜井がぼやいた瞬間、本当に花菱が派手な音をたててすつ転んだ。

「うわ、痛そう」

「自業自得だろ」

桜井・・・花菱が嫌いだからつてその言い方はちょっと冷たくな

いか？

「何やつてんだよ、会長」

と思ひきや、一番近くにいる倉本よりも先に花菱のもとに行つて手を貸してやつてる。桜井には例え自分の嫌いな相手でも、転んだ人間には手を差し出す優しさが備わつてゐるようだ。何だかそれを見たら少し安心した。

そうだよ、桜井はそうゆうヤツだよ。優しくて、気配り上手ないヤツ。

「ごめんねーありがとー」

花菱はへらへら笑い、桜井の手を借りてひょいと起き上がつた。
「珍しい組み合わせだね」

その様子を近くで見ていた倉本は口元を歪め、楽しそうに言つた。
「生徒会長と札付きの不良が一緒に下校だなんておかしな光景だ」

「あつちに海生もいるよ

花菱は俺の方に目をやると満面の笑みを浮かべ、「早くおいでのー」と手招きした。

不機嫌MAXな顔で倉本を睨み付ける桜井と、どこか人を馬鹿にしたように笑いながら桜井を見つめ返す倉本。そんな険悪な雰囲気に気付かず、二人の間で無邪気に手を振る花菱・・・正直、このまま一人で帰りたい、あの三人のなかに入りたくない。でもそんなことしたらあとが怖いんだよなあ。

「真田、ダッショ！」

倉本にそう言われ、反射的に三人のもとに駆け寄つてしまつた。突然走ってきた俺に桜井と花菱は驚いたような、何か言いたそうな顔で俺を見てきた。

「真田は犬みたいなとこがあつてね、普通に言つてもダメだけど、強い口調で命令するということをきくんだよ」

「誰が犬だ！」と言い掛けたが、倉本に目で「黙れ」と言われてしまつたので、口を閉ざさずをえなかつた。

「へえ、レオつてばすごいね。海生のこと犬みたいに言つこときか

せられるくらいに仲良くなつたんだ」

「仲良くなつたんじゃない。真田がそれくらい僕のことを恐れ、崇拜するよつになつたんだよ。人と犬のよつに、僕らは主従関係で結ばれてるんだ」

だから誰が犬だよ！何が主従関係だよ！いつから俺がお前のこと

を崇拜するよつになつたんだよ！！

言つてやりたいことは山ほどあるのに、情けないかな、倉本の冷たい視線が怖くて何も言えない。

「すごいね！一人ともいつのまにそんな仲になつたの？」

なつてないから！何でもかんでも倉本の言つこと真に受けんなよ、

花菱！

「海生、」

桜井が哀れむような目で俺を見上げる。

「お前もいろいろ苦労してるんだな」

「ありがとう、桜井。同情してくれるのは嬉しいけど、俺は倉本と主従関係とか結んでないからな」

桜井はポンと優しく俺の肩を叩いた。わかつてんだかわかつてないんだか、いまいち不安が残る反応だ。

「で、三人お揃いでこんな時間まで何をしていたの？」

「体育倉庫の片付け」

「ああ、関口の園芸部に対する嫌がらせみたいな雑用を花菱が手伝つてやつてたわけね」

「違うよ。頼まれたのは僕と桜井くんで、手伝つてくれたのが海生なんだ」

「花菱と桜井が倉庫の片付けを頼まれたの？」

倉本の言いたいことがわかつたのか花菱は手を振つて、

「そうじゃなくて、僕は松長先生に三日月祭で使うカラー「ローン」を借りるついでに。桜井くんは、」

「保健体育の授業で居眠りしたペナルティーで」

「そつなんだよ。だから別に一人一緒に頼まれたとかじゃないんだ。」

偶然、松長先生が倉庫の片付けを頼んだのが僕と桜井くんだったってだけなんだ」

「ああ、そう、そうなんだ。それは丁寧に説明してくれてどうもありがとうございました。誰もそんなこと尋ねちゃいないけどね」

最後の一言は余計だよ！見れば桜井はムツとしたようすでさつきよりも厳しい目付きで倉本を睨んでいる。一触即発再び、か？

「レオはこんな時間まで部活?」「

空気を読んだのかたまたまか(たぶん後者だらうけれど)いいタイミングで花菱が話題を教えてくれた。

「演劇部は舞台の稽古があるし、茶道部はお茶会の準備があるし、三田月祭まで大変だね」

花菱の話からすると倉本は演劇部と茶道部の両方に所属しているようだ・・・。そういうえば同じクラスの紫音さんは確か茶道部の部長をしていたはずだ。こんな性悪が部員じや、紫音さんも大変だな。

「それもあるけど、今日はちよつと調べものをして図書室に寄つてたんだ。明後日から学年末試験だしね」

「試験?」

ヤバい。忘れてた。そんな俺の心情を見透かしたように倉本はクスッと笑う。

「倉庫片付けの手伝いは感心だけど余裕だね、真田。2学期の期末、数学かなり悪かつたんじやなかつたつけ?しかも本当なら赤点だつたのに先生におまけしてもらつてなんとか赤点免れたんだよね?」「何でそんなこと倉本が知つてんだよ。いや、でも今回は本当に赤点かもしれない」

「大丈夫だよ、海生。赤点とつても進級はできるんだから」

笑顔の花菱にそう言われ、俺は力なく笑う。

それはそうなんだけど、春休みに補習受けなきやいけないし、それに赤点なんかとつたら母ちゃんになにを言われるか・・・。

「赤点が嫌なら勉強すればいいだけの話だろ。数学は最終日なんだし、今日からやれば4日は勉強できる」

桜井のまつたくもつてそのとおりな正論に、花菱が「はいっ!」と元気よく手をあげる。

「そしたら皆で勉強会やうう。明日から短縮授業になるから、放

課後どこかに集まつて勉強しよ

「「げ、」」

俺と桜井の声が重なり、お互に顔を見合わせる。俺は倉本が嫌で、桜井は花菱と倉本、一人とも嫌なのに四人で勉強会なんて。「いいよ、俺らは。花菱も倉本も自分たちだけで勉強したほうがはかどるだろうし、そのほうがいいだろ」「あたりまえだろ」

ハンと馬鹿にしたように笑い、倉本は俺に目をやる。

「でもね、自分の勉強時間犠牲にしても、慈悲深い僕がお前たち阿呆一人に勉強を教えてやるつて言つてるんだよ」「なつ

何だよその上から目線！ちよつと成績いいからつて人のこと馬鹿にしすぎだろ！？つーか勉強会しようて言つたの花菱だし！

「レオは学年一位以外になつたことないもんね。でも桜井くんも頭いいよ。いつも学年二十位までに入つてるもの」

「ね？」と笑顔を向ける花菱に「まあ」とお茶を濁す桜井。

「へえ、それは意外だな」

桜井には失礼かもしけないが、確かに意外だ。

「でも、何で花菱はそんなこと知つてるんだ？」

「定期テストの度に学年三十位までの点数と名前が発表されるじゃない。あれで見たんだ」

「ふーん。僕は見たことないから知らなかつたよ。見なくても自分の順位なんてわかりきつてるし」

倉本め、本当に嫌味なヤツだな。

「でも、花菱だつて僕には及ばないにしろ成績はいいほうだろ？」

「うん。だいたいいつも五番以内には入るよ」

「それなのに自分よりずつと後ろにいる桜井の順位を知つてるんだ」「うん、知つてるけど？」

花菱は「何かおかしいかな？」と首を傾げる。

「いいや。ただ自分の順位だけ確認できれば十分じゃないかなつて

思つただけ。だつてそうだろ？ほとんど面識のない他のクラスの生徒の順位をわざわざチェックする必要がどこにあるつて。僕ならそんなことしないけど。花菱は生徒会長だし、他の生徒の成績の動向もしつかり把握してるんだ。さすがだね

「そんな僕なんてまだまだ・・・」

倉本はうつすらと微笑み困つたように頬を搔く花菱を見据える。初めは笑つていた花菱も視線に耐えられなくなつたのか目を伏せ、「とにかくさ」と元気よく言った。

「せつかくレオもやる気になつてくれてるんだし、四人で勉強会しようよ。お互いにお互いの苦手分野カバーしあえれば赤点なんか怖くないから。ね、海生？」

「え、俺？」

「そうだよ。僕らの中で赤点候補生は海生だけなんだから、肝心の海生がやる気出さなきゃ意味ないでしょ？」

確かにそのとおりなんだけど、その言い方ちょっととひどくない？

「桜井くんはいいよね？ 参加してくれるんだよね？」

桜井は一瞬驚いたように目を見開き、すぐさま、対花菱用の不機嫌顔になつて「やだね」と言つた。

「何で？」

「一人で勉強する方が好きだからだ」

「みんなで勉強するのも楽しいよ？」

「別にあんたらと楽しく勉強なんかしたくねーよ」

桜井は俺の方に向き直り、「そうゆうことだから」と言つなり、一人でスタッフ歩き出した。

「桜井くん帰つちゃうよ？ 海生、追いかけなくていいの？」

「・・・ああ、いいよ。どーセ帰り道違つし、夜にでもメールしと

く

「そつか

花菱は目を二三度パチパチしばたかせると、ニッコリ笑い、

「じゃあ僕も帰るね。桜井くんとは同じ方向だし、園芸部の話しあ

したいから一緒に帰る」

止める間も無く、花菱は走り出す。今の会話が聞こえたのか、桜井の歩く速度が若干上がった気がする。

「大丈夫かな」

桜井は花菱のこと苦手みたいなのに、しつこくされてぶちきれた
りしなきやいいけど。

「さて、僕らも帰らうつか

「え？」

てつくり一人で帰るもんだとと思っていた倉本は俺の顔を見上げると、ハンゼルスマイルを浮かべさらりと言った。

「僕、チャリ通なんだ。今日は特別に真田を途中まで乗せてってあげよう」

優しい言葉の裏に隠された真の意味に気付き、そろそろと尋ねてみる。

「それつてもしかして、乗せてやる代わりに俺に自転車漕げって言つてる？」

「それ以外に何があるんだい？」

「・・・だよねー」

倉本に爪が刺さるくらいがつちり腕掴まれてるから逃げるに逃げられない。

人の心配なんてしてる場合じゃなかつたか。

昨日の夜はハルちゃん、そんでもって今日は倉本とチャリンコ一人乗りの帰り道。

ハルちゃんとは『テートの帰りつて感じでちょっとドキドキして楽しかった。倉本を乗せて帰るのは決して楽しいものではないが、制服でチャリンコ一人乗りつて、何かすごい青春つて感じした。

「青春だねえ」

鼻唄交じりに後ろの倉本は楽しそうに言う。

「『一ゆーの大好きなんだよね。『青春』て言葉を絵に描いたような感じ。健全な学生のあるべき姿だよね」

人に自転車漕がせといつてよく言つよ。でも自転車一人乗りのどこの健全なのはわからないが、『青春』だと感じてる部分では初めて倉本と意見があつたな。

「時に真田、おまえはなぜ僕の忠告を聞かないんだ?」

「うわー、でたよ。この感じだとためんどくそそうな話聞かされそうだ。」

「えーなにー?」

わざと聞こえなかつたようなふりをしたら、倉本に思い切り背中を叩かれた。

「痛つ!」

「何故、僕の話を真面目に聞こいとしないんだと言つてる?」

「・・・だつてよお、俺が誰と仲良くしようが俺の勝手じゃんかよ無視したらまた何かされると思つたから、しぶしぶ答える。」

「あの不良はお前に嘘をついて隠し事をしてるんだぞ」

「逆に聞くけど、その嘘とか隠し事つて具体的にどんなん?」

「今はまだ言えない」

「なんだそりや。でもさ、人間生きていくうえで人には言えないこと言つ必要のないことつてあるじゃん。桜井が俺に隠し事してるつ

てのも、その類いじやないのか？」「

もし本当は違つたとしても俺はそう信じてる。

「あの不良がお前のことを利用してるとしてもか？」

「利用してるって言ってもさ、実感がわかないんだよ。俺自身いつたい何に利用されてんだかわかつてないから。園芸部復活のために雑用手伝わせるのが利用してるって言つなら俺は喜んで利用されてやるよ」

「まいったね。これじゃ」

そう呟いたように聞こえたが、「何がまいるんだ？」と聞くよりも倉本が喋るのが早かつた。

「真田は何であいつの肩を持つ？」

「別に肩を持つてるわけじやないよ。あたりまえのことしてるだけで」

「あたりまえのこと？」

いぶかしげな声からすると、倉本は俺が何を言いたいのかわからないらしい。

「桜井は俺の友達だから。友達のことを信じて味方するのはあたりまえのことだ」

て、花菱の受け売りだけどさ。

「友達？」

「そう、友達」

「友達、ね」

一瞬の間があつて、突然倉本が大きな声で笑いだした。

「何だ！？どうした！？」

あんまり大声であんまり楽しそうに訳も分からず笑うもんだから、半ば本気で倉本は気が狂つてしまつたのかと心配した。

そういえば昨日の夜も自転車乗つてたらハルちゃんが突然笑いだしてびっくりしたつけ。何これ。デジヤブてやつか？

買い物帰りと思われるおばさんにすれ違いざま冷たい視線をあびせられ、俺は慌てて倉本をたしなめた。

「倉本ちょっと落ち着けよ。俺たち何か変な目で見られてる
「それは困るな。変なのは僕じゃなくて真田なんだから」「何でだよ」

「まさかそこで友達だからなんて言葉が出るなんて思わなかつた。
小学生や幼稚園児じやあるまいし、よくそんなことが恥ずかしげもなく言えたもんだね」

俺も初めて聞いたときは恥ずつーて思つたよ。

「でも大事なことだる」

「そうだねー。友達は大事にしなくちゃねー・・・まつたくおめでたいヤツだよ、お前は。まあせいぜい桜井と一時の友達」ひっこを楽しみばいこや。ビーセンのうしあうしつとは口も利けなくなるんだから

ら

「あのさあ、

自転車を止めて、後ろに座る倉本を肩越しに見やる。

「倉本は俺に何か恨みもあるの？」

「お前は僕に何か恨まれる覚えがあるのか？」

「じゃあ桜井に恨みがあるのか？」

「あの不良とはまともに口をきいたこともないけど。なんだい急に真面目な顔して」

倉本は笑顔を浮かべ「意味が分からない」と俺を見る。

自転車を降り、でも倒れないようにしつかりハンドルを握つたまま、倉本に向き直る。

「倉本は俺に何をしたいんだ？」

「別に何も？」

「だつたら何で俺に突っかかるような言い方するんだよ」

「僕はまったくそんなつもりはないよ。お前が勝手に僕の言葉に過剰に反応してるだけだろ？」

「昨日も今日も俺のこと馬鹿だの阿呆だの散々罵つたじゃないかよ
「別に罵つてはいない。僕は事実を述べたまでだ。それともお前は自分のことを馬鹿でも阿呆でもないと思ってるのか？」

思わずぐつと言葉につまる。そう言わると返す言葉が出てこない。自分でも馬鹿だなってしみじみ思うことがあるし。

「ついでに言うならお前は頭も悪いし要領も悪い。運動神経もよくないし、無駄に背が高いわりに小心者、どうしようもない愚図で救いようのないヘタレだ。おまけに、」

「もういいよ！」

倉本から見て俺がどんだけ情けないダメ人間かはわかつたからもう勘弁してくれ！

「倉本は俺のことが気にくわないから人の気持ちを考えずポンポン平気で本当のこと言うんだな。よくわかつたよ」

倉本は答えない。面白そうな顔してこの後の展開を期待して見ている。

「倉本の言つとおり俺は馬鹿だし阿呆だし無駄にでかい愚図だよ。全部事実だから俺は何言われても怒らない」

怒らないけど、人並みに、いや、人並み以上に傷ついているんだぞと心の中でつけたす。

「だけど桜井のこと悪く言つのはやめてくれよ。倉本は笑つたけど、桜井は俺にとつて本当に大事な友達なんだ。倉本が知らないだけであいつは優しくてすごい奴なんだよ。その桜井が俺のせいで悪く言われるのは嫌なんだ」

ましてや倉本みたいなねちっこくて嫌みつたらしい性悪に馬鹿にされるのは腹立たしい通り越して、桜井に申し訳ない。

「倉本がいつたい桜井の何を探つてんのか分かんないけど、俺はあいつが隠し事してようと嘘ついてようといい友達でいたいんだ。頼むから桜井のこと、園芸部のことはそつとしておいてくれ」

「やだ

「即答がよ！」

ちよつとは考えてくれたつていいのに！

「僕の趣味は人の面倒事に首を突つ込んで引っ搔き回したいだけ引っ搔き回すことなんだ。それをやめろって言われてやめられるわけ

ないだる」

脣を三田円型に歪め妖しく笑う倉本を、出来ることならこのまま自転車ごと横倒しにしてやりたかった。

「真田は勘違いしてるね」

「何を?」

「僕は決して真田が嫌いなわけじゃないんだよ」

寂しそうに笑い、倉本はそう言つた。

「え?」

戸惑う俺に、倉本はの例のとびきりの笑顔を向けると、

「僕はね、真田だけじゃない、桜井も含めて、お前ら園芸部が大嫌いなんだ」

清々しいくらいにはっきりと言われ、思わずよろめき倒れそうになるのをなんとかこらえる。

「不良少年と“ぐく普通の平凡な少年がひよんなことから協力して園芸部を作ることになつた。権力振りかざして力でねじ伏せようとする学校との闘いの中で友情を深めながら、一人は園芸部設立を目指す・・・なんて青春ドラマでもやつてるつもりなの?毎日毎日裏庭のゴミを拾つて、関口に押し付けられた雑用こなして、挫けそうになればお互いに励まし合つて支えあう。なんと美しい友情だろ?」
本当、美しすぎて気持ち悪いくらいだよ。園芸部を設立して花壇を作つて誰が何の得をするつてのさ?同じことの繰り返しで全然報われないので、『でもいつかきっと・・・』なんて思つてるんだろ?
馬鹿馬鹿しくて言葉も出ない。そーゆーの全部がうつとおしくて目障りなんだよ。花壇も園芸部も必要ない。僕はお前らを排除したいんだ。そのためにあの不良桜井のことを徹底的に調べあげて弱味を握り僕の言つことをきかせる必要がある

「だから真田こそ僕の邪魔しないでよね」と倉本は軽い調子で言い放つた。

それなのに俺は何か固くて重い物で頭をガツンて殴られたみたいな強い衝撃を受けていた。

こんなに楽しそうに、こんなに酷いこと、口に出来るヤツがいるなんて、信じられなかつた。

「どうしたの真田? 何とか言いなよ?」

田の前の倉本は今、自分が言つたこと、まるで何でもないみたいに平氣な顔をしてゐる。

「お前、ひどいな」

倉本は表情を変えず俺の顔を見上げる。

「俺、倉本のこと好きじゃないけど、好きにはなれないけど、口は悪いし性格もものすごい悪いけど、根はいい奴なんだうなつて心の何処かでひそかに思つてたんだよ」

だつて花菱がそう言つたから。「レオはいい子なんだよ」つて言つたから。花菱が言うんだからそんなんだうなつて思おつとしてたのに。全然まったく見当違つた。

「ひどいな、倉本は。ひどこと言つても平氣な顔してられるなんて、ますますひどいな」

「忠告を聞かないお前が悪い。僕は言つたよね、巻き込まれたくないから桜井から離れろつて」

冷たい声。田を細め倉本は不適に笑う。

「真田。今言つたことは僕からの最後の忠告だと思え。僕はひむう人間なんだよ。お前がやめろと言おうがひどこと言おうが僕は僕の好奇心が満たされるまで何もやめるつもりはない。もうこれ以上僕にあーだこーだいぢやもんつけられて傷つきたくないと思つなら、あいつから離れろ」

倉本は自転車から俺の手をはずすとそれに股がり振り向いた。

「明日の勉強会。お前は来ない方がいい。僕は何を言つかわからないかり」

それだけ言つと倉本は自転車をこいで行つてしまつた。

右も左も分からない、中途半端なところに身も心も置き去りになつて、俺はただ途方にくれるしかなかつた。

倉本、恐ろしい奴。何度も何度もため息をついて、いつもの倍の距離をとぼとぼ歩いて帰った。いつもの倍、疲れた。ようやく家の明かりが見えた頃、外灯の下で誰かが立ち話しているに気付いた。ハルちゃんと、もう一人は誰だろう？

「おお、遅かったな」

俺が声をかける前に、ハルちゃんが先に言つた。

「ただいま」

ハルちゃんの向かい側に視線を投げ掛ける。

街灯の下にいるせいがやけに青白く見える男。大学生くらい。ハルちゃんの友達？

「皆川、海生」

ハルちゃんが顎で交互に俺らを示し、お互に「ああ」と納得する。そうか、この人が。

「こんばんは」

「どうも」

「昨日はありがとうね」

「あ、いえ、」

人見知りがちで口下手な俺はこうゆう時、うまく会話ができない。緊張のせいがなんだかどもつてしまふのだ。

皆川さんは俺のことを爪先から頭のてっぺんまで舐めるように見て、笑つた。

「背、高いんだね」

「はあ、まあ」

「海生、早く入りな。今日はカレーだつて」

気をつかつてか、話の邪魔だつたのかハルちゃんがそう言つてくれた。

皆川さんに軽く会釈し、中に入ると玄関で立つた

に出迎えられた。

「見た！？」

「何を？」

「ハルちゃん。と、その彼氏

「彼氏つて・・・ああ皆川さんのことか」

「あの人、皆川くんて言つの？」

「そう。でも彼氏じゃないよ。友達だってハルちゃんは言つてた

「本当に？」

「本当だよ。それにこれから男になろうつって言つてるハルちゃんに
彼氏なんているわけないじゃないか

「あ、そうか」

「何惚けたこと言つてんだよ」

脇をすり抜け階段を上がる。

「着替えたらすぐに降りてきなさいよ。」
「飯にするか？」

部屋の中は当たり前だが真っ暗だった。鞄を放り投げるとそのままベッドに倒れ込む。

田を閉じると、朝、桜井とあつたところから、倉本と別れるまでの一日の出来事が断片的に蘇る。

特に印象的で強く記憶に残っているのは強気な花菱の発言、終始顔が怖かった桜井、それから倉本の発した非情な言葉の数々。

人間好き嫌いあるから仕方ないといえば仕方ない。でも、ただ何か気にくわないうつて理由であんなボロクソに人のこと罵倒していいはずがない。

だけど倉本はまったくもつてそれを悪いことだと思つていない。
むしろ悪いのは倉本の忠告とやらを素直にきかなかつた俺だと言わ
れた。そんな話あるかつての。

そういえばショックのほうが大きくて、倉本に何にも言い返せなかつたな。

「性悪自己チュー野郎め。頭のおかしい奇人変人はお前の方じゃな

いか

・・・やめよつ。誰もいない部屋で悪態ついても虚しくなるだけだ。情けなさ過ぎてもうため息も出ない。

花菱は何あんな奴のこと、「いこ子」なんて言つたんだろう。全然いい子なんかじやない、最悪な奴じやないか。

倉本は桜井のこと嘘を吐いてるなんて言つてたけど、それ言つたら花菱のほうがよっぽど嘘つきだ。

「暗い部屋で何やつてんだ？」

ハルちゃんの声がしたのとともに明かりがつけられ、まぶしくて一瞬目を閉じてしまつ。

「おばさん呼んでるわ。飯にするから早く来いって

「ああ、うん」

でも何だかすぐには動きたくない気分だつたり。のろのろと体を起こし、上着を脱ぐ。

「何かあつたか？」

「え？ 何で？」

「元気ないじやん」

「そんなことないよ」

ハルちゃんは俺の頭に手を置くと、わしゃわしゃと髪を撫で回した。

「海生は昔からこれ好きだつたよな。何があるといつもこれをやつて、最初のうちは安心するのか笑つてるんだけど、そのまま泣き出して、近所の悪ガキにいじわるされたーとか言つんだ」

「そんなこともあつたね」

田を閉じてハルちゃんの手の暖かさを感じる。なんだろう、ただそれだけで本当に心のギスギスした部分が丸く落ち着いてきた気がする。

「ありがとハルちゃん。ちょっと落ち着いた」

「やっぱ何かあつたんだな」

「うん。でも大丈夫」

昨日の今日で桜井に関することで落ち込んでるなんて話したら、また女々しいって言われるかもしれないしな。

「皆川さん来てたんだね」

「おう。あいつ驚いてたぞ。海生が想像以上に男前だつたつて「皆川さんは俺のことどんな奴だと想像してたんだろう。

「そういえば・・・昨日の話は聞けたの?」

ちょっとドキドキしながら尋ねるとハルちゃんは首を横に振った。

「いや、また明日話すつて」

「明日?」

「久しぶりに一人で遊びに行こうつて。映画見て適当に買い物でもして、飯でも食おうつて」

ハルちゃんは軽く言つてのける。が、

「それってデート?」

「デート?いや、そんな雰囲気じゃねーだろ。なんせ俺と皆川だからな」

ハルちゃんはケラケラ笑つているが、俺は笑えない。

「でも一人で行くんだろ?」

「そうだよ」

「じゃあやつぱりデートじゃん」

「だから違つて。友達と一人で遊びに行くだけなんだから。お前
だつて桜井くんと一人で遊びに行つたりするだろ? それと一緒に
その例えはあまりよろしくない。だつて俺と桜井は一人で気軽に
遊びに行くような仲じゃないから。説得力に欠ける。」

「ハルちゃん、男になるつて自覚あるの?」

「もちろん」

「だつたら何でこれから性転換する予定の女が男とデートになんて
行くんだよ」

「だーかーら、デートじゃないつての。何回言えばわかるんだよ
「ハルちゃんことつては『デート』なくとも、『恋』することつては
デートだよ」

「お前もしつこいね」

ハルちゃんは呆れたような顔で俺を見下ろしたため息をつく。

「だいたいにして俺が誰と遊びに行こうと俺の勝手だろ。何でお前
がムキになるんだよ」

「俺はハルちゃんの弟分として心配してやつてるんじゃないか。何
かあつたらどうするの?」

「何かつて何だよ? 何を心配してんだよ。そんなこと言つて、お前
か」

ハルちゃんは「ヤーヤ笑いながら俺と目線を合わせて言つた。

「俺が他の男と出掛けるのにヤキモチやいてんじゃねえの?」

咄嗟に返す言葉が出てこなくて、息がつまってしまう。ハルちゃんはさういってやしながら、「図星か?」と俺の頭を片手でぐし
やぐしや撫でた。

「そんなんじゃないし。何言ひてんの。ハルちゃんちよつと自意識過剰だよ」

手を振り払い、下を向いて部屋を出る。

「そりやあ悪かつたな」

軽い調子。全然悪いと思つてない。俺は本気でハルちゃんのこと心配してゐるに、ハルちゃんのこと思つて言つてんのに、真面目に話をしてゐるのに・・・。

「海生、」

ハルちゃんの手が背中に触れる。

「「めん、怒つたか?」」

せつときとは違う。ちょっと不安そうな声。謝るなら始めからあんなこと言わなきやいいのに。

「怒つてはいない」

ただ悲しいとこつか寂しことこつか空しことこつか、そんな気がしただけだ。

「俺つて真面目な話をしとるの」「真面目に話を聞いてもらえないんだなつて思つただけ」

「そんなことねーよ。そりや今のは結果的にちょっとからかつたようになつちまつたけど。でも真面目な顔で尋ねるよいなことでもないからや」

「何が?」

「海生は俺が皆川と出掛けのるのヤキモチやこしてゐのかつて

「だからつ!」

「そりだつたら嬉しいなつて思つたんだよ」

前に回つてハルちゃんは正面から俺を見上げる。

「泣き虫弱虫で俺がいなきやなんも出来なかつた海生がこんな男前になつて嬉しかつた反面、実はちょっと寂しかつたんだ。桜井くんのこともさ。お前があんまりに熱心に話すから、いい友達が出来てよかつたなつて気持ちと、なんとなく海生をとられたような変な気持ちとがあつて・・・だから昨日もつこ意地悪な質問しちやつたし」

意地悪な質問？・・・で、

「桜井が実は俺のことを嫌つてたひつてやつ？」

「そつ。お前、すうじー一生懸命に桜井くんの弁護して、言ひとじやなかつたつてちよつと後悔した。やつぱイトコの姉ちゃんと仲のいい男友達じや勝負にならねーよな」

勝負つて、ハルちゃんはいつたい何を桜井と争つてたんだひつ。
だから海生が皆川にたいしてヤキモチやいて、イトコの姉ちゃんとられて寂しいなつて思つてくれてるなら嬉しいなーつて。本当に自意識過剰だな」

そんなことないよ。そう言いたかったのに、その後なんて言えればいいのか、言葉が見つからなくて、結局何も言えなかつた。

「悪い、何か変な空気になつちやつたな」

違つて、ハルちゃんは悪いことなんてしてないのに。謝る必要なんてないのに。

「さつさと飯食いに行こひづ。おばさんに怒られちまつ」
階段を降りよつと先に歩き出したハルちゃんの腕をたまらず掴んでしまつた。

ハルちゃんもびっくりしてたが、当の本人である俺もびっくりしていた。何やつてんだ、俺。

「どうした？」

ハルちゃんは優しく微笑み俺に向き直る。

「何か言いたいことがあるのか？」

「言いたいことはたくさんあるはずなのに、言葉がうまくつむげない。

何を言えばいい？

今、言わなくちゃいけないことは何だ？

「とりあえず、」

「とりあえず？」

「ハルちゃんは悪くないから謝らなくていいよ

「そつか」

「それと、」

「うん?」

「ちょっと・・・や、だいぶ・・・かなり、皆川さんにヤキモチや
いてる、かも」

「そうなのか」

「俺の知らないことたくさん知ってるから」

俺とハルちゃんの空白の九年間、そのうちの何年間かは皆川さんはハルちゃんと一緒に過ごしてて、その時を経て今はハルちゃんの親友で一番の理解者で、俺が一番知りたいこと、ハルちゃんが男になりたがってる理由を知ってる。

「ハルちゃんは、皆川さんのこと友達として信頼してるし、大事に思つてるんだよね」

「もちろん」

「じゃあ、もしも皆川さんが、」

そんなことを聞いてどうするのか自分でもよくわからないけど。

「男になるのやめろって言つたら、ハルちゃんはやめる?」

俺の質問にハルちゃんは目を丸くしたが、すぐに真顔に戻つた。

「やめないよ。俺は俺の意志で生きてんだ、テメーの指図は受けねえって言つてやる」

「そうだね」

それを聞いて、何故だか少しだけ心中にあつたモヤモヤした雲のようなものが消えた気がした。

「何でそんなこと聞くんだ?」

「何でもない。早く」飯食べに行け!」

ハルちゃんを促し、階段を降りる。

問題は山積みで何にも解決はされてない。でもとりあえず今は腹

「しらえが先だ。」

明日も頑張らなくちゃいけないんだから。

女の子同士でトイレの個室に入る・・・でのせいかと思ひナビ、例えはそれを誰かに見られたとしてもそこまで変な目で見られるこではないと思う、あくまで個人的な見解だけど。

でもそれが野郎同士だったら、どうなんだろう。しかもそれがフアミレスの男女兼用トイレの、一つしかない個室。

もし万が一若いおねーちゃんとか入ってきて、順番待ちしてる時に、中から複数の男の話し声や物音がしたら不審に思うんじゃないだろうか。

不審に思うだけならまだいい、もしくは出でたところをばっちり目撃された上に汚物でも見るような冷たい目で一瞥されたら、それが全然知らない人でも、違うんですけどー。やましいことは何もしてません！で全力で否定するしかないだろう。

「真田、話聞いてる？」

倉本に捕まれた前髪を思い切りひっぱられ、慌てて「聞いてる！聞いてます！」と返事をする。

「ならないんだよ。で、」

腕を組み倉本はドアに寄りかかるとついつい微笑みを浮かべる。

「昨日、あれだけ言ったのに何で勉強会に参加してるんだか、その理由を知りたいんだけど？」

「俺だつて来るつもりはなかつたんだよ。話せば長くなるんだけどな、」

「簡潔にまとめろ。あいつらに覚られる。無駄話してる暇はない」

あいつらとは店内の窓際の席で仲良く？勉強をしてる桜井と花菱のことだ。

「桜井に頼まれたんだよ。三人じゃ気まずいから来ててくれつて」

「僕の忠告よりも不良の脅しのが怖かったわけか」

「そうじゃなくて本当に頼まれたんだ」

いつものように、昇降口で靴を履き替えていたら、昨日の朝みた
にまたもや腕を引っ張られ、職員トイレにつれていかれた。

「だから職員トイレはまずいつて、桜井」

桜井は外の様子を伺い、誰も来ないのを確認するなり、腰をほぼ
直角に曲げて頭を下げた。

「桜井！？何事！？」

そんな外が気になるなら職員トイレなんて入らなきゃいいのにと
いう文句は、驚きのあまりどこかへ飛んでいった。

「海生、頼む。今日の勉強会一緒に行つてくれ」

何を言われるのかと身構えていたら、なんだそんなこと……。

「て、急にどうした。桜井行かないって言つてたのに」

「事情が変わったんだ。お前こそどうしたんだよ。今朝メール見て
びっくりしたぞ。俺は海生が行くと思ったから参加することを決め
たのに」

事情つてどんな事情？と聞くよりも早く桜井が身を乗り出してき
た。

「頼むよ、海生がいなかつたら俺一人であの一人の相手をしなくち
ゃいけなくなる。そんなの耐えられねーよ」

「そう言われても……」

桜井の気持ちはよくわかる。俺が桜井の立場だつたら確かに嫌だ。
・・花菱には失礼だけど。でも行つたら行つたで、また倉本に何を
されるか分からぬといふ恐怖もある。

別に俺は倉本に屈したわけではない。あれだけ言われてまだ懲り
ないのかと自分で思うが、俺はこれから先も桜井との付き合いを
続けていくつもりだ。倉本に何を言われようが関係ない・・・関係
ないけど、今日の勉強会は別。行つたら痛い思いするつてわかつて
行くほどバカじやない。それにもう、本当に、昨日の事でこたえ

たんだ。学校では同じクラスだから嫌でも一日一回は顔を合わせてしまうが、それ以外の場所ではなるべく倉本と関わりたくない。「桜井もそんなに嫌なら行かなきやいいんじやないか？別に強制じゃないんだから」「……」

「それは出来ない」

「何で？事情が変わったって言つてたけど、何がどう変わつて、勉強会に参加することになったんだ？」

桜井は答えない。田をそらし、眉を下げ困ったようにトイレの床を見つめている。学園一の不良と謳われる（？）桜井でもこんな顔するんだなどしみじみ思つていたら、逆に訊ねられた。

「海生は何で行くのやめたんだよ」

「桜井と花菱が帰つた後に成り行きで俺と倉本の二人で帰ることになつていろんな話をして最終的に倉本に来るなつて言われたから」「何だつて倉本はお前に来るななんて言つたんだ？」

説明してもよかつたんだけど、長くなりそうだし、倉本が桜井のことこう言つてたんだつて話すのは、俺にとつても桜井にとつてもたあまりいい氣はしないだろ？と思つたから「ちょっと倉本の機嫌を損ねることを言つちゃつて」と誤魔化した。

桜井は納得してなさそつたけど、それ以上深くは追求してこなかつた。

代わりに「頼むよ。後生だから」を繰り返し、結局俺はまたもや倉本の忠告（と言ひ名の脅迫？）を無視し、勉強会に来てしまつたと言つわけだ。

学校は一時以降立ち入り禁止のため、近所のファミレスまで先に三人で行き、勉強をしていたところに一人遅れて倉本がやってきた。俺の姿を見るなり「馬鹿が」と俺にしか聞こえないよう低く唸るように呟いた。

それから、

「一分したらおいで」

小声で囁くと、倉本は「ちょっとトイレ行つてくるね」と席をた

つた。

で、一分たつてトイレに向かつたといふ、中で待ち構えていた倉本にむんずつと前髪つかまれて強制的に便器に座らされ・・・今に至る。

「俺だつて倉本の忠告とやらでおとなしく従いたかたよ。だけど桜井がどーしてもつて言つから、友達の頼みを無下には出来ないだろ?」

倉本は額に手をあて、盛大なため息をついた。

「どうして僕の周りはこうつも人の話を眞面目に聞かない無禮で不愉快なヤツが多いんだ・・・まあいい」

俺に対する文句らしきことを一人でぶつぶつ咳きながらトイレのドアを開けた。

「さつさと出る。お前に聞くことはもう何もない

ようやくお許しを得て、俺はいそいそと個室から出る。

「じうなつたつて、僕はもう知らないからな」

冷たい眼差しで俺を一瞥すると、倉本はトイレを出ていった。

それがどういう意味なんだかはよくわからなかつたが、その一言で早くも俺は自分の行動を後悔し始めていた。

それは唐突にきた。

「昔、うちの学校に園芸部があつたって知つてる?」
「は?」

「え?」

「なに?」

みんな黙々と自分の勉強をしていたから、突然倉本にそんなことを言われ、ちゃんと返事が出来なかつた。

「昔、うちの学校に園芸部があつたんだよ」

倉本は俺たち三人を順番に見回し、「知つてた?」と質問を繰り返した。

「知つてたも何も、お前が話したんだろ」

「真田はあの時が初めてだつたね」

倉本は頷き、隣の花菱を見る。

「花菱も知つてたよね? 真田に話を聞く前から
「うん、まあね」

花菱も笑顔で頷き返したが、どことなく歯切れが悪い。

「桜井は?」

「そんなこと聞いてどーすんの?」

桜井は質問に答えず、逆に倉本に尋ね返す。

「何か理由がなきや訊いちゃ いけない?」

「時間の無駄だろ。今日は勉強しにきたんだからよ」

今日の桜井は倉本が来てからずっと機嫌悪かつたけど、心なしか何だか急に不機嫌の度合いが大きくなつたような……。

「勉強の息抜きに少し面白い話をしてあげよつと思つてね

「誰も頼んでねーよ」

桜井はイライラしたようにテーブルを指で叩く。

「そうだよ。僕は誰にも頼まれちゃいない。僕は僕の考えがあつて、

」の話をしようと思つたんだから

「レオの考えつてなに?」

花菱が訊ねると倉本は一やつと口元を歪め、静かな口調で言つた。
「桜井が花壇を造り、園芸部を復活させようとしている真の理由を
暴こうと思つてね」

真の理由?

「倉本、それは説明しただる。俺らは裏庭の『ミミ』をなくすために
「そう思つてるのはお前だけだよ。何度も言つてるだる。桜井は嘘
をついて、園芸部を復活させる真の理由を隠している。それに間違
いはないんだ」

倉本は右手の人差し指を、拳銃に見立て、桜井の鼻先に突き付け
る。

「僕はだいぶその真実に近づいてきている。いや、もうほとんどわ
かっていると言つてもいいくらい」

「俺がいつたいどんな嘘を吐いて何を隠してゐつて言つんだよ」

桜井は真正面から倉本を睨み付ける。

倉本はそんな桜井の殺氣をものともせず、「いいの?」と軽く微笑
む。

「真田の前で言つても? 真田に知られたくないから隠してたんじや
ないの?」

何でそこで俺の名前が出てくるんだよ。

「言えるもんなら言つてみろよ。残念ながら俺には身に覚えがない
もんでね、何のことやらさっぱりだが」

口ではそう言つが、くだらないこと言いやがつたらただじやおか
ない。桜井の身体からはそんなオーラが滲み出でているようだつた。
「せつ。なら教えてあげるよ」

倉本はにんまり笑い、口を開いた。が、

「あ つ!」

と突然、花菱がすつとんきょうな大声をあげ立ち上がつたものだ
から、俺たちはもちろん、周りの客や店員までもが、何事かと一齊

に花菱を見つめた。

花菱は眉を八の字に下げ、心底悲しそうに、

「コーヒーに砂糖入れちゃったよー。甘いの嫌いなのこー」

思わず全員がくしきとすつこける。いや、本当にすつこけはしないけど、心理的にはそんな感じ。これがマンガなら本当にこの場で全員すつこけてたことだ。

「アホ！ そんなことでこちこち騒ぐんじゃねえよー何事かと思つたじやねえかつ！」

代表で桜井がツツ「//」を入れる。周りの客も店員もすついで剣幕で花菱を怒鳴る桜井を見ると、息を呑み、瞬時に目を逸らした。

「何で甘いの嫌いなくせに砂糖なんか入れるんだよー。」

「レオの話を夢中で聞いてたら無意識に……」

「なんくだらねーことで騒ぐなー！ 店内であんなでかい声出したら周りの迷惑だろうがつ。ちつとは考えろー！」

花菱よりも、むしろ花菱を怒鳴る桜井の方が迷惑だよ。その証拠に後ろの席のおばさん方、レシート持つて慌ててレジに向かつたぞ。みんな桜井が怖くて、そわそわ落ち着かなくなつてる。

「つーか、ドリンクバーなんだから新しいの持つてくりやいいだろ？」

「だつてまだ一口も飲んでないんだよー もつたいないじゃない」

「そう思うなら飲めよ」

「だから甘いの飲めないんだつてばー！」

「何なんだよお前は！ めんどくせえなー！」

俺の目の前で繰り広げられる桜井と花菱の口喧嘩。さつと止めた方がいいんだろ？ けど、怖くて口を挟めなかつたり……。桜井が怒鳴るつて怒るところを始めて見たけど、想像通りの恐ろしさだ。しかし、そんな桜井と互角に（？）言い合える花菱もすつい。こいつは恐れるということを知らないのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8817p/>

みんな仲良し

2011年11月27日19時45分発行